

愛知県博物館協会20年史

愛知県博物館協会

目 次

温故知新—愛知県博物館協会20年史発刊にあたって—

I. 20年の歩み

愛知県博物館協会20年の歩み	1
愛知県博物館協会20年の歩みの中で	5
愛知県博物館協会における主導理念と組織形態の変遷	8
愛知県博物館協会年表	10

II. 愛知県博物館協会の現状

東海地区博物館協会と愛知県博物館協会の特色	26
愛知県博物館協会加盟館の抱えている諸問題	28
学芸部門の諸問題	36
歴史部門研究会の現状と課題	39
美術部門研究会の現状と課題	41
管理部門の諸問題	45

III. 愛知県博物館協会の将来を語る

座談会「博物館の情報交換収集について」	48
若手学芸員大いに語る	52

IV. 愛知県博物館協会の発展

愛されるものに	60
博物館への期待	61
博物館に思う	62
愛博協の思い出	63
地域博物館の連携	64
美術館・博物館に望むこと	65
子供と博物館	66

V. 博物館活動—事例研究—

民俗資料の保存と利用	68
専門博物館と友の会	70
個人が博物館をつくる事の意味と問題点	72
愛知県美術館の小さな進歩—美術館改修工事を省みて—	75
博物館における歴史講座の開設について—企画段階を中心として—	78

ボランティアと地域研究.....	83
明治建築の保存と野外博物館.....	85
共同企画展の成果と課題.....	87
郷土文化の誉名古屋そろばん工匠.....	90
常滑市民俗資料館の経過と今後.....	92
モンキー友の会の社会接近.....	95
市立名古屋科学館の当初構想とその後の見直し.....	97
神社仏閣における文化財の意味.....	99
愛知県博物館協会加盟施設一覧.....	102
編集後記.....	104



温 故 知 新

——愛知県博物館協会20年史
の発刊にあたって——

愛知県博物館協会は、お陰をもちまして設立20周年を迎えることができました。

これもひとえに歴代の会長はじめ役員各位の御労苦と関係各方面の御理解と御協力の賜でありまして、ここに厚く御礼を申し上げます。

当初8館で発足しました当協会も現在では65館に達し、常設展示を行っている施設のほとんどが加盟している状況であります。

しかし、大多数の施設は、建物があっても内容や人的な面では十分とは言えず、多くの悩みを抱えております。

このような状況の中で、設置者、規模、種別を異にしている博物館がそれぞれ個性や特色を発揮するとともに、博物館相互の連けいや情報交換、あるいは研修会等を充実するための博物館協会の活性化を図ることが重要な課題となっております。

このため、当協会では、設立20周年を機に、その足跡を辿るとともに、反省の中から新しいものを創造するための指針として“20年史”の発刊を発意しました。

編集にあたっては、しばしば実行委員会において協議し、過去の資料を集め、系統的にまとめるため苦心しました。

なにぶんにも財政的に基盤の弱い文化団体であるため、意に満たないものとなりましたが、記念誌としての役割を果たすものと思います。

“20年史”の刊行にあたって、貴重な玉稿を賜りました方々並びに編集にあたられた実行委員の皆さんに厚く御礼を申し上げ、協会の一層の充実と発展を祈念して発刊の御挨拶といたします。

愛知県博物館協会

会長 奥 田 信 之

I. 20年の歩み

愛知県博物館協会20年の歩み

愛博協20年の歩み概説

愛博協20年の歩みの詳細は年表を編纂することができたので、諸事業のこまかい経過は、年表を御参照ねがいたい。ここでは、愛博協創設以来の関係者の一人である広瀬による博物館発達小史にふれ、博物館諸事業について解説を加えておきたいと思っている。

年表をみて頂ければ当協会のさまざまな事業はまことに興味ある博物館活動であり、記載された一件一件の事業は、当事者、関係者にとっても忘れえぬことであろう。しかし、現在ともなるとその事業の背景となった考え方なども記録されぬ限り、伝えられてはいないのである。そのなかにおいて『愛知の博物館』そして『東西南北』は、20年の変遷と共に博物館に係わった多くの関係者の気持をよく伝えていると思われる論述が多く残されていて喜ばしい。

創設

愛博協の創立前の筆者と金子功氏との県下の博物館めぐり調査は貴重な体験であった。個人収集の資料も、町のコレクターのなかには驚ろくべき量をほこっている人たちも存在していたが、博物館というものを良く知らない方々が多かった。戦後の愛知県には、みられるような博物館は徳川美術館をのぞいて皆無といってもよかった。

昭和30年代にすでに神奈川県は博物館運動の先進地であった。金沢文庫内に事務局をおき星野直隆氏が事務局長であったが、神奈川県博物館協会は愛知県との博物館研究の交流を求め活発な呼びかけをはじめていた。他県との交流など、まだまだ実力不足として当初研究会の開催があやぶまれたが、日本モンキーセンターを会場に、研究交流

の集を開くことになった。それ以来、神奈川県博物館協会の力添えがいろいろな分野においてなされ、県単位の博物館交流の気運の到来に、心をむける県内博物館有志へのよびかけの形をとって愛知県博物館協会の組織化がはじまったのである。他県博物館協会からの刺激は今となればまことに有難いものであったのである。後年、三重県博物館協会の組織化には愛知県博物館協会からの働きかけ、三重県からの要請に応えた支援がなされた。岐阜県博物館協会の結成は愛知県博物館協会の存在が大いにひきがねになったと協会創立者の一人郷浩氏（元岐阜城博物館長）はかねがね語っておられる。

事務局

事務局は、当初は事務処理をすべて豊橋向山天文台で行ない、広瀬が協力した。『愛知の博物館』や『東西南北』は、最初はこの天文台でつくられた。しかし事務局の組織的な活動はやがて愛知県文化会館にひきつがれて行くが、文化会館にしても専任職員をあてることはむづかしかった。

歴代の事務局長や、理事館の方々は、何かと工夫をして、時間をみつけ、協会事務機能を強化し、支援体制をとっていった。この事務局の形成充実の過程は極めて興味深いものがある。幸いなことにたえず原動力になる推進者とこれへの協力者が現われ、事業が定着していった。その一人一人を述べる紙幅をもたぬが、協力者のたえまない活動はやがて、編集委員、協力員、実行委員へと協会事業の企画から実施までが、能率的にすすめられるようになっていったのである。愛博協は文化会館に長期にわたり定着した協会事務的機能を確保することができたが、これは他県博物館協会にお

ける協会運営方式と若干こととなった点でもあったが、協会結成時熊沢五六徳川美術館館長が会長となり、協会事務局を愛知県文化会館においたのである。現在の運営形態が形成されるまでの愛知県文化会館の、努力に深く感謝したいと思う。

文化会館館長の移動によっても事務局を変えることはなかったのみでなく、事務局強化がはかられ、実行委員会のごとき、博物館職員の参加による幅広い協会事業発展の運営議論がここにできあがっていったことは喜びである。

館長、学芸員

博物館協会加盟館も年々増加する。一方館長、事務局長、学芸員も、協会関係職員も数年をまたぎ、つぎつぎと交替する。これはやむをえないことである。愛博協の事業の継続を支えた原動力は、館長、学芸員等学芸職員の協力からなる事業支援であったといえるのではなからうか。永年にわたり、協会事業のマンネリ化をふせぎ、たえず新しい事態を想定し、協会運営の実態を分析し、よりあらたな事業企画をもちこみつづけたのは金子功氏であった。同氏の考えに共鳴を覚えた若い学芸職員の存在もまた協会事業を一段とすすめることになった。金子氏は、博物館を考究しつづけたが東海はおよばず国内各地の博物館を訪れ、博物館運営の実態・問題点についてたえまない分析を試みていた。博物館を学ぶ協会事業への同氏の幾多の提案は、今日に生きつづけている。博物館組織のあるべき姿を学芸職員の活動に求め、学芸員の研究こそが生命であると絶えず主張し、研究会、その他事業においても館長、学芸員からなる博物館学習の必要性を力説していた。「会合へは館長と学芸員と一緒に参加せよ」金子氏の言葉である。

文化財探勝会

愛博協が、地域の文化財保護に強い関心を持ち、はたらきかけた事業には、県下文化財めぐりや、文化講演会がある。博物館を訪れる人たちの増加をはかつてのPR事業などにも、文化財保護の訴

えがたえず根底にあった。博物館は、いわば地域の文化活動の中心的存在である以上、文化財への積極的な保護への働きかけは年々大きく期待されるにいたった。愛博協もまた学校関係、社会教育関係者をまねいて県下文化施設の見学、解説指導を開催した。愛知県下の文化財保護の文化施策は、愛博協のこうした試みをまつまでもなく活発であったが、残念なことに文化財保護団体の活動と愛博協との連携はいまだ充分とはいえない。愛知県下には自然史博物館が、鳳来寺山自然科学博物館しか見当たらないこともあって自然保護、環境保全のための博物館による学習はおくれていた。設楽地方における東栄町の天地人教育や、その後の御園天文科学教育センターの諸活動をみだが、愛博協の支援事業とはならなかった。博物館と文化財、埋蔵文化保護は、見晴台考古資料館や、各地の歴史・民俗資料館ができ、愛博協に歴史・民俗研究部会の成立をみた今日ようやく「保護」をめぐる事業企画も深かまってきたのである。

レッツゴー博物館展

博物館の見学者を誘致するために、参加園館が一丸となって小規模ではあるが、博物館展が試みられたことは愛博協としては画期的な事であった。他県博物館協会では、しばしば移動博物館展示がおこなわれているが、愛博協では、県下施設を県民に知ってもらうための特別展を実施した。実物資料の搬入にはそれぞれの館の実情からくる拘束もあったが、写真パネル、パンフレットによって県下の博物館を紹介した。これを契期としてポスターの作成、チラシ、そして愛知の博物館ガイドなどの企画が、以後つぎつぎと打出され、理事館からの編集委員が定例的にあつまり協議をするようになってからは、諸刊行物をめぐるこれらの諸事業がきめこまかく進められるようになっていった。博物館を相互に結びつけるための努力がなされると共に、学芸職員間の交流も漸次活発になっていったことはよろこばしい。県費補助との

係わりもあって諸事業も活発化し、愛知県博物館の発展を思う気持ちの高まりをみた。文化会館へは、博物館協会加盟館の職員や、博物館への関心をもつ人たちが集まってくるようになった。博物館協会が県民にすこしずつ扉を開きかけてきたのである。さて、愛博協20年史をふりかえる時、東三河にある博物館の推進活動について触れないわけには行かない。この活動は、愛知県博物館協会諸事業の中にあつてさまざまに評価されているが、東三河地区の博物館の特殊性や人的交流等のかかわりあいのなかで、地域の博物館の具体的な向上をもたらした特記されねばならない活動でもあつた。以下に同協議会発行の『ニュース』にもとづいてこの事業の特色についてふれたいと考える。

東三河にある博物館の推進活動について

東三河博物館施設ニュースは1号から30号までざっと3年間にわたって刊行されている。手元に見られる昭和46年6月号が30号であるが、今ここにみられる会員名簿をみる限り参加21館すべてが、南、北設楽、新城、蒲郡、田原、渥美、豊橋の施設と個人会員からなっている。文字通り東三河の博物館のこの活動の記録である。モンキーセンターもこの活動には学芸員参加の形で加わり、大変意欲的な学習会を体験したことを思い出す。このような活動に対する批判は今日にいたっても大きいと思われるが、やはり何とんでもこのエネルギーにみられる事の本質を明らかにしておかねばならない。この活動の中心人物は、金子功氏であり、同氏のやむにやまれぬ気持ちがこの運動に結集されているといわざるをえない。

いわば、愛知県博物館協会活動に対する分派行動ともいえる運動が何故おこり、しかも長年にわたり継続されたのか、愛知県博物館発達史のなかでの分析が必要ではなからうか。

愛知県下の博物館分布の特色、また規模内容上の隔差の存在からいって協会にとっての地域活動のもつ意味あいはいは大きい。もともと愛博協自体限

られた日程、時間そして人員による県下全体の集まりに対する交流活動には無理がいくつかあつたのであり、研究会、役員会すら名古屋以東、以南の各施設からの参加は困難が内在していた。東三河にある博物館の推進活動護会は地域ごとの博物館とそこにおける職員相互の交流、総合的活動の志向からはじまったのではない。むしろ意を同じくする施設とそこにおける有志が地域をこえて結集し、そしき化の不徹底がみられる典型的な例であつた。協会運営に協力して20年をへた今日でも、私立博物館、小規模博物館の性格等によるそれぞれにことなる施設および職員の考え方を一つにまとめることはもともと至難の業であつたことが誰でも理解できることなのである。だが、博物館活動の魅力が参加各館をとらえたことも事実である。三河地区の各施設は自からの活路をもとめて互いが結びついたのであつて、その意図するところは自ずからの利害の上に立ち共通に博物館を進めたいという意志そのものの現われであつたのである。愛博協に関しては地域への働きかけこそは重要であり、今後の課題である。

三県合同研究会

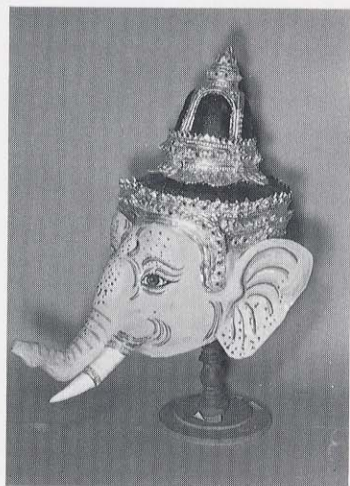
三県合同研究会は三重県との交流研究会から緒についたのであるが、三重、愛知の両県博物館協会の学芸員研究会の発展は、愛博協により試みられていた県外見学研修会に大いに触発されたことから構想され、後に岐阜県博物館協会もこれに加わるにいたる。東海地区博物館連絡協議会が年一回の総会開催で、各館親睦交流の談合に終始することに満足することのなかった愛博協関係職員の研究会開催要請にこたえてこの三県合同研究会がひらかれたが、各県博物館の実情や、職員構成、事務局組織等の相異もあって必ずしも十分な成果をあげているとは云えない現状ではあるが、地域をこえて、博物館の発展を諸研究交流の中ですすめて行くことはやはり重視されるべき点で、今後も検討を加えながら、研究交流の場をもって行くこ

とになる。実行委員会による企画推進を可能としている愛博協は、昭和59年度の事業を意欲的に計画しているのであるが、諸研究会への参加者からの要請も具体的に検討される予定である。

(日本モンキーセンター学芸部長 広瀬 鎮)



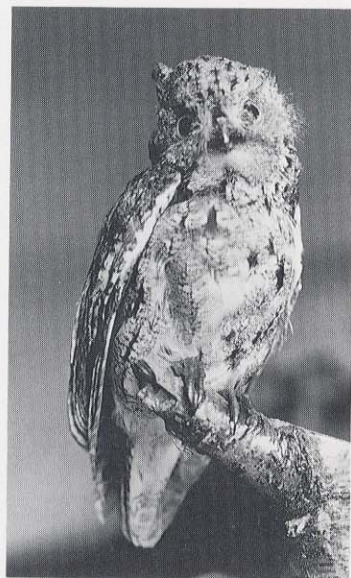
(横山大観画「霊峰春色」 桑山美術館)



(舞踊仮面 タイ 人間博物館リトルワールド)



(雷文真焼大水鉢 常滑市民俗資料館)



(コノハズクの標本 鳳来寺山自然科学博物館)

愛知県博物館協会20年の歩みの中で

愛知県博物館協会が設立されて20年になる、この協会が結成されたことによって県内の博物館の相互の連絡が出来るようになり、県外との交流の窓口ともなったのであるが忘れてはならないことは協会の発足の動機が日本モンキーセンターと神奈川県博物館協会との交換研究会に際して愛知県下の博物館に参加の呼びかけがあつて、これを機会に連絡協議会が発足したということである。つまり行政の指導で出来たものではなく各博物館がそれぞれの考えで自発的に結成し自前の活動を開始したのである。

徳川美術館の熊沢五六会長を中心に活動していた当時に比べると現在は事務的には動いているが本当の意味での中心となるべき人がいないのは残念だとも思う。

20年の協会とのかかわりあいの中で思いつくままにその歩みを振り返ってみたい。

はじめは人物中心から次第に施設中心に

協会の発足当時には、館に目標をつけて加盟して貰うというより、あんな人がいるから仲間に入って貰おうという博物館人の仲間づくりの気分が強かったように思う。

したがって会合の出席も館には参加能力がなくとも自費参加の人が多かったようである。

当初の10数館も現在のように50館を越すようになると協会としては一見盛況になったように見えるが、新しい館ができるとその内容も未知な儘協会の側から入会を奨め館側も協会の内容がどんなものかというより県の協会であるから入会が当然というところも多いようで、人物中心から施設中心の形式的なものとなり仲間意識が薄くなったことはいふまでもない。以前であれば会長はほとんどの館長を知っていたが現在はどうかであろう、加盟館の職員はおろか館長でさえ年一度の総会以外に

は協会事務局と接することが無くなってしまった。

運営が会員の手から執行部の手に

したがって発足当初は加盟館の協会に対する要望が身近なものとして直ちに具体化されたが現在は事務局主導型になってきたことも仲間意識が薄くなった理由の一つであろう。

加盟館の協会に対する要望はアンケート調査や会合の際に『何か御意見は?』というような形式的なものでは無く人と人の触れ合いの中から把握しなければならない。

事務局主導型になっていると、事務局が企画した行事に会員は単に参加するだけということになりすべてを事務局に頼ってしまい自分達の会であるという感覚が薄れてしまう。

会員が参画できるような協会運営の態勢を整える必要がある。

過去に開催した事業の思い出。

私が20年に近い年月を協会の世話をしているうちに私達を中心になって開催してきた各種の事業を類別してみると3つに大別できる。

A 会員のための研修会。

県外での研修会は何回も企画したが私の考えとしては施設や活動を見学して物真似上手に画一的な博物館ができるより、博物館人として個性の強い人に会わせて、博物館職員としての心構えを身につけて貰い個性ある博物館をめざすという目的があったのでこの成果は大きく、帰ってから施設より人から受けた強烈な印象が話題となったことが多かったように思う。

県内での研修は理論より資料の保存技術、分類整理、展示など実技などを中心としたような記憶がある。これは現在でも大多数の小さい館がそうであるようにこれらの実務的なことに専門職員が

いない為もあって要望が多かったこともある。

B 広報活動

印刷物による広報活動としては博物館地図の作成配布などがあり行事としてはPRのための展示会の開催があったがこれらは今は行なわれていない。思うに協会の中で指導的立場の館ではそれぞれ独自のPR活動をしているので協会に頼る必要が無いこともあろうが、中小館のためには博物館の共同PRができることはこれからも加盟のメリットの一つではなかろうか。

C 会員外サービス

文化財巡りと称して学校関係者を中心に各地の文化財を巡ったことがある。協会と見学地の博物館のPRという目的もあったが、見学地に加盟館が無いこともあり結局乏しい協会予算の中で会員外サービスをしたことになり当時の弱体な協会としては本来の会員の為の活動力をそいだことになったのではなかろうかと反省している。

これからの協会に何を期待するか。

愛知県博物館協会の歩みの中から考えてみた時にこれから協会のなさねばならぬ仕事にはどんなことがあるかと思いつく儘に書き並べてみたい。

A 館長（管理者）研究会

館長の中には博物館に造詣が深い立派な方が沢山みえる、これらの方には釈迦に説法とお聞き流しただきたいが、町村の資料館などでは有能な行政人ではあるが博物館に対する経験も知識も無い人が館長になる場合が多い、これらの人は館の運営を行政的には処理できるが博物館本来の活動を十分に理解していない人が多い。また行政職の人でなくとも郷土史、民俗等に造詣が深い人の場合にはその専門分野のみに目が向いて巾広い運営ができないことが多い。

今までの協会の研究会は主として学芸職員を中心としてきたが、これは今後共に大切であるがこれからは館長研究会というより懇談会を度々開催して館長相互の理解と研修につとめ博物館活動に

あたってのネックの解消に勉める必要がある。

B 内外の情報の収集と提供

館によっては独自に内外の博物館情報の収集ができる館も多い、しかしそれも自分の館の専門分野のものが多く、広範囲に情報収集のできる館は少ないのみならず全然できない館も多くある。

協会加盟のメリットの一つには情報入手が大きいといえる。協会内にこの種の情報サービスの部門があってもよいだろう。

協会の運営についての希望

20年を経た協会はかつての加盟館の数の少なかった時代とは事情も大きく変化してきたのであるから、その運営についても新しい発想が必要であらう、役員の選出、会議の持ち方等色々改善案があるが当面次のことくらいは実現させたいものである。

A 分科会

はじめに述べたが発足当初に会員の意向が協会の運営に直ちに結びついたのは、会員数が少なかったこともあるが、大多数は規模の小さい館であったこともある。50を越す館となった現状では専門別、設置者別、規模別、等いくつかの分科会に分かれての活動も考えるべきであろう。

特に名古屋から遠い地区にある館からは事業に参加することが難かしいので各地区から選出されている理事館を中心に集まりやすいような事業が計画できるような方法も検討の必要がある。

B 加盟館巡り

最近は実行委員会も若い元気な人達が多く活発な企画がでているが、若いということは博物館の経験が浅く特に人間関係の視野が狭い。県下の各館の現状を把握するためにも会長、実行委員、事務局は2年に一度くらいは各館を訪問するという慣習を設けたらどうだろう。こうして県下各館の実状が把握できたならば事業の企画に対する考え方も違って来るだろう。

D 人間関係を深める努力

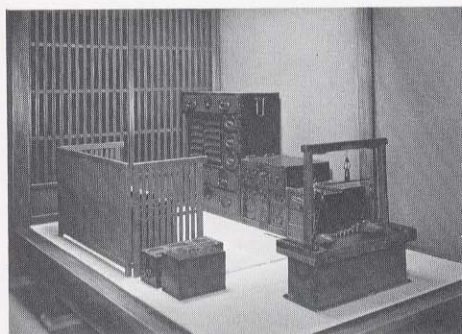
愛知県博物館協会の活動は他の県の活動に比べても立派な実績を持っていることは確かであるが最近急速に加盟館が増加したこともあって人と人との結びつきは薄くなって、何処にどんな人がいるかも知らなくなったことは事実であろう、研究会の後での懇親会に話がはずまないのもこれが原因であろう。

人間関係を深める努力をしたいものである。

(御園高原自然学習村村長 金子 功)



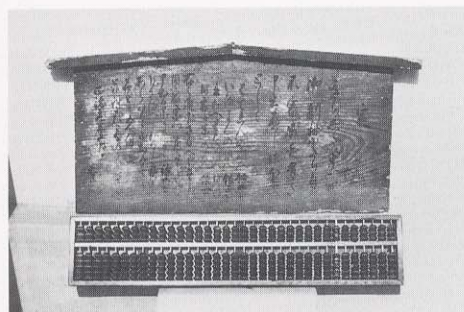
(細井平洲筆「静齋」 東海市立平洲記念館)



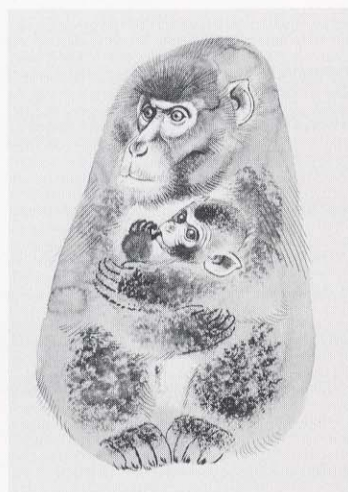
(両替商店先復元 岡崎信用金庫資料館)



(県文・岩場古墳出土品 吉良町歴史民俗資料館)



(切支丹訴人表札・梁上三珠大型そろばん
鈴木そろばん博物館)



(ニホンザル 日本モンキーセンター)

愛知県博物館協会における主導理念と組織形態の変遷

愛知県博物館協会の理念

愛知県博物館協会（以下愛博協）における主導理念とは一体何であろうか。この問いに答えるためには、愛博協組織化の時点における愛知県下における博物館をとりまく社会環境を明らかにしなくてはならないといえよう。昭和30年代前半の愛知県に一体どれだけの博物館とよばれる文化施設が存在していたであろうか。公立博物館としては愛知県文化会館と東山動物園、あとは、私立博物館として、徳川美術館、豊橋天文台、日本モンキーセンターといった施設ぐらいであった。愛博協結成のきっかけとなった神奈川県博物館協会からの呼びかけがなくては、愛博協の組織化は進展しなかったのではないかと考えている。博物館建設への余力のない時代でもあり、県民も又、博物館を強く望んでおらずそのなかで、豊橋天文台台長であった金子功氏は、自からの天文台の普及活動のひろがりをも博物館活動に求めている。おくれた東海地区の博物館事業は、金子氏という民間社会啓蒙家によってひろがっていったのである。

この民間推進型の博物館の横のむすびつき組織は、次第に他施設の博物館活動とも深く結びついて行ったことは注目に値する。

戦後博物館の発達史のなかにあつて神奈川県博物館協会もまた民間推進型の運営を10年以上も経てきていたが、その諸事業にみられるごとく、典型的な民間主導の活動体であった。愛博協は他県協会に比しておくれて出発したにもかかわらず、参加館園の職員の努力により発展は著しいものがあったが、協会結成後の第一の仕事は、何よりもまず、お互いを知ることが先決であった。今日みられるごとく日本博物館協会の支部ともなる地区割りの考え方もいまだに成長していなかった時代である。

県域をこえて金子氏は、博物館の実態調査を試みた。広瀬（日本モンキーセンター）は、当時から金子氏の博物館調査に同行したが、これにより愛知県およびその周辺の博物館、資料館などの実態が次第に明らかとなっていくたのである。

博物館活動という博物館の社会への働きかけなどは今日ほどは明らかにされていなかったのであるが、博物館は社会教育施設か研究機関か、国レベルでの博物館行政の立場でも意見の対立をみっていた。戦後、我国の博物館が社会教育へむけて強く接近を迫られた時に、国科学博物館の岡田要館長は、声を大にして博物館の研究充実こそ第一義であると主張したことも良く知られている。

愛知県下の博物館人に重要なのは、まず博物館みずからの博物館学の学習であったし、一般人に博物館そのものの機能を熟知せしめることでもあったのである。当時博物館を社会教育の機関であり、研究施設でもあると理解した一般人がどれほど県下にいたであろうか。博物館については「古物倉庫」のイメージがひろく県民をとらえていたのである。愛博協加盟の園館にとっては、協会活動そのものが、自己の博物館形成につながっていた。愛博協が初期的に試みた諸事業をふりかえてみれば一目瞭然であろう。それらはことごとく施設相互の交流、そして博物館人の発見にもつながっていた。博物館の地域社会への役割りを真剣に話合うことも多かった。今日ではどうてい考えられない初歩的な討議であつたろう。博物館技術に関する職員研修もその後の日本博物館協会での企画をまつまでもなく、愛博協を中心とした実践で試みられた。諸事業を企画し、充実して行ったのは背後にあった愛博協加盟館のたゆまぬ向上心そのものであり、相互発展こそが、愛博協の基本理念となっていたのである。

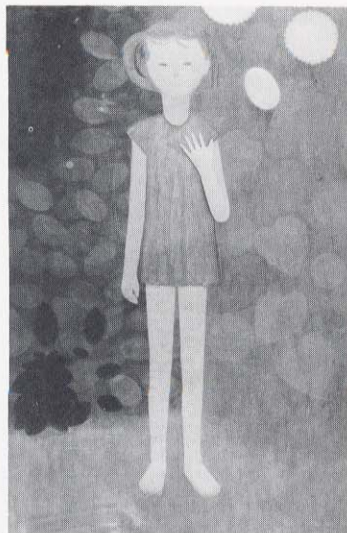
昭和39年1月16日、会長熊沢五六、事務局愛知文化会館という形で発足をみた愛博協は、加盟館園中とくに少規模館の博物館担当職員にとっては文字通り博物館づくりへの方向を示してくれるものであり、年間を通じての研究会、他県交流の研究会等へは多くの期待がよせられた。協会活動の初期は民間の自力による活動でもあった。昭和43年に全国博物館大会開催を機会として愛知県からの補助金30万円が支出されるにいたり、県文化行政との係わりが深くなっていったのである。

協会設立前から金子氏は、積極的な博物館相互の学習を主張していたが、同氏は、戦後の社会教育を文学教育や、大池児童館の地域活動を通じて意欲的にすすめてきた。戦後の地域文化の拠点に博物館を考え、博物館の潜在力に大きな期待を寄せたのである。同氏は絶えず小規模館の立場に立ち、地域性に立脚した愛博協活動への献身的協力はその後の愛博協を飛躍的に発展せしめたのである。東三河博物館協議会活動や、私立博物館施設連絡会議など同氏にとっては、現実問題にひそむひずみの修正であったし、やむにやまれぬ思いの発露であったといえよう。愛博協は、今日、加盟館65館のうち公立館23館、私立館31館であるが、昭和53年に飛躍的に加盟館増をみている。今日のこの隆盛をみるとまことに隔世の観がする。単に参加館増にのみ目をうばわれたくない。協会事業に寄せる参加各館園、そして博物館関係者の協会への期待が高まっていることこそが喜ばしい。博物館時代の到来を予想し、博物館のもつ文化エネルギーへの期待をもって博物館を相互に結びつけ、力ずよい文化創造への活動に火をつける役割りを愛博協はにないつづけねばならない。この最初の火を灯したのが、豊橋の町の中の小さな天文台であったことを記録にとどめたい。この豊橋向山天文台のまいた種は、愛博協の発展だけではない。その後の愛知県の社会教育に大きな刺激を与え、山村文化の価値の発見に、北設の天文科学教

育の発展等、とどまることのない文化活動へとひろがっている。金子功氏（元愛博協副会長）の言葉をここにあげてみよう。「戦争中は特にひどかった官僚統制の枠の中での学校教育より、学校以外で市民の中の文化活動をしてみたかった…」（東西南北 No.109 1977年10月）

豊橋向山天文台を舞台とした博物館活動の実践が、仲間をつどい、博物館の何たるかを相互に学ぶ、市民の中にある文化活動としての愛博協づくりへと進んでいったのである。「自から博物館を創造する」愛知県博物館設立の理念はそこに秘められており、博物館の本来あるべき姿を求めている協会設立であった。そしてその後の運営の実績もまた協会加盟館職員の真の博物館を求めている相互学習に他ならなかったのである。

（日本モンキーセンター学芸部長 広瀬 鎮）



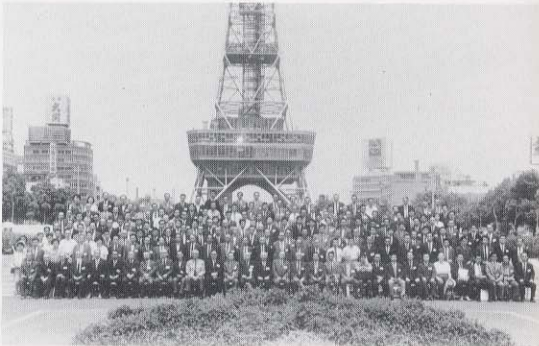
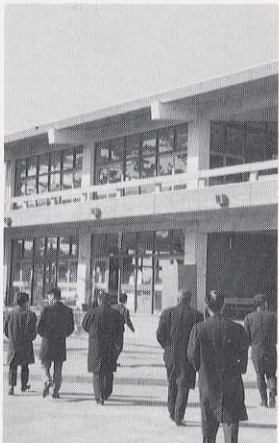
（中村正義画「空華」 豊橋市美術博物館）

愛知県博物館協会年表

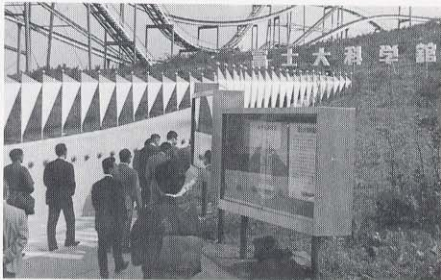
昭和年月日	事	項
昭和37年 6月28～30日	犬山市の犬山ユースホステルにおいて神奈川県博物館協会と財団法人日本モンキーセンターの間で交換研究会が開催され、神奈川県博物館協会と愛知県下の博物館施設の交流が始まる。	
昭和38年 9月11日	日本博物館協会より東海地区ブロック会議開催の要望あり、神奈川・静岡・愛知・岐阜・山梨の5県24施設が熱海美術館にて会合、「東海地区博物館連絡協議会」(以下、東海博とす)結成。第1回総会開催される。	
11月20日	神奈川県博物館協会星野直隆事務局長(金沢文庫)より東海博に各県2名の理事選出の要請がある。	
12月6日	愛知地区博物館連絡協議会結成委員会を愛知県文化会館において開催。	
昭和39年 1月16日	愛知地区博物館連絡協議会結成総会、加盟11館園にて発足、年会費1口500円。	
	理事(会長) 徳川美術館	館長 熊沢五六
	理事(副会長) 愛知県文化会館	館長 魚住東洋
	理事 市立名古屋科学館	事務局長 浅野正徳
	理事 豊橋向山天文台	台長 金子 功
	理事 日本モンキーセンター	学芸次長 廣瀬 鎮
6月25日	愛知地区博物館連絡協議会(以下、愛博連協とす)理事会開催、於愛知県文化会館、4施設参加、加盟館園14施設となる(徳川美術館、愛知県文化会館、設楽町立奥三河郷土館、市立名古屋科学館、犬山自然植物園、鳳来寺山自然科学博物館、東山動物園、東山植物園、蒲郡市竹島水族館、日本モンキーセンター、豊橋向山天文台、常滑市立陶芸研究所、名古屋城管理事務所、渥美フラワーセンター)。	
7月3日	昭和39年度愛博連協総会開催、於鳳来寺山自然科学博物館、参加10施設、予算額11,000円。	
11月13～14日	東海博昭和39年度総会開催、於市立名古屋科学館(愛知県当番)	
10月15日	『愛知の博物館』創刊号発行。	
12月3日	愛博連協職員名簿作成、配布。	
昭和40年 2月28日	第1回学術職員研究会(以下、学職研とす)を明治村において開催、「神奈川県博の学芸員研究会10年の歩み」(横須賀市立自然科学博物館柴田敏隆)、明治村見学(解説伊藤昭夫)、参加者17名。	
4月	『東西南北』創刊号発行(編集:愛博連協事務局、金子功他、印刷:豊橋向山天文台)。	
4月30日	理事会開催、於愛知県文化会館	
5月8日	昭和40年度愛博連協総会開催、於日本モンキーセンター、犬山自然植物園。	
5月20日	第2回学職研開催、於市立名古屋科学館、「欧米の博物館を訪ねて」(三重大学椎野季雄)、参加者14名。	

(第1回学術職員研究会 於明治村)

昭和年月日	事	項
6月7日 6月17～18日	東海博昭和40年度総会参加，於久能山東照宮(静岡)。 第3回学職研開催，於鳳来寺山自然科学博物館(神奈川県博と交換研究会)，「写真応用の展示説明札の製作」(豊橋向山天文台小木曾俊義)，「長篠戦史について」(長篠城趾史跡保存会会長丸山彰)，参加者14名。	
7月26日	第4回学職研開催，於愛知県文化会館，「博物館法における諸問題」(徳川美術館木下稔，日本モンキーセンター廣瀬鎮)，「東北の博物館をみて」(豊橋向山天文台金子功)「第8回新象展」(解説吉川伸)，参加者10名。	
9月29日	第5回学職研開催，於市立名古屋科学館，「模写と復元」(徳川美術館櫻井清香)，「昭和40年学芸員研修会伝達講習」(市立名古屋科学館滝本正二，日本モンキーセンター廣瀬鎮)，「徳川家康展」(解説熊沢五六)，参加者9名。	
昭和41年		(昭和40年度東海博総会 於久能山東照宮)
2月4日	理事会開催，於県文化会館。	
3月2日	愛博連協編集委員会開催，『東西南北』に月予定資料，人事，諸活動記録収録。 昭和40年度：一『愛知の博物館』No.2，3，4；『東西南北』No.1，2，3，4，5，6発行。 愛博連協編集委員会設置。	
5月14日	昭和41年度総会理事会開催，第6回学職研開催，於蒲郡竹島水族館。三河湾・乃木山・岸間コレクション等見学，参加13施設20名。	
5月26～27日	東海博昭和41年度理事会・総会参加，於神奈川県箱根町湯本嶺水苑。施設見学＝箱根美術館・箱根自然博物館，等見学。	
7月7日	編集委員会開催，於市立名古屋科学館。	
7月21日	理事会開催，於県文化会館，出席6名，第15回全国博物館大会準備。	
7月28日	第7回学職研開催，於名古屋市農業センター，「施設紹介」(横井弥市)。	
8月7日	編集委員会開催，於サンモリッツ，定期刊行物編集。	
9月1日	第8回学職研開催，於市立名古屋科学館，於市立名古屋科学館，「欧米の博物館をみて」(久恒館長)。	
9月21日	編集委員会開催，於市立名古屋科学館，第15回全国博物館大会資料作成。	
10月5日	編集委員会開催，於市立名古屋科学館，第15回全国博物館大会資料作成。	
10月12日	理事会・第9回学職研開催，於県文化会館，全国大会要項打合せ。	
11月16日	理事会開催，於県文化会館，日博協星野事務局長を囲む協議。	
昭和42年		
1月10日	理事会開催，於県文化会館，日博協全国大会会員協力依頼他。	
1月30日	愛博連協臨時総会開催，於県文化会館，日博協全国大会要項および，役員事務分担，参加者17名。	
2月13日	編集委員会開催，於県文化会館，定期刊行物，大会資料。	
3月7日	編集委員会開催，於明治村，大会資料。	
3月15日	理事会開催，於県文化会館，星野事務局長と大会最終協議，参加者13名。 昭和41年度：一『愛知の博物館』No.5，6，7，8；『東西南北』No.7，8，9，10発行。新加盟館園：一熱田神宮宝物館，犬山城，豊田市郷土資料館。編集委員：一金子功，滝本正二，	

昭和年月日	事	項
	木下稔，成瀬錠一，廣瀬鎮。	
4月6日	昭和42年度愛博連協総会・理事会および第10回学職研開催，於名古屋城，参加12施設20名。この折「愛知県博物館協会」（以下，愛博協とす）と名称変更。	
4月13日	編集委員会開催，於県文化会館。	
4月26日	編集委員会開催，於県文化会館。	
5月19日	編集委員会開催，於県文化会館。	
5月31日	編集委員会開催，於県文化会館。	
6月1日	施設要覧特集号発行。	
6月中旬	『東三河博物館施設案内』（24頁，色刷）出版し，管内各学校へ配布。	
6月27～30日	第15回全国博物館大会愛知大会開催，於名古屋市教育館，県文化会館，市立名古屋科学館。県費補助30万円。	
6月27日	開会式，記念講演，全体会議，シンポジウム。	
6月28日	分科会，研修会。	
6月29日	全体会議，閉会式。	
6月30日	県下博物館施設見学。	
7月21日	編集委員会開催，於名古屋科学館，大会報告書作製他。	
8月10日	編集委員会開催，於名古屋科学館，大会報告書，他。	
9月13日	編集委員会開催，於熱田神宮宝物館，定期刊行物。	
10月13～14日	東海博昭和42年度理事会・総会参加，於岐阜県高山市公民館（岐阜県）。	
11月1日	編集委員会開催，於県文化会館。	
11月9日	理事会開催，於県文化会館，昭和43年度事業計画，昭和42年度事業報告。あらたに昭和43年度県費補助（30万円）交付申請を決定。	(第15回全国博物館大会 於名古屋)
昭和43年		
2月2日	編集委員会開催，於名古屋科学館。	
2月20日	第1回愛博協研究会開催，於華山文庫。華山文庫・東大寺大仏殿瓦場跡等見学他。「渥美町一帯の植物について」「瓦場発掘について」（渥美町高平修一，渡辺美吉）。	
	昭和42年度：一『愛知の博物館』No.9，10，11：『東西南北』No.11，12，13，14，15，16発行。新加盟館園：一 豊橋市文化会館郷土資料室，名古屋市蓬左文庫，名古屋市豊清二公顕彰館，小牧市歴史館。	
5月30日	昭和43年度愛博協総会・理事会開催，於明治村，参加19施設24名。会則一部改正，全国博物館週間行事として各種の事業計画がくまれる。当年度より各理事館1～2名の実行委員選出をもとめ事業の充実をはかる。	
	役員改選により，以下のとおり新役員きまる。	
	理事（会長） 徳川美術館	館長 熊沢五六
	理事（副会長） 県文化会館	館長 松尾信資

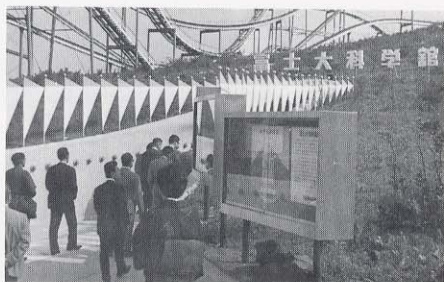
昭和年月日	事	項		
	理事	市立名古屋科学館	事務局長	浅野正徳
	理事	日本モンキーセンター	所長	宮地伝三郎
	理事	豊橋向山天文台	台長	金子 功
	理事	鳳来寺山自然科学博物館	館長	夏目克己
	理事	博物館明治村	館長	谷口吉郎
	理事	豊田市郷土資料館	館長	兵藤才市
	監事	名古屋城天守閣管理事務所	所長	佐藤吉正
	監事	熱田神宮宝物館	館長	岡本健治
6月6～7日	東海博昭和43年度総会参加，於富士山麓河口湖富士急ハイランドホテル（静岡県）。17施設25名参加。			
9月3日	実行委員会開催，於県文化会館，文化講演会実施，他。			
9月9・30日	パネル巡回展小委員会開催，於県文化会館，製作計画。			
10月10～20日	第10回理科展，愛博協・日本モンキーセンターの共催で開催，於市立名古屋科学館。			
10月10日	愛博協パネル巡回展開催，於市立名古屋科学館，名古屋市教育館，豊田市郷土資料館。			
～11月30日	愛博協文化講演会開催，於名古屋市教育館，「世界における日本の美術」（谷川徹三，村井国男）。			
10月14日	真福寺文庫（大須文庫）新規加盟。			
10月	実行委員会開催，於熱田神宮龍影閣，定期刊行物。			
11月12日	名古屋市内小中高校社会科担当教諭を招待して，愛博協文化財探勝の会開催，徳川美術館・蓬左文庫・豊清二公顕彰館・甚目寺・尾張国分寺収蔵庫・妙興寺，外2施設見学，参加者30名。			
11月17日	県外研修会開催，鎌倉国宝館・葉山観光館・油壺水族館・城ヶ島町立博物館・横須賀市立博物館・記念艦三笠・横浜海洋科学博物館・神奈川県立博物館等見学。参加15施設22名。			
12月5～6日				
昭和44年				
1月28日	第2回愛博協研修会開催，於豊橋向山天文台，展示用説明札製作実技講習会，参加12施設17名。			
2月12日	第3回実行委開催，定期刊行物。			
2月12日	実行委員会開催，於県文化会館，昭和44年度事業計画，東海博連総会他。			
3月1日	理事会開催，於県文化会館，昭和43年度事業報告，昭和44年度事業計画他。			
	昭和43年度：一『愛知の博物館』No.12, 13；『東西南北』No.17, 18, 19, 20；『第15回全国博物館大会学芸員懇談会記録』発行。新加盟館園：一 真福寺文庫，加盟24館園となる。			
4月24日	昭和44年度愛博協総会・理事会開催，於鳳来寺山自然科学博物館，参加26施設。			
4月28日	実行委員会開催，於県文化会館，研修会・定期刊行物・文化財探勝の会他。			
5月22～23日	東海博昭和44年度総会開催，於日本モンキーセンター附属博物館・明治村（愛知県一当番）。			
9月中旬	全国博物館週間にちなみ，「愛知県博物館要図」を県下公立小中高校1200余校に配布。			
9月23日	全国博物館週間行事として，西三河の小中学校教諭47名を招待して，第2回文化財探勝の会開催，華藏寺・大樹寺・豊田市郷土資料館を見学。			
9月25日	実行委員会開催。			
10月1～5日	愛博協主催「愛知の博物館展」開催，於名古屋科学館，参加20施設。			
	後援：一 毎日新聞社，愛知県・名古屋市教育局。			



(昭和43年度東海博総会 於富士急ハイランド)



(昭和44年度東海博総会 於明治村・モンキーセンター)



（昭和43年度東海博総会 於富士急ハイランド）



（昭和44年度東海博総会 於明治村・モンキーセンター）

昭和年月日	事	項
		
11月6日	実行委員会開催。	(愛知の博物館展 於科学館)
11月26～27日	県外研修会開催，京都国立博物館・京都府立総合資料館・白鶴美術館・明石天文科学館他を見学。 参加者11名。	
昭和45年		
2月25日	実行委員会開催，於県文化会館。	
3月20日	愛博協研修会開催，於名古屋科学館，「メモーションカメラによる見学者行動調査」，「カーネギー博物館の教育活動」(廣瀬鎮)，参加7施設20名。 昭和44年度：一壁新聞配布，「愛知県博物館要図」作成し県下公立小中高校(1200校)へ配布，ガイドブック『愛知の博物館』改訂版作成し加盟館等へ配布，『東西南北』No.21～31：『愛知の博物館』No.14，15，16発行。	
4月14日	昭和45年度愛博協総会・理事会開催，参加20施設。役員改選。	
	理事(会長) 徳川美術館	館長 熊沢五六
	理事(副会長) 県文化会館	館長 松尾信資
	理事 市立名古屋科学館	館長 久恒中陽
	理事 日本モンキーセンター	館長 田中利男
	理事 博物館明治村	館長 谷口吉郎
	理事 豊田市郷土資料館	館長 兵藤才市
	理事 鳳来寺山自然科学博物館	館長 夏目克己
	理事 熱田神宮宝物館	館長 岡本健治
	監事 名古屋城管理事務所	所長 河口武富
	監事 切支丹遺蹟博物館	館長 佐藤 一
5月19～20日	東海博昭和45年度総会参加，於神奈川県立博物館(神奈川県)。	
6月11日	理事会開催，於県文化会館，当年度事業分担について協議。	
8月28日	実行委員会開催，於県文化会館。	
9月2日	実行委員会開催，於県文化会館，「あいちの博物館展」につき打合せ。	
10月9～14日	名鉄メルサ6階通路に (昭和45年度東海博総会 於神奈川) て「レッツゴーミュージアム」展開催，参加25施設。 伊良湖自然科学博物館入会。	
12月11日	愛博協第1回学芸職員研修会(以下，学職研修とす)開催，於豊田市郷土資料館，「博物館における資料の整理・分類カードについて」(講演)，「欧米の博物館」(名古屋科学館稲月光)，参加4施設11名。	
		(レッツゴーミュージアム 於メルサ)

昭和年月日	事	項
昭和46年	荒木集成館が入会。	
3月20日	愛博協第2回学職研修開催、於常滑市立陶芸研究所、 「博物館事務資料をめぐって」(日本モンキーセンター三戸幸久)、「福岡県直方市のサル石像」(廣瀬鎮)、「照明について」(名古屋科学館三輪克)、「常滑古陶について」(常滑陶芸研究所沢田由治)、参加6施設11名。 昭和45年度：一壁新聞配布、「愛知県博物館要図」、ガイドブック『愛知の博物館』増刷、『東西南北』No.32～43；『愛知の博物館』No.17発行。	
4月	財団法人岩田洗心館入会。	(第2回学職研修会 於常滑陶芸研究所)
5月28日	昭和46年度愛博協総会・理事会開催、於豊田市立図書館。	
6月22～25日	県外研修会開催、北方文化博物館・佐渡博物館・相川郷土博物館・長岡市郷土資料館・長岡市立科学博物館を見学。参加6施設16名。	
7月1日	東海博昭和46年度総会参加、於東海大学海洋科学博物館(静岡県)。	
8月11日	理事会開催、於県文化会館。ガイドブック『愛知の博物館』作成のため編集委員会を組織する。	
8月25日	ガイドブック編集委員会開催、於県文化会館。	
12月14日	ガイドブック編集委員会開催、於県文化会館。	
昭和47年		
1月21日	ガイドブック編集委員会開催、於県文化会館。	
3月8日	愛博協県内研修会(学職研修)開催、於明治村、「資料の整理分類研究」(熱田神宮太田正弘)、「韓国の博物館をめぐって」(金子功)、参加8施設10名。	
3月23日	ガイドブック編集委員会開催、於県文化会館。 昭和46年度：一『東西南北』No.44～55；『愛知の博物館』No.18発行。	
5月24日	昭和47年度愛博協総会・理事会開催、於切支丹遺蹟博物館、参加18施設23名。	(昭和46年度東海博総会 於東海大学海洋科学博)
7月14日	理事会開催、於県文化会館、当年度事業分担等について。	
9月9日	東海博昭和47年度総会参加、於郡上郡明方村中央公民館(岐阜県)。シンポジウム「現在の博物館における問題点」他。	
10月11日	愛知・岐阜両県博物館協合同学芸職員研修会開催、於内藤記念くすり資料館、「台湾国立博物館の展示」(金子功)、「ソヴィエト宗教博物館をめぐる焼身自殺、民族自決論」(吉田幸平)、「教育活動」(三輪克)、参加15施設22名。	
11月26日	愛博協「東三河文化財探勝の会」開催、豊川市三明寺・大原薬業資料館・鳳来町長篠城趾史蹟保存館・馬の背岩・鳳来寺山東照宮を見学。参加者中学校教諭その他43名。	(昭和47年度愛博協総会 於切支丹遺跡博)
昭和48年		
1月13日	愛博協研修会開催、於熱田神宮庁会議室。講演会：一「美術の保存と陳列」(奈良国立博物館 蔵田蔵)、「正倉院の歴史と宝物」(蔵田蔵)、「正倉院宝物の工芸技術」(荒川浩和)、参加8施設16名。	

昭和年月日	事 項
	昭和47年度：一壁新聞配布、『東西南北』No.56～67；『愛知の博物館』No.19発行，ガイドブック『愛知の博物館』3000部増刷。
5月29日	昭和48年度愛博協総会・理事会開催，於博物館明治村。
7月12～13日	東海博昭和48年度総会開催，於愛知県三谷町あゆち荘（愛知県当番），鳳来寺山自然科学博物館・長篠城趾史跡保存館見学。
9月13～14日	愛博協研修会開催，於東栄町御園天文科学センター，「展示はいかにあるべきか，どんなものが望ましいか，製作の要点は？」（東海地区博物館連絡協議会と共催）。
9月21日	理事会開催，於県文化会館，当年度事業分担等について。
11月29日	名古屋タイムズ，加盟館園29館の紹介掲載。
12月14日	東海地区科学施設協議会研究会と共催で学芸員養成研修会開催，於県立図書館視聴覚室。講義：一 博物館学（廣瀬鎮），教育原理（滝本正二），社会教育概論（小堀勉）。9施設29名参加。
昭和49年	
3月10日	文化財探勝の会開催，常滑市立陶芸研究所・野間大坊・岩屋寺・貝殻公園を見学。参加者：一 名古屋市内小中学校教諭その他38名。
	昭和48年度：一「愛知県博物館・遺蹟地図」県下中高校に配布。『東西南北』No.68～79；『愛知の博物館』No.20発行。
5月17日	昭和49年度愛博協総会・理事会開催，於田原博物館（華山文庫）。理事補充（会則一部変更），9館園とする。新たに，理事 御園天文科学センター 所長金子功を選任，他は留任。参加18施設23名。
7月8～9日	東海昭和49年度総会参加，於甲府市紫玉えん（山梨県）富士ビクターセンター見学。
7月30日	実行委員会開催，於県文化会館。
9月30日	理事会開催，於県文化会館。
12月13～14日	第2回学芸員養成研修会開催，於県立図書館視聴覚室。講義：一 博物館学（柴田敏雄），教育原理（滝本正二），社会教育概論（廣瀬鎮）。参加7施設27名。
昭和50年	
3月16日	文化財探勝の会開催，徳川美術館・明治村を見学。参加者：一 名古屋・尾張部小中学校教諭その他31名。
	昭和49年度：一 県内博物館パンフレット作成，県下博物館案内をホテルに配布。『東西南北』No.80～91；『愛知の博物館』No.21発行。
5月7日	昭和50年度愛博協総会・理事会開催，於熱田神宮宝物館，愛博協会費改訂（規約一部改正），参加30名。
6月17～18日	東海博昭和50年度総会参加，於箱根まとい荘（神奈川県）大涌谷自然博物館・箱根神社宝物館等見学。
6月25日	実行委員会開催，於県文化会館，当年度事業打合せ等。
7月4日	実行委員会開催，於県文化会館。
8月	『東西南北』No.96より，編集が県文化会館から御園天文科学センターに移管。
9月20～21日	愛博協研修会開催，於御園天文科学センター。テーマ：一 「地域社会と博物館」（日本博物館協会と共催）。
昭和51年	
1月20日	博物館学セミナー開催，於日本モンキーセンター，「博物館と社会教育の相関」（廣瀬鎮），「現代学芸員論」（福永重樹），「自然動物園と教育活動」（水原洋城），日本モンキーセンターと共催。



「東西南北」No.69

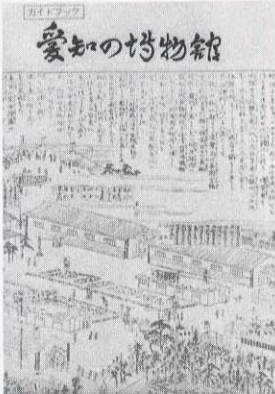


（文化財探勝 於徳川美術館）

昭和年月日	事	項
1月27日	実行委員会開催，於県文化会館。	
2月	「愛知県博物館・史蹟地図」を作成。	
2月23～24日	県外研修会開催，鳥羽水族館・海の博物館・ブラジル丸・神宮徴古館・農業館を見学。この折，愛知・三重両県博物館協会交換研究会の話あり。	
3月17日	実行委員会開催，於県文化会館。	
	昭和50年度：一『東西南北』No.92～100；『愛知の博物館』No.22発行。「愛知県博物館・史蹟地図」を県下中学校，市町村教委に配布。	
5月10日	理事会開催，於県文化会館。	
5月28日	昭和51年度愛博協総会開催，於蒲郡フラワーパーク。新役員選出。	
	顧問	熊沢五六
	理事（会長） 県文化会館	館長 内藤 徹
	理事（副会長） 御園天文学センター	所長 金子 功
	理事 日本モンキーセンター	所長 四手井綱英
	理事 博物館明治村	館長 谷口吉郎
	理事 市立名古屋科学館	館長 佐藤知雄
	理事 徳川美術館	館長 徳川義宣
	理事 熱田神宮宝物館	館長 岡本健治
	理事 荒木集成館	館長 荒木 実
	理事 豊田市郷土資料館	館長 宮川明男
	理事 鳳来寺山自然科学博物館	館長 大原 廣
	理事 東海市立平洲記念館	館長 築波 崧
	監事 名古屋城天守閣管理事務所	所長 加藤俊雄
	監事 切支丹遺蹟博物館	館長 佐藤よしあき
	また，あらたに実行委員会設置を決定，委員を委嘱する。	
	御園天文学センター	金子 功
	日本モンキーセンター	廣瀬 鎮
	市立名古屋科学館	三輪 克
	博物館明治村	海老沢立志
	徳川美術館	木下 稔
	名古屋市博物館（仮称）	新海明敏
	事務局	浅埜 勲
6月8～9日	東海博昭和51年度総会参加，於岐阜県博物館（岐阜県）。名和昆虫博物館・内藤記念くすり資料館・岐阜城等見学。	
7月29日	愛知県文化振興会議参加，於県立図書館視聴覚室，「博物館登録の手続」（日博協今井良雄），「博物館活動について」（金子功，廣瀬鎮），「学芸員試験について」（鈴木睦美）。	
10月8日	実行委員会開催，於県文化会館。	
10月14日	学芸員養成研修会開催，於県立図書館，「博物館学」（三輪克），「社会教育概論」（廣瀬鎮），「博物館における業務について」（金子功）。	
昭和52年		
2月4日	実行委員会開催，於県文化会館。	
2月14～15日	文化財探勝の会（第1回愛知県・三重県博物館協会交換研究会）開催，於名古屋城，「東栄町における文教の里づくり」（金子功），「盗難体験談」（寺内貞顕），名古屋市立博物館建設現場見学。	
	昭和51年度：一『東西南北』No.101～103；『愛知の博物館』No.23発行。	
	ガイドブック『愛知の博物館』県下公立高校，市町村教委配布。	
4月	リーフレット「みんなで博物館へ行こう」を作製。	

昭和年月日	事	項
5月20日	昭和52年度愛博協総会・理事会開催，於県文化会館，11施設14名参加。愛知県陶磁資料館・香嵐溪へびセンター・ヨコタ南方民族美術館が入会。昭和52年度実行委員は以下のとおり。	御園天文学科学センター 金子 功 日本モンキーセンター 廣瀬 鎮 市立名古屋科学館 滝本正二 財団法人荒木集成館 荒木 実 博物館明治村 海老沢立志 名古屋市博物館 西田躬穂 県文化会館 川島敏一
6月9～10日	愛知県・三重県博物館協会交換研究会（以下，両県交換会とす）を今後も継続することを決定。東海博昭和52年度総会参加，於熱川バナナワニ園（静岡県）。浜松市美術館・久能山東照宮博物館等見学。	
6月24日	実行委員会開催，於県文化会館。	
9月16日	実行委員会開催，於県文化会館。	
11月4日	理事会開催，於県文化会館，愛博協表彰規程につき協議。マスプロ電工美術館・古橋懷古館が入会。	
11月9～10日	愛知県文化振興会議参加，於奥三河郷土館。講演：— 「博物館登録指定申請について」，「博物館は何ををするところか」，「資料の整備と博物館活動」，「東栄町文化施設の概要」	
11月14～15日	第2回両県交換会参加，於鳥羽市海の博物館・（三重県）「伊勢神宮の式年遷宮と御装束神宝」（鈴木義一），「高齢者対象の科学知識普及活動の実践」（滝本正二），「ジュゴンの飼育法」（中村昭），ブラジル丸・鳥羽水族館・志摩マリナランド・お伊勢まいり資料館・神宮徴古館・農業館を見学。	
昭和53年		
1月18日	愛博協表彰規程につき賛否を問い，賛成23加盟館園により成立。	
1月24日	両県交換につき打合せ。	
2月10日	実行委員会開催，於県文化会館。	
	昭和52年度：— 『東西南北』No.104～115；『愛知の博物館』No.24発行，パンフレット「みんなで博物館へ行こう」県下公立小中高校，市町村教委へ配布。	
5月2日	表彰規程により，表彰選考委員会（第1回理事会）を開催，於県文化会館。	
5月10日	昭和53年度愛博協総会・理事会開催，於鳳来寺山自然科学博物館。	
	表彰：—	
	功労賞	徳川美術館 名譽館長 熊沢五六 長篠城趾史蹟保存館 館長 丸山 彰
	奨励賞	名古屋市東山動植物園 指導衛生係長 中村知治
	役員改選ならびに補充（1館園増員）により，役員留任し，補充理事として名古屋市博物館を追加。昭和53年度実行委員については，昭和52年度実行委員の留任と，あらたに御園天文学科学センターの竹ノ内昭夫を追加決定。また，昭和53年度東海博連表彰へ御園天文学科学センター所長金子功を推薦することに決定。参加21施設27名。	
5月19日	実行委員会開催，於県文化会館。	
6月14～15日	東海博昭和53年度総会開催，於名古屋市博物館，熱田神宮宝物館・明治村・県陶磁資料館を見学。	
11月10日	実行委員会開催，於県文化会館。	
12月4～5日	愛知・三重・岐阜三県博物館協会交歓研究会（以下，三県交流会とす）開催，於県労働者研修センター（愛知県当番）。参加25施設39名。「荒木集成館の運営方針」（荒木実）「海を守る運動」（石原義剛），「瑞浪市化石博物館の現状」（渡辺俊典），瀬戸陶土採掘場→瀬戸市歴史民俗資料館→愛知県陶磁資料館を見学。（岐阜県の参加により両県交換会を三県交流会に改める）	

昭和年月日	事	項
昭和54年		
1月17日	愛知県文化振興会議ならびに研修会を開催，於県文化会館。	
2月22日	表彰選考委員会開催，於県文化会館。	
3月14日	実行委員会開催，於県文化会館。	
	昭和53年度：一『東西南北』No.116～123；『愛知の博物館』No.25発行。ガイドブック『愛知の博物館』を県下高校，名古屋市内小中学校，市町村教委へ配布。新加盟館園：一昭和美術館・鈴木そろばん博物館・瀬戸市歴史民俗資料館・知多市民俗資料館。	
5月11日	昭和54年度愛博協総会・理事会開催，於名古屋市博物館，参加22施設25名。	
	愛博協第2回表彰	
	功労賞	蓬左文庫嘱託 織茂三郎
	奨励賞	犬山城管理事務所 岩田勝巳
	奨励賞	日本モンキーセンター 山川鳩彦
	15周年記念表彰	御園天文科学センター 金子 功
	15周年記念表彰	日本モンキーセンター 廣瀬 鎮
	昭和54年度実行委員の委嘱は留任。新規入会：一豊橋市美術博物館・名古屋市見晴台考古資料館・蒲郡市郷土資料館。	
5月12～13日	愛博協研修会開催，於東栄町御園天文科学センター。テーマ：一「地域社会と博物館」。	
6月21～22日	東海博昭和54年度総会参加，於山梨県立美術館（山梨県）。	
6月27日	実行委員会開催，於県文化会館。	
10月	ガイドブック『愛知の博物館』改訂版発行，1,000部。	
11月12～13日	第2回三県交流会参加，於内藤記念くすり博物館(岐阜県)。3名研究発表。	
12月12日	愛博協研修会・実行委開催，於県陶磁資料館，30名参加。	
昭和55年		
1月28	愛博協研修会・県文化振興会議共催，於熱田神宮宝物館。	
2月27日	表彰選考委員会開催，於県文化会館。	
	昭和54年度：一『東西南北』No.124～131；『愛知の博物館』No.26発行。	
5月20日	昭和55年度愛博協総会・理事会開催，於知多市民俗資料館。参加25施設34名。規約一部改正。	
	愛博協第3回表彰	
	功労賞	徳川美術館 跡部佳子
	功労賞	市立名古屋科学館 山田 博
	奨励賞	博物館明治村 小村幸男
	奨励賞	徳川美術館 佐藤豊三
6月26～27日	昭和55年度総会東海博参加，於神奈川県立博物館(神奈川県)。	
7月31日	実行委開催，於県文化会館。	
9月29～30日	第3回三県交流会参加，於三重県厚生年金休暇センター（三重県）。研究発表3名，伊勢神宮参拝・金剛証寺宝物館，等見学。	
11月5～6日	愛博協例外研修開催，奈良国立博物館「正倉院展」および奈良県橿原考古学研究所附属博物館を見学。参加5施設8名。	



「愛知博物館」



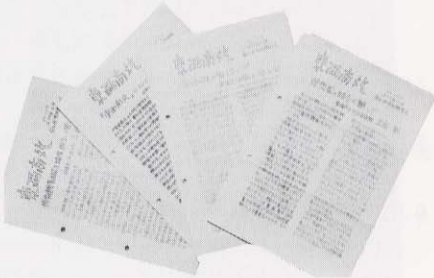
(第3回三県交流会 於伊勢)



「愛知博物館」



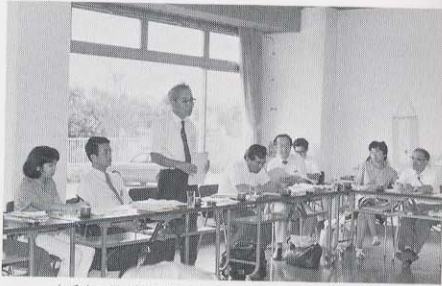
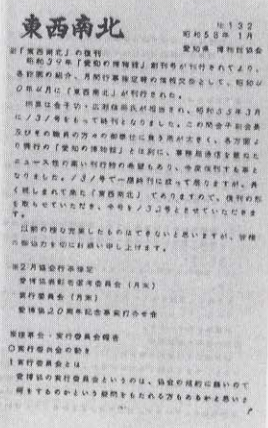
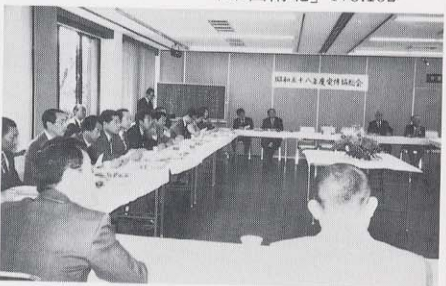
（第3回三県交流会 於伊勢）

昭和年月日	事	項
12月4日 昭和56年	実行委員会開催，於県文化会館。	
3月3日	愛博協表彰選考委員会開催，於県文化会館。	
4月7日	昭和55年度：一『愛知の博物館』No.27, 28, 29発行。大府市歴史民俗資料館入会。	
4月30日	実行委員会開催，於県文化会館，愛博協総会日程，昭和56年度事業計画，愛博協研修会等。	
	昭和56年度愛博協総会・理事会開催，於岩田洗心館。参加27施設32名。	
	愛博協第4回表彰	
	功労賞	市立名古屋科学館 平沢康男
	功労賞	名古屋市博物館 西田躬穂
	奨励賞	博物館明治村 大崎宗雄
	奨励賞	知多市民俗資料館 山原紀子
	新規加盟：一財団法人桑山清山会桑山美術館・豊橋市地下資源館（加盟44館園）。	
6月1日	ガイドブック『愛知の博物館』改訂版発行（1600部）。	
6月4～5日	愛博協研修会開催，於鳳来町開発センター・若松屋旅館。講演「設楽原決戦場について」（長篠城趾保存館館長丸山彰），設楽原古戦場跡見学，シンポジウム「資料の保存と展示」（意見発表：一豊橋市地下資源館家田健吾，ヨコタ南方民族美術館横田正臣，名古屋市博物館上村喜久子，知多市民俗資料館浅井紀子）	 「東西南北」
6月25～26日	東海博昭和56年度総会参加，於瑞浪市化石博物館（岐阜県）。	
9月3日	実行委員会開催，於県文化会館，三県交流会実施案，『愛知の博物館』No.31, 32発行について。	
11月22～23日	第4回三県交流会研究会開催，於東栄町清学山荘（愛知県）。研究発表3名，「長滝の延年（花奪祭）」（岐阜県，若宮修古館長若宮多聞），「野鍛冶」（三重県，海の博物館学芸員野村史隆），「中割そろばんの研究」（愛知県，鈴木そろばん博物館館長鈴木俊夫），講演「花祭について」（前東栄町文化財委員佐々木亀鶴），東栄町月の花祭見学，東栄町立博物館・花祭会館・ヨコタ南方民族美術館・長篠城趾史蹟保存館を見学。	
昭和57年		
2月25日	愛博協研修会，県文化振興会議と共催，於県婦人文化会館。	
3月10日	理事会・表彰選考委員会開催，於県文化会館，総会日程等。	
	昭和56年度：一『愛知の博物館』No.30, 31発行。	
4月24日	半田市郷土資料館入会。	
4月27日	実行委員会開催，於県文化会館，昭和57年度事業計画，等。	
5月25日	昭和57年度愛博協総会・理事会開催，於大府市歴史民俗資料館，参加30施設39名。	
	愛博協第5回表彰	
	功労賞	荒木集成館 荒木 実
	奨励賞	鳳来寺山自然科学博物館 松井 保
	役員改選により，下記のとおり決定。	
	理事（会長）	県陶磁資料館 館長 奥田信之
	理事（副会長）	奥三河御園高原自然学習村 所長 金子 功
	理事	熱田神宮宝物館 館長 岡本健治
	理事	荒木集成館 館長 荒木 実
	理事	市立名古屋科学館 館長 佐藤知雄
	理事	知多市民俗資料館 館長 竹内敏雄

昭和年月日	事	項
	理事 徳川美術館	館長 徳川義宣
	理事 名古屋市博物館	館長 浅井 牙一
	理事 日本モンキーセンター	所長 大沢 濟
	理事 博物館明治村	館長 関野 克
	監事 愛知県文化会館	館長 片山和夫
	監事 財団法人岩田洗心館	理事長 岩田不二子
	役員改選にともない、事務局も県文化会館より県陶磁資料館に移動。	
6月4日	事務局移転完了。	
6月10日	東海博昭和57年度総会参加，於浜松市博物館（静岡県）。	
6月21日	実行委員の委嘱。新実行委員は下記のとおり。	
	県陶磁資料館	中保 進
	県陶磁資料館	浅田員由
	奥三河御園高原自然学習村	金子 功
	熱田神宮宝物館	山田 蓉
	荒木集成館	荒木 実
	市立名古屋科学館	三輪 克
	知多市民俗資料館	浅井紀子
	徳川美術館	木下 稔
	名古屋市博物館	安達厚三
	日本モンキーセンター	廣瀬 鎮
	博物館明治村	海老沢立志
	愛知県文化会館	磯野英男
	岩田洗心館	岩田正人
	愛博協事務局は以下のとおり。	
	愛知県陶磁資料館	三輪昭三
	愛知県陶磁資料館	峰 一臣
	愛知県陶磁資料館	山田銀一
7月2日	実行委員会開催，於県陶磁資料館，実行委の在り方・事業分担（分担は以下のとおり）等。	
	総務担当 三輪，岩田	会則の検討・調査企画立案
	研修会担当 浅井，海老沢，荒木	企画立案実施
	三県交流会担当 浅田，廣瀬	企画・広報・参加勧誘
	東海博担当 全員	58年度は愛知県が当番県
	編集委員 山田，磯野，安達	『愛知の博物館』その他
	総括責任者 金子功，中保進	
	東海博の在り方・日程，愛博協研修会日程，等。15名出席。	
8月11日	実行委員会開催，於県陶磁資料館，東海博，愛博協研修会，等。11名出席。	
9月8～9日	愛博協研修会開催，於知多市民俗資料館。テーマ：「ものの見せ方」，司会：明治村海老沢立志，意見発表者：市立名古屋科学館三輪克・桑山美術館桑山泰幸・知多市民俗資料館浅井紀子，講演：国友俊太郎（国友デザイン研究所所長），知多市民俗資料館・常滑市立陶芸研究所・常滑市立民俗資料館・野間大坊・南知多ビーチランド等見学。16施設27名参加。	
9月22日	実行委員会開催，於県陶磁資料館，三県交流会，20周年記念事業について。11名出席。	



（愛知県博物館協会研修会 於知多）

昭和年月日	事	項
10月4～5日	三県交流会参加，於岐阜県立博物館(岐阜県)。テーマ：「博物館は来館者のニーズにいかに応えているか」，意見発表者：三重県・鳥羽水族館片岡照男，愛知県・蒲郡市郷土資料館小笠原久和，岐阜県・岐阜県博物館小野木三郎。施設見学＝美濃和紙手漉場・新長谷寺・日本刀鍛練場。	 (愛知県博物館協会研修会 於知多)
10月8日	理事会開催，於県陶磁資料館，昭和57年度事業推進状況，昭和58年度以降の基本方針，県費補助打切善後策，規約改正(実行委員会の明文化，書記・会計の新設，会費の改訂)，他。12名出席。	
10月26日	実行委員会開催，於県陶磁資料館，昭和58年度事業方針案，愛博協加盟勧誘運動の実施案，県内博物館実態アンケート，他。15名出席。	
11月11日	加盟勧誘の依頼実施。	
11月26日	実行委員会開催，於県陶磁資料館，勧誘運動推進状況，実態調査，20周年記念事業，愛博協と加盟館園との情報伝達の円滑化(事務局通信の復活)県との共催による昭和58年度愛博協職員研修会について。	
12月22日	実行委員会開催，於県文化会館，昭和58年度事業計画，東海博日程等(愛知県当番)，20周年記念『愛博協20年のあゆみ』編集委員の決定について，他。11名出席。	
昭和58年		
1月13日	県内博物館施設実態調査の実施(～2月10日まで)	
1月27日	実行委員会開催，於県文化会館，「歴史民俗資料館等の活動を考える」研究会(以下，歴民部会，とす)，20周年記念誌編集方針，東海博実施案，『東西南北』復刊第1号について他。13名出席。	
1月	『東西南北』復刊，通巻第132号，編集担当：一山田蓉。	
2月16日	実行委員会開催，於市立名古屋科学館，昭和57年度事業報告案，昭和58年度総会・表彰，歴民部会，20周年記念誌，東海博実施最終案，実態調査のまとめ方，加盟勧誘運動の報告とガイドブック『愛知の博物館』改訂版作成について，他。13名出席。	 「東西南北」No.132
2月23日	御園高原自然学習村金子功所長，「協会加盟館の意識調査」アンケート実施(4月26日調査結果及び考察の発表)。	
3月9日	理事会・表彰選考委員会開催，於県文化会館，昭和57年度事業報告，昭和58年度事業計画，表彰選考，ガイドブック『愛知の博物館』改訂版作成の予算措置について，他。	
3月17日	歴民部会第1回研修会開催，於三好町立歴史民俗資料館，施設22名参加。	
3月23日	実行委員会開催，於県文化会館，昭和58年度総会実施最終案，20周年記念誌，愛博協表彰規程の再検討，他。	
4月10日	御園高原自然学習村金子所長，『博物館の地域連絡協議会の活動—その問題点と振興策について—』(『山村文化研究所報』No.4)を公表。	
4月14日	理事会開催，於県陶磁資料館，昭和57年度事業報告，昭和58年度事業計画，他。 昭和57年度：一『東西南北』No.131～134；『愛知の博物館』No.32，No.33発行，実行委員選任。	
4月26日	昭和58年度愛博協総会実行委開催，於財団法人後藤報恩会昭和美術館。	 (昭和58年度愛博協総会 於昭和美術館)

昭和年月日	事	項
	愛博協第6回表彰	
	功労賞	愛知県文化会館 磯野英男
	功労賞	市立名古屋科学館 後藤久雄
	功労賞	市立名古屋科学館 花立ゆき子
	功労賞	徳川美術館 木下 稔
	功労賞	名古屋市博物館 上村喜久子
	奨励賞	熱田神宮宝物館 井後政晏
	感謝状	前愛知県文化会館館長 片山和夫（前愛博協会長）
	御園高原自然学習村の理事辞任にともなう後任理事ならびに副会長の選任，後任役員は以下のとおり。	
	理事	豊橋市美術博物館 館長 白井昭吾
	理事（副会長）	熱田神宮宝物館 館長 岡本健治
	実行委員は以下の異動をのぞき，他は留任となる。	
	県陶磁資料館 副館長	中保 進（辞任）
	御園高原自然学習村所長	金子 功（辞任）
	豊橋市美術博物館	河合正樹（新任）
	事務局担当は以下のとおり。	
	県陶磁資料館 課長	桜木 廉
	県陶磁資料館 主査	峰 一臣
	規約改正：一実行委員会・事務局委嘱の明文化，書記・会計の新設，会費の改訂：1口4,000円から1口6,000円へ。新加盟館園（15館園）の自己紹介と意見交換（『愛知の博物館』No.34参照）。新加盟館園は以下のとおり。	
	碧南市青少年海の科学館（碧南海浜水族館），名古屋昆虫館，三河武士のやかた家康館，岡崎信用金庫資料館，蟹江町歴史民俗資料館，美和町歴史民俗資料館，東郷町郷土資料館，清洲貝殻山貝塚資料館，財団法人ヒマラヤ美術館，三好町立歴史民俗資料館，和紙のふるさと展示館，財団法人リトルワールド，一宮市教育委員会博物館建設準備事務局，常滑市俗資料館，吉良町歴史民俗資料館（加盟57館園となる）。	
5月27日	実行委員会開催，於市立名古屋委学館，東海博の最終打合せ・事務分担の決定，愛博協20年史編集案の検討，他。	
6月2～3日	東海博昭和58年度総会開催，於愛知県市町村職員組合保養所「レークサイド入鹿」及びリトルワールド（愛知県当番），理事会・総会及び討論会「各県博物館協力の現況と課題」報告者：一神奈川県・県立博物館中島副館長，山梨県・信玄公宝物館野沢事務局長，静岡県・久能山東照宮松浦館長，岐阜県・県立博物館吉本館長，愛知県・市立名古屋科学館三輪係長，司会：廣瀬鎮。施設見学＝リトルワールド・小牧市歴史館（『東西南北』No.137参照）。参加者79名。	
6月23日	愛博協美術部会第1回研修会開催，於岩田洗心館，講演：「博物館運営の実際一収支バランスの適正化をめざして」（昭和美術館服部昭義事務長）。参加4施設5名。	
6月24日	実行委員会開催，於市立名古屋科学館，愛博協研修会，東海博結果報告，20周年記念誌編集案，他。	
7月初旬	東海銀行貨幣資料館入会（加盟59館園）。	



（昭和58年度東海博総会 於犬山）

昭和年月日	事	項
7月9日	ガイドブック『愛知の博物館』改訂版のための原稿募集はじまる。	
7月15日	第2回歴民部会開催，於常滑市民俗資料館，テーマ：「展示の方法」。	
7月22日	実行委員会開催，於県陶磁資料館，研修会実施最終案，他。	
8月23日	実行委員会開催，於市立名古屋科学館，20周年記念誌編集案・編集委員長ほか決定（編集委員長：県陶磁資料館中保副館長，編集事務：山田蓉実行委員），愛博協県内研修会事務分担，等。	
9月6～7日	愛博協研修会，於愛知県労働者研修センター，テーマ：「博物館等における教育サービスのあり方—PART I “解説”—」，意見発表者：リトルワールド鹿野勝彦，内藤記念くすり博物館青木充夫，名古屋市博物館井上光夫，岩田洗心館岩田正人，香嵐溪へびセンター杉山貞幸，三河武士のやかた家康館堀江登志実。現地研修：「和紙のふるさと展示館」。愛知県内博物館施設実態調査 No. 2実施。	
9月13日	『愛知の博物館20年誌』編集委員の委嘱。	
9月28日	実行委員会開催，於県文化会館，県内研修会報告，三県交流会，サロン，20周年記念誌出版の予算捻出について，「若手学芸員おおいに語る」の期日及びテープ起しの担当・事例研究提出の期限，等。	
9月30日	愛博協加盟館園職員名簿作成のための調査開始。	
10月24～25日	三県交流会参加，於名張市（三重県）	
10月28日	実行委員会開催，於県文化会館，20周年記念誌用実行委討論「博物館の将来を語る」，サロン開設準備の進展状況について，事例研究のテーマ提出，他。10名出席。	
11月14日	実行委員会開催，於県陶磁資料館。	
11月25日	第3回歴民部会開催，於吉良町歴史民俗資料館—美術梱包の方法—。	
12月10日	実行委員会開催，於市立名古屋科学館。	
昭和59年		
1月30日	実行委員会開催，於県文化会館。	
2月20日	実行委員会開催，於王山会館，総合資料・ガイドブック改訂・20年史の状況について。	
3月22日	第4回歴民部会開催，於美和町歴史民俗資料館—民俗資料の展示の企画立案—	
3月23日	実行委員会開催，於県文化会館，総合資料作製・20年史の状況について。	
	昭和58年度：—『東西南北』No.135～145：『愛知の博物館』No.34，35発行。	
	昭和58年度新規加盟館，名古屋昆虫館他15館，計65館となる。	



（協会誌「愛知の博物館」）



（会報月刊「東西南北」）

愛博協の歴代会長



初代
熊 沢 五 六
(昭39.1～昭51.5)



2代
内 藤 徹
(昭51.6～昭54.4)



3代
片 山 和 夫
(昭54.5～昭57.4)



4代 (現在)
奥 田 信 之
(昭57.5～)

II. 愛博協の現状

東海地区博物館協会と愛知県博物館協会の特色

東海地区博物館連絡協議会が、社団法人日本博物館協会の中部支部とみなす活動体として今日承認されているが、もともと、各地に戦後建設された公・私博物館が県域ごとに博物館の連絡組織をもち相互の交流をはかったことに出発し、そして各県単位の組織が漸次できあがってきて、愛知・岐阜・静岡・神奈川・山梨の5県の博物館組織が一体となってつくられたのが、東海地区博物館連絡協議会である。その事業内容については、会則にくわしいが、年間を通じて1回の総会と講演会、施設見学会、研究会などを5県もちまわりで実施してきている、この東海地区のまとまりに三重県が含まれていなかったり、神奈川県が含まれていることからしばしば話題となるのはその組織形態であるが、神奈川県博物館協会との強い結び付きからこのような姿となったのである。今日では、このような県域にこだわる意識もなくなり、結びつき安いところと結びついて協力事業が進められることが望ましいと考えられている。

博物館事業の発展をめざした協議会活動は、昭和58年6月、犬山において開催された昭和58年度東海地区博物館連絡協議会を機会としてより新たなそして積極的な活動期に入ったといえるのではなかろうか。同上連絡協議会は、各県協会の実態報告と問題点の指摘を行なった画期的な会合であった。現在の各県博物館協会の動勢については同会合において提出された各県博物館協会資料にもとづいて以下紹介しよう。

神奈川県博物館協会

神奈川県博物館協会は、東海地区の博物館協会のなかでもっとも早期に結成されて、今日にいたるまで意欲的な諸事業を継続してきている。年1

回の総会、そしてその他役員会、部会長会議が開催され、年間の事業が企画され実施されている。近県視察研修会をはじめとする人文科学・自然科学機能研究部会等に加えて博物館等職員の研修会が活発にひらかれている。昭和57年度の記録によれば、会報、表彰事業もきわめて活発であり、予算規模180万円である。名誉会長に神奈川県知事をむかえ、29名の顧問、参与4名、参加館園の多くのスタッフを運営の中枢におき、まことに意欲的な事業がもくろまれている当協会は、個人であっても協会の運営に貢献度の高いものを特別会員としてむかえいれている。今日協会会員施設69館、特別会員2名からなる。

静岡県博物館協会

静岡県博物館協会では、総会、学芸職員研究会、



(昭和44年度東海博総会 於モンキーセンター)

講演会、会報発行、研究紀要の刊行、合同研究会、功労者表彰、情報交換等が主な事業であるが、予算規模は100万円である。昭和57年度事業にみると、加盟館名簿の刊行、県内博物館要覧などの発行に意欲をみせている。入会加盟館も46館をこえ今後の活動が期待されているが、県内博物館の実

態総合調査等の実践活動の上になった研究紀要の発行が計画されている。

岐阜県博物館協会

岐阜県博物館協会の事業は、年間5回をこえる博物館セミナーの開催に特色がある。協会運営についてはその事業内容は、神奈川・静岡県同様の会合、刊行物等を有している。予算規模はすでに100万円をこえ、機関紙『岐阜の博物館』が発行され、全国博物館協会事務局（10ブロック）に送られている。各種事業の推進、実践担当者からなる機関誌委員会、セミナー委員会が活発に機能している。参加加盟館は昭和56年3月現在県立1、市町村立28、私立法人立48、個人会員32であるが、特に個人会員制を認めており、多数理事の事業分担によって事業の推進がなされている。学芸技術員講習会実行委員会が設けられていて、職員研修のための体制をととのえている。事務局は岐阜県博物館内におかれている。

愛知県博物館協会

愛知県博物館協会の諸事業も近年活発化している。研修会、研究会、三重交流研究会等職員対象の研究会、研修会事業に力が入られており、職員表彰、印刷物として『愛知の博物館』、『東西南北』その他、ガイドブックが刊行される。総会、役員会に加えて実行委員会が毎月1回開かれていて、理事館から1名の実行委員が協会事業の企画、立案、実施を担当し、事務局機能の強化、活発化をはかっている。昭和58年加盟館が急増し、今日65館、予算規模は300万円余である。とくに歴史・民俗および美術館部門等の部門別研究会の開催、学芸員懇談会の支援等、将来の発展が期待されている。

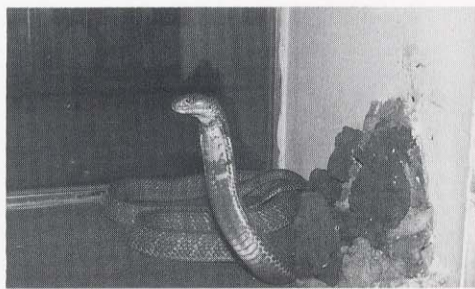
山梨県博物館協会

山梨県博物館協会は、近年ようやく、組織強化、事業企画化などの協会活動が、協会事務局を中心として活発化してきた。現在加盟館14館で事業規模は少ないが、各施設間の相互交流・研修事業が

はじめられている。昭和59年東海地区博物館協議会の山梨県開催を機会に一段の飛躍が期待されている。事務局は山梨県立美術館内にある。

東海地区の博物館組織の発展は、各県協会の自主的な運営、活発な活動の高まりに求められているが、各県毎の事情はことなっている。博物館の年々の増加や、歴史、民俗博物館の充実によって協会組織は漸次強化されつつあると云えよう。これまでの親睦会から研究・研修会へと研修事業への要請が強くなった今日、さらに望まれるのは、地域社会をこえた博物館機能相互のむすびつきや、博物館と地域との係わりの強化であろうが、やはり何といっても博物館職員の自覚であり、協会事業への認識と協力が必要とされている。協会活動の原動力となるのはあくまでも人であり、協会事業の真髄は、参加各館園による自主的な事業参加に他ならない。まことに奉仕の精神に支えられ発展してきた各県博物館協会も、今や行政公機関の協力によってさらに事業そのものを発展させることが可能となってきているのである。

（日本モンキーセンター学芸部長 広瀬 鎮）



（キングコブラ 香嵐溪へびセンター）

愛博協加盟の抱えている諸問題

愛博協加盟館の抱える問題点は、加盟館の実態が明確である事が先決であり、以前協会として、加盟館の実態調査を行った例はあるが、2～3年前より加盟館が急増し、その問題点も時代と共に変化したと考えられる。そこで昭和58年にアンケート方式で調査を行った愛博協加盟館実態調査により、その問題点のいくつかを指摘してみたいと思う。尚この集計は飽くまでローデータであることをお断りし、各自の総合的な分析を試みられることを希望します。

冒頭にアンケートの集計を表示し、後に各項目についての簡単な分析を記した。

○館種

総合—3 歴史—16 考古—3 民俗—6 建造物—1 絵画—3 工芸—6 自然史—1 理工—2
動物—1 水族—1 その他—4 計47館 ㊤一郷土資料館は歴史に含む

○設立年月日

昭11～20—1 昭21～30—2 昭31～40—6 昭41～50—15 昭51～58—22 計46館

○開館年月日

昭11～20—1 昭21～30—2 昭31～40—6 昭41～50—9 昭51～58—26 計44館

○設置者

県立—3 市立—16 町村立—8 財団法人—9 宗教法人—1 会社—5 私立—4 その他—1
計47館

○登録・相当別

登録—9 相当—7 計16館

○職員総数

1～2名—9 3～5名—23 6～9名—5 10～15名—3 16～20名—0 21～30名—1
31～50名—2 50名以上—3 計46館

○館長

専任—21 兼任—21 計42館 〔行政職—15 特別職—9 教育職—1 計25館（公立館のみ）〕

○学芸員

(イ) 資格取得者

0名—9 1～2名—20 3～5名—5 6～9名—2 10～15名—0 16～20名—1 計37館

(ロ) 職制上の認定

認めている—13 認めていない—12 計25館

(ハ) 採用方法

公募—11 推薦—2 任意—10 計23館

(ニ) 館外研修の有無

有—15 無—14 計29館 〔有の場合 国及び地方公共団体実施するもの—13 民間団体実施する

もの-3 その他-3 計19館 ㊟一種別に重複有り)

○職員経験年数

学芸員 1～5年-24 6～10年-7 11～15年-2 16年以上-4 計37名

事務員 1～5年-26 6～10年-10 11～15年-2 16年以上-6 計44名

○職員の身分保障

(イ) 各種保険・共済について

有-34 無-9 計43館 (無の場合 必要-4 不必要-3 計7館)

(ロ) 退職金のプール制度について

プール制度有り-17 制度化されていないが相互扶助的に行なわれている-0 無-18 計35館

(相互扶助・無の場合その必要性 必要-6 不要-8 計14館)

○建築の概要

(イ) 敷地

100～200m²-2 301～500-3 701～900-2 901～1,200-2 1,201～1,500-1

1,501～2,000-1 2,001～2,500-2 2,501～3,000-2 3,501～4,000-2 5,000以上-20

計35館

建築面積

0～200m²-11 201～300-4 301～500-4 501～700-5 701～900-4 901～1,200-4

1,201～1,500-3 1,501～2,000-2 2,001～2,500-4 2,501～3,000-1 3,001～3,500-1

3,501～4,000-0 4,001～4,500-0 5,000以上-4 計47館

(ロ) 施設内容

展示関係

100～200m²-15 301～500-9 501～700-3 701～900-1 901～1,200-2 1,201～1,500-

1 2,001～2,500-1 2,501～3,000-7 計39館

収集保管関係

0～100m²-15 101～200-14 201～300-4 401～500-2 501～600-2 601～700-2 801-

-900-2 1,000以上1 計42館

教育普及関係

0～100m²-10 101～200-8 201～300-2 301～400-3 701～800-1 計24館

調査研究室関係

0～10m²-1 11～50-15 51～100-5 101～150-2 151～200-2 301～350-2 計27館

管理関係

0～10m²-3 11～50-17 51～100-6 101～150-1 201～250-1 301～350-5 計33館

その他

0～10m²-3 11～50-6 51～100-2 101～150-2 151～200-4 251～300-3

301～350-14 計34館

○設備

空調=全館-23 部分-14 無-5 計42館

警報装置＝有－39 無－6 計45館

防火装置＝有－34 無－11 計45館

○昭和57年度収支状況

収入

0～100万円－15 101～200－3 201～300－1 301～400－3 1,001～1,500－3 5,000万円以上
－11 計35館

内訳（収入総額に占める比率を項目ごとに表示）

①入館料

0％－2 10％－1 20％－1 30％－1 60％－1 70％－1 80％－3 90％－5 100％－4

②補助金・助成金

0％－0 10％－5

③寄附金

10％－2 30％－1 80％－1

④その他

0％－1 10％－3 20％－4 40％－1 60％－1 80％－1 90％－2 100％－3

支出

0～100万円－4 101～200－3 201～300－1 301～400－3 401～500－1 501～600－2
901～1,000－1 1,000万円以上－19 計34館

内訳（支出総額に占める比率を項目ごとに表示）

①人件費

0％－1 10％－2 20％－1 30％－2 40％－4 50％－8 60％－3 70％－3 90％－1

②管理費

0％－4 10％－7 20％－7 30％－4 40％－3 50％－3 70％－3 100％－1

③資料整備費

0％－6 10％－3 20％－4

④事務費

0％－12 10％－2 20％－3 30％－2

⑤調査研究費

0％－8 10％－4 40％－1 90％－1

⑥備品費

0％－10 10％－4 20％－2 30％－1 40％－1

⑦その他

0％－11 10％－2 20％－4 50％－2 60％－2 70％－1

○事業の記録

昭和57年度中の特別展（企画展を含む）開催回数

1回－9 2回－10 3回－2 4回－1 5回－3 7回－1 計26館

特別展開催延日数

1～10日—1 11～20—3 21～30—2 41～50—5 61～70—1 91～100—2 101～110—2
111～120—1 131～140—4 計21館

特別展図録発行回数

1～2回—8 3～4—2 5～6—2 計12館

特別展開催予算額

0円—1 10～50万—4 51～100—1 101～150—1 151～200—1 251～300—2
400以上—5 計15館

○年度別利用者数の推移（昭和57年を100とした指数）

(昭39)	51～60—1	館	61～70—1	91～100—1	101～110—1		平均80
(昭40)	50以下—1	51～60—1	71～80—3	91～100—1	121～130—1		平均78
(昭41)	50以下—1	71～80—3	81～90—1	101～110—2	111～120—1		平均85
(昭42)	50以下—3	51～60—1	71～80—2	91～100—2	111～120—1	141～150—1	
		151～160—1					平均86
(昭43)	50以下—1	61～70—1	71～80—1	81～90—1	91～100—4	111～120—1	
		151～160—1	161～170—1				平均99
(昭44)	50以下—1	51～60—1	81～90—2	91～100—3	101～110—1	151～160—2	
		161～170—1					平均103
(昭45)	50以下—2	81～90—3	91～100—3	121～130—1	131～140—1	161～170—1	平均96
(昭46)	61～70—1	71～80—1	81～90—2	91～100—3	101～110—1	121～130—2	
		131～140—3	181～190—1				平均110
(昭47)	50以下—1	81～90—2	91～100—3	101～110—2	111～120—1		
		121～130—1	131～140—1	141～150—1	181～190—1		平均109
(昭48)	61～70—1	81～90—1	91～100—3	101～110—2	111～120—2		
		121～130—2	141～150—1	151～160—1	181～190—1		平均115
(昭49)	71～80—1	81～90—1	101～110—3	111～120—4	131～140—2		
		141～150—1	151～160—2	181～190—1			平均123
(昭50)	50以下—1	91～100—2	101～110—4	111～120—2	121～130—1		
		131～140—1	141～150—2	181～190—1			平均120
(昭51)	61～70—1	91～100—4	101～110—3	111～120—2	121～130—2		
		141～150—1	151～160—1	161～170—1	181～190—1		平均118
(昭52)	61～70—2	81～90—1	91～100—5	101～110—2	121～130—2		
		131～140—1	141～150—2	151～160—3	181～190—1		平均117
(昭53)	61～70—1	81～90—4	91～100—5	101～110—3	111～120—3		
		121～130—4	141～150—2	181～190—1			平均103
(昭54)	51～60—1	71～80—2	81～90—4	91～100—6	101～100—4	111～120—6	
		121～130—4	131～140—3	161～170—1			平均106
(昭55)	61～70—2	71～80—1	81～90—4	91～100—5	101～110—11	111～120—4	

121～130—3 131～140—1 171～180—1 平均104
 (昭56) 71～80—2 81～90—3 91～100—11 101～110—7 111～120—8
 121～130—1 131～140—1 平均102
 (昭57) 平均100

○年間開館日数

300日以上—22 299～250—19 249～200—3 199～150—1 計45館

○年間休館延日数

1～10日—2 11～20—0 21～30—1 31～40—1 41～50—0 51～60—8 61～70—8
 71～80—10 81～90—1 91～100—1 101～110—1 111～120—1 145～150—1 計35館

○入館料

平常展 ①有料—26館 ②無料—17館 計43館

内訳(有料の場合) 10～50円—1 51～100—4 101～150—2 151～200—4 201～250—2
 251～300—9 301～350—1 801～900—1 901～1,000—1 計25館

特別展 ①有料—15館 ②無料—19館 計34館

特別展・平常展入館料が総支出に占める割合

10%未満—7 10%～24—3 25～49—1 50～74—2 75以上—2 100%—1 計16館

○PR活動(常設展・特別展・講習会・映画を通して)

自館印刷物館報ニュースなど—21 ポスター—20 自治体の公報掲載—24 新聞掲載—23 テレビ—13
 ラジオ—11 車内公告—9 友の会会誌への掲載—5 ダイレクトメール—12 雑誌一般誌への掲載—
 16 その他—4

○入館者数の増減要因

1位=博物館の立地条件—32館 2位=PR—29館 3位=展示企画—26館 4位=学校その他各種団
 体との提携—17館 5位=観光コースへの組込—16館 6位=博物館職員と利用者との交流—13館 7
 位=友の会・講演会などの企画の活性化—11館

○入館者増加のため実施している活動

1位=広報活動に力をいれる—28 2位=展示更新をおこなう—22 3位=学校と連携—16 4位=講
 習会等をおこなう—14 5位=特別展・企画展を増す—11 6位=地元の各種団体と連携—8

○出版活動

・館報 有—16館 無—17館 ・ニュース等普及誌 有—8館 無—16館 ・資料目録 有—18館 無—
 12館 ・展覧会図録 有—17館 無—9館 ・研究紀要 有—8館 無—18館 ・パンフレット 有—
 35館 無—1館 ・展示資料解説書 有—16館 無—6館

○後援会 有—2館 無—38館 計40館

○友の会 有—9館 無—35館 計44館(有の場合 10～50名—1 51～100—1 101～150—4
 301～350—1 351～400—1 1,000以上—1)

○ボランティア 有—9館 無—33館 計42館

○資料目録などの整備状況

資料台帳 有—33館 無—7館 計40館

121～130—3 131～140—1 171～180—1 平均104
 (昭56) 71～80—2 81～90—3 91～100—11 101～110—7 111～120—8
 121～130—1 131～140—1 平均102
 (昭57) 平均100

○年間開館日数

300日以上—22 299～250—19 249～200—3 199～150—1 計45館

○年間休館延日数

1～10日—2 11～20—0 21～30—1 31～40—1 41～50—0 51～60—8 61～70—8
 71～80—10 81～90—1 91～100—1 101～110—1 111～120—1 145～150—1 計35館

○入館料

平常展 ①有料—26館 ②無料—17館 計43館

内訳(有料の場合) 10～50円—1 51～100—4 101～150—2 151～200—4 201～250—2
 251～300—9 301～350—1 801～900—1 901～1,000—1 計25館

特別展 ①有料—15館 ②無料—19館 計34館

特別展・平常展入館料が総支出に占める割合

10%未満—7 10%～24—3 25～49—1 50～74—2 75以上—2 100%—1 計16館

○PR活動(常設展・特別展・講習会・映画を通して)

自館印刷物館報ニュースなど—21 ポスター—20 自治体の公報掲載—24 新聞掲載—23 テレビ—13
 ラジオ—11 車内公告—9 友の会誌への掲載—5 ダイレクトメール—12 雑誌一般誌への掲載—
 16 その他—4

○入館者数の増減要因

1位=博物館の立地条件—32館 2位=PR—29館 3位=展示企画—26館 4位=学校その他各種団
 体との提携—17館 5位=観光コースへの組込—16館 6位=博物館職員と利用者との交流—13館 7
 位=友の会・講演会などの企画の活性化—11館

○入館者増加のため実施している活動

1位=広報活動に力をいれる—28 2位=展示更新をおこなう—22 3位=学校と連携—16 4位=講
 習会等をおこなう—14 5位=特別展・企画展を増す—11 6位=地元の各種団体と連携—8

○出版活動

・館報 有—16館 無—17館 ・ニュース等普及誌 有—8館 無—16館 ・資料目録 有—18館 無—
 12館 ・展覧会図録 有—17館 無—9館 ・研究紀要 有—8館 無—18館 ・パンフレット 有—
 35館 無—1館 ・展示資料解説書 有—16館 無—6館

○後援会 有—2館 無—38館 計40館

○友の会 有—9館 無—35館 計44館(有の場合 10～50名—1 51～100—1 101～150—4
 301～350—1 351～400—1 1,000以上—1)

○ボランティア 有—9館 無—33館 計42館

○資料目録などの整備状況

資料台帳 有—33館 無—7館 計40館

警報装置の設置率は87%で、全国平均と同じであり、防火装置も75%で設置されて居り、比較的新しい館の多い愛知県下の博物館施設での設置状況は、全国平均よりやや上回っていると言える。

(4) 収支状況について

収入状況については、集計を見ると明らかな様に、完全に二極分化現象を示している。

収入内訳を見れば明らかな様に、入館料の占める比率の内80%~100%は総て財団立及び私立であり、寄附・その他で60%~100%を示すのは、財団立の一部と公立である。

次に支出経費について見ると、人件費の総支出に占める比率が大きい。平均32%であるが、これを全国平均に比べると6%低い。

次に管理費について見ると、平均20%で、これは全国平均より1%上回っている。

次に資料整備費について見ると、平均12%で全国平均より1%上回っている。

次に調査研究費について見ると、平均11%でこれは全国平均より8.6%高い。

この様に見ると、各項目ごとに全国平均と大きな差は無いものの、調査研究費に関しては大幅に増大して居り、加盟自体の調査研究活動にはかなりの経費が支出されている事が数値に表われている。

(5) 博物館活動について

館における事業の中で、特別展・企画展を例にとってみた。

先ず特別展(含企画展)開催回数は、年間1~2回が全体の73%で、これに伴い開催延日数も50日程度と140日が全体の50%を占める。又特別展に係る予算額は、10万~50万と400万以上の二極分化を示している。これは館の予算額にも比例するところであろう。

次に利用者数の推移を見ると、昭和57年度の入館者総数を100として比較すると、入館者の推

移に大きな変化が見られる。昭和43年度の入館者指数と、昭和57年度が同じであり、昭和43年以降約5~6%の増加をみるが、昭和49年度をピークに逆に2~3%づ、減少し、昭和52年度から53年度にかけて14%と急激な減少を示し、再び57年度にむけて2%づ、減少している。この傾向は全国平均と類似しており、昭和49年度のピークは共通しているが、その指数は愛知県下の博物館指数が、かなり高い数値を示している。尚この数値は同一対象館も、新しく途中年度開館も含まれているので、全国平均数値(同一対象館)と多少の変化はあると思われるが、昭和52年度から53年の減少は特に注目されるところであろう。

次に開館日数は、回答館総てが博物館法の登録博物館。150日以上の日数を充している。特に250日以上の開館日数の館は全体の91%を示し、全国平均84%より高い数値を示している。

次に入館料の有料・無料の割合は、有料館が全体の60%で、全国平均76%より低く、全国平均の国公立有料館数値と同じ比率である。この有料館の内入館料収入が総予算に占める比率をみると、44%の館がその比率が10%未満で、比率が想像以上に低い事が分かる。

次にPR活動についてみると、公立館は何といても自治体公報への依存度が高く、私立館を含めても、新聞掲載、自館印刷物、ポスター等の方法が高い数値を示している。この事は次項の入館者数増減要因の第2位に挙げられている様に、各館ともに極めて関心の強い事項であろう。この事は、全国平均にも同様の傾向が見られるが、自館の印刷物である館報・ニュースの占める率が全国平均より多少高く、館独自の広報活動が盛んである事を示す。

入館者増加対策についてみると、先に記した通り、その第1位が広報活動、2位が展示更新となっているが、全国平均は1位広報活動は同

じ、2位に学校との連携を挙げ、展示更新は4位となっている点多少異なる。又全国平均が観光コースへのくみ込みが強いのに比較し、愛知県は比較的展示に力が注がれている様にも思うが、反面館外への働きかけに欠ける点がある様にも思われる。

次に資料台帳・目録の保存率は、全国平均と同じ75%・65%である。

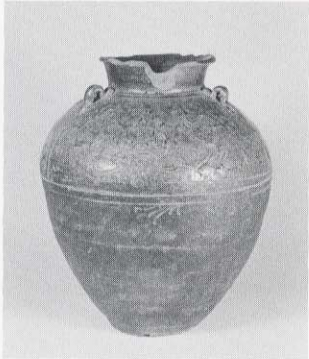
次に博物館活動の現状と課題についても、先の入館者増加対策に見る様に、その現状については、資料展示活動及び同教育普及活動が挙げられ、問題点についても学芸活動がその第1位に指摘されている様に、現状と課題が、学芸活動に集中している点は注目されるであろう。

尚今度のアンケート回答率が加盟館総数に比べて、かなり低かった事から、加盟館の実態を正確に示したものであるかどうか多少疑問な点もあり、提起した統計項目以外にも必要な項目があろうかと思われる。一応本アンケートの結果、当県協会加盟館の概略が分り、何等かのご参考になれば意義あること、思う。

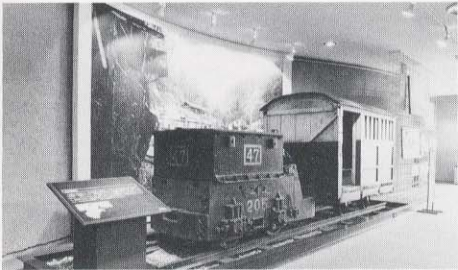
(愛博協実行委員・熱田神宮宝物館学芸員
山田 蓉)



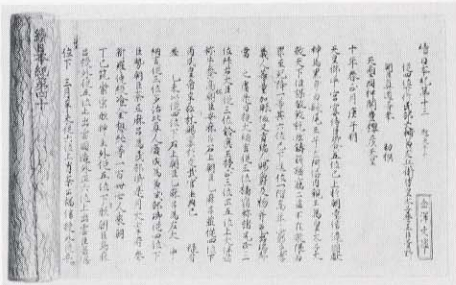
(重民・ひょうそく 蒲郡市郷土資料館)



(重文・渥美灰釉芦鷺文三耳壺 愛知県陶磁資料館)



(バッテリー機関車と客車 豊橋地下資源館)



(重文・続日本紀 蓬左文庫)

学芸部門の諸問題

博物館と学芸部門

博物館（以下館という）には、基本的組織として学芸部門と管理部門がある。これらが各々最良の状態で機能し、かつ両部門が有機的な連携を保ち、全体としても一つのまとまりある組織を形作っていてこそ博物館という機関が、その目的達成のために機能することができる。

このように、学芸部門は、館を支える車の両輪の一つとして位置づけられているものであるが、その実像は必ずしも同一ではない。とくに管理部門と比較して、その必要性が十分に認識されていなかったり、たとえ認識されていたとしても組織内における位置づけが高くなく、人員・予算等の配分順位が次位以下になっていることが多い。

学芸部門の位置づけの高低は、館の規模、対象とする分野、設立年代などによっても差がある。一般に、規模が大きく学芸部門が組織として独立している館では、比較的その位置づけが高い。しかし、館全体でも職員が3～5名というところが圧倒的に多い、愛知県博物館協会（以下愛博協という）の協会加盟館調査からは、学芸部門が組織として独立している館は少なく、その位置づけがそれほど高くないことが推察される。

学芸部門の位置づけは、館の対象分野によっても差のあることが他の調査から判明している。いわゆる人文系博物館における位置づけは、学芸員の配置などからみて、科学系とくに理工系よりも高く、また科学系の中でも自然史系は、その位置づけは人文系に近いようである。

このような差異は、館の設立年代によっても高低を生じている。すなわち、近年設立される館では、分野を問わず、学芸部門の必要性を認識した

上で、その要員（必ずしも学芸員ではないが）を配置するところが多くなっている。しかし、近年の博物館ブーム以前に設立された館にあっては、その要員すら明確でないところもある。

これらの問題は、公立、私立を問わず存在していたが、とくに公立の場合、設置の基準を法令に依ることが多いため基準制定を求める声があがり、昭和48年、文部省から公立博物館の設置及び運営に関する基準が示された。この基準によって、学芸部門の位置づけの根幹となる学芸員の配置数や施設について、一つの指標が明らかにされた、しかし、この基準を学芸部門において満足する館は非常に少なく、現在のところ到達目標にしかなっていないことは残念である。

学芸部門の活動とその条件

学芸部門は組織として独立していなくても、館には存在し、その活動が展開されている。学芸部門の活動（以下学芸活動という）は、館の活動の主体をなすものであり、博物館法によれば、歴史……自然科学等に関する資料を収集し、保管し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業の実施と、これらの資料に関する調査研究であり、また1974年のICOM総会によれば、研究、教育、レクリエーションに供するために、人類とその環境に関する有形の物証を収集し、保存し、調査し、資料としての利用に供し、また展示を行うことである。

これらの学芸活動を担うのが学芸員であるがその力量、配置数などにより、その差が生じる。学芸活動は例に挙げたように多彩であり、極めて多方面にわたっているので、そのすべてを1人の学

芸員により網羅することは不可能であり、学芸活動を高水準に保つために、必要な学芸員数を確保することは必要条件の一つである。しかし、学芸活動の本質部分は知的活動でもあるので、単に学芸員が多ければ、高い水準に達するとはいえない。高い水準の学芸活動を保障するためには力量のある学芸員の適切な配置が不可欠であるが、それと並んで重要なことは、それらの活動を維持、発展していくのに足るだけの経費と施設の確保である。

学芸活動のどれ一つをとっても経費を必要としないものはない。ところが学芸活動には望ましい基準があるわけではなく、展示替えもほとんどない常設展示だけで、どちらかといえば開館しているだけの活動から、資料の収集・調査から企画展や各種普及事業の実施まで活発に展開している活動まで種々さまざまである。これらの内情を調べてみると、その差異は、学芸員の力量や員数だけによるものではないことが判明する。学芸活動が不活発なところの大部分は、活動を展開するための最小限の経費確保も困難なのであろう。活動が低水準にあることは、館の魅力を損ね利用者減を招き、結果として予算が増加せずという悪循環に陥っている例も見受けられる。

この状態から脱け出すためには、従来からの方法を繰り返すのではなく、新しい発想、新しい方法が是非とも必要になってくる。ここに、学芸員としての力量が真に問われる場の一つが生じるのである。以上のような諸点から眺めてみると、学芸活動を展開するための条件としては、力量ある学芸員と活動を保障する経費(施設)ということになるであろうか

学芸員の実像と虚像

学芸活動を担う学芸員の力量の高さは、活動の展開にとって不可欠の要件であるが、最初から高い力量を持った学芸員が存在しているわけではない。学芸員の資格取得においては、大学の養成課

程を終了した者、試験認定の者などさまざまであるが始点は同一のはずである。ところが長い間には、力量のある学芸員とそうでない学芸員との差が現実として生じてくるのである。(なお、ここでいう学芸員としての力量は必ずしも研究者や教育者としての力量と一致するものではない。)これらの差は如何なる理由で生じたのであろうか。この辺の事情になると学芸員とそれ以外の職業人もそれほど大差はなく、生来の適性に加えて自己啓発への意欲と努力などによって差が生じてくるように思われる。

学芸員は、最近の博物館ブームによって脚光をあびてきた職業の一つとして取り上げられることもあり、養成課程の受講者も多くなっているが、求められているのは、これから力量の高い学芸員になることが確実に期待できる者であり、単なる員数としての学芸員ではないはずである。

学芸員に求められる力量とは如何なるものであろうか。これについては諸説があり明確な定義は困難であるが、学芸という言葉が学術技芸から発しているといわれるように、ある分野について研鑽を積み、高い学識と技能を持つことは必須条件の一であろう、しかし、これらの点だけでは、いわゆる専門家一般と何ら変わるところがない。学芸員という職業はこれら専門家とは異なる点があるのではなかろうか。その一つにいろいろな条件への高い適応力を挙げることができるであろう。調査に表われているごとく、大多数の館では1～2名の極めて少数の学芸員で活動を維持、展開させている現状からみて、一時的に専門家性(専門性と同一ではない。)を犠牲にしても、学芸活動に献身していることがうかがわれる。

近年、学芸員志願者が急増しているが、学芸員の現状と課題を認識した上のことであろうか。現実には厳しい条件に置かれる学芸員に甘い幻想を抱いていることは無いのであろうか。博物館実習の折には、学芸員職務の一端に触れることはある

が、何分、短期間のことであり、学芸活動以外の諸問題に触れることは少ない。

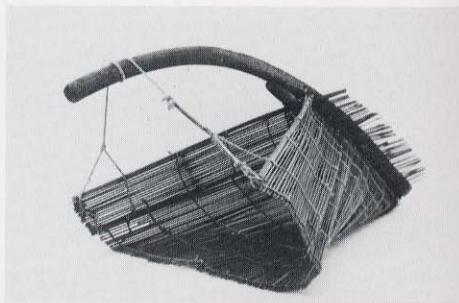
これからの学芸部門

学芸部門の位置づけが高く、学芸員、予算も比較的手厚くされている館は別として、人も金も少なく思うように学芸活動が展開できないでいるところは、どのようにして活路を見出せば良いであろうか。この困難な問題に答える前に、まず館内における学芸部門への評価は如何であるかを知ることが必要であろう。いわば身内が評価しないものを他人すなわち観覧者が評価する例は少ないからである。

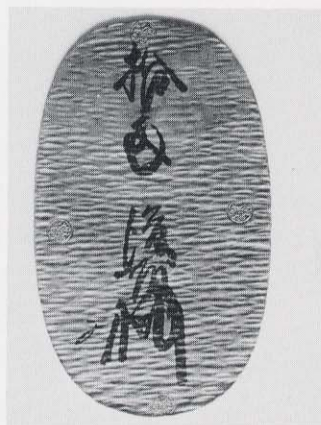
かつて、高名な学芸員から聞いた話であるが、学芸員は館内でも評価されてこそ学芸活動を保障する諸条件獲得に影響を及ぼすことができると、この言葉からも察せられるように、学芸部門は館内に対して、その活動の意義などについて啓蒙を怠ってはならないのである。

最初に述べたように、学芸部門は管理部門と並んで博物館を動かす両輪の一つであることを、館内外にあらゆる機会をとらえて十分に PR すること、その裏付けとなる実績づくりに一層の努力を払うことによって、現在の悪条件をはね返すことも不可能ではないと期待するものである。

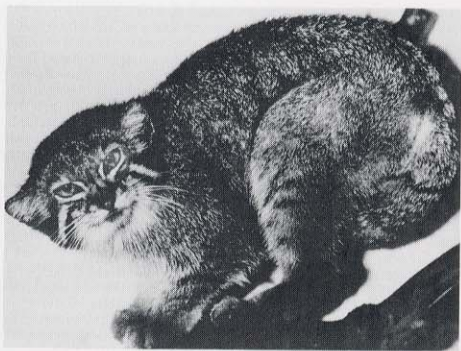
(市立名古屋科学館学術係長 三輪 克)



(漁撈用具 セセリ 奥三河郷土館)



(天正長大判 東海銀行貨幣資料館)



(マヌルネコ 名古屋市東山動植物園)

歴民部門研究会の現状と課題

1 郷土資料館及び歴史民俗資料館の現状

愛知県博物館協会（以下「愛博協」）の加盟館は、現在59館であるが、その中で、郷土資料館あるいは歴史民俗資料館に類する施設（以下「歴民」と省略）は16館あり、全体の $\frac{1}{4}$ 以上を占めている。この他、未加盟の館が20館以上ある。また、現在計画中のところも多く、将来的には、県下のすべての市町村に、類似施設が設置されようとしている。このように、博物館の中で、「歴民」の占める割合は非常に大きく、今後の博物館活動における「歴民」の役割は、きわめて重大である。しかし、現在の「歴民」は必ずしもこうした期待に応えているとはいえないのが実状である。たとえば、機能を充分発揮していない館、あるいは、地域の要請に応え得る活動の場を提供できない館が少なくないのである。

「歴民」の最大の特徴は、すべて市町村立であり、市町村地域における総合博物館として位置づけられているところにある。つまり、館の規模とは関係なく地域の歴史資料、民俗資料、自然資料、産業資料、芸術資料などのあらゆる分野の資料を保存、展示する機能を持ち、地域の文化財の調査、研究を進め、文化の高揚に資するという、一大文化センターとして期待されているのである。勿論、「歴民」に対するこうした過度な期待も、当初からの明確な構想のもとに行われているわけではなく、むしろ、設立趣旨の曖昧さや無理解による絵花主義の結果によるものであることが多い。市町村地域に唯一の存在である、博物館としての「歴民」が、そうした性格をもたされるのは当然といえるが、それにふさわしい処遇を得ていないことも確かである。最近、新しく建設された「歴民」

にしても、せいぜいのところ5～600m²の建物で、職員も、2～3人といったところである。なかには専任の職員の配置されていない館さえある。「歴民」の建設にあたっては、極めて美辞麗句を散りばめた趣旨が説明されているにもかかわらず、実際はこの程度なのである。いったい、わずか数百m²の建物と1人か2人の職員で、小なりとはいえ、一地域の過去、現在、未来にわたる歴史と文化を、どうしたら網羅できるというのであろうか。この過度の期待は、結局のところは「何も期待されていない」ということで、「歴民」は市町村における、文化的な記念碑、あるいは近隣市町村に負けないだけの、いわば団地における、弾かれないピアノ同様、次第に「お荷物」となってしまうのである。そして、多くの「歴民」は、開館時の展示が、いつまでたっても同じで、次第に埃を被り、薄汚れ、見る者も居なくなってしまう、収蔵庫の存在となってしまうのである。

しかし、当然、そうしたものとは違い、本来の「歴民」を取りもどそうとする動きも活発となってきた。愛知県においては、地域の特色を生かした、専門館の性格を強くうちだした「歴民」も少なくない。そうした館では、地域の特性、伝統を新しい世代に伝えるため、さまざまな努力がなされている。こうした「歴民」の活動が、今後の「歴民」、さらには博物館全体の活動に、大きな影響を与えるであろうことは、容易に想像される場所である。しかし、こうした新しい活動も、まだ、館員の個人の努力によるところが大きく、館全体あるいは館の枠を越えたより広範な力となっていないことも事実である。

2 「歴民」の問題点

「歴民」の共通した最大の悩みは、スタッフの不足ということにつきるのではなからうか。前にも述べたように、専任の職員が2～3人という館が大半で、1人というところも少なくない。また、学芸員などの専門職を置いている館も多くない。

しかも、「歴民」の職員は、館の本来の仕事ばかりではなく、埋蔵文化財の発掘調査や社会教育活動などに対応させられることが多い。これで、収蔵品の整理、保存や常設展の展示替え、更には企画展を催すというのは、かなり困難なことといわざるを得ない。そして、役所の機構上、専任職員といえども、一つの部署に他ならず、確実に配置転換が行われる。「歴民」の活動が、個人の努力によるところが多い以上、人事異動によって、活動が停滞することは多いのである。特に、学芸員などの専門職でない場合には、役所の機構としてはマイナーである「歴民」の仕事は、熱心にするほどのものではないのである。むしろ、あまり力を入れない方が、上司の受けはいいともいえる。「歴民」の仕事は、知識にせよ資料の扱いにせよ、かなりの専門性を必要とされるため、職員の異動は決定的な要素となり得る。これも、スタッフが不足しているからに他ならない。

もう1つの問題点は、「歴民」の文化施設としての性格である。「歴民」は、地域における総合博物館として位置づけられているにもかかわらず、それだけの施設を有していない。古くは、校舎や役場の建物が再利用されたもので、現在でも、公民館や図書館などと併設されることが多い。これは、単に施設が隣接しているばかりではなく、職員が兼務の場合もある。そして、どちらかといえば、「歴民」は副次的なのである。つまり、「歴民」は、独立した博物館であるというよりは、公民館や図書館の付随品として存在しているのである。これは、文化に対する我国の普遍的な考え方を象徴するもので、公民館や図書館のように、実効のある施設を上位に置いているのは全国的な傾向である。「歴民」が、果して文化施設として認知されているのかという疑問さえ湧いてくるのである。

3 「歴民」の将来像

前述のように、さまざまな制約を受けた「歴民」が本来あるべき博物館として機能するためには、

どのような方向性をもつべきであろうか。

「歴民」が、地域の博物館として、資料センターの役割を果たしていくことは必要なことではあるが、それ以上に重要なことは、知的創造の場として存在することである。つまり、一つの地域の歴史、あるいは地域に住む人々の生活を通して、新しい文化を創造するための核となり、その場を提供することである。そのためには、「歴民」は、地域の人々の受け継ぐべき伝統を伝えるとともに、新しい伝統を生み出すところでなければならない。

「歴民」が地域の博物館として、より広範囲な資料の保存を行うことは当然であるが、それには限界がある。現実には、重複資料や館の性格と合わない資料など、収容能力を越える資料が集まり、十分な整理も行われていないことが多い。これは、積極的な活動を行っている館ほど顕著である。しかし、重要なことは、資料を通しての人々との結びつきである。市町村では社会教育や公民館活動として、さまざまな教養講座や文化講座がもたれているが、直接資料を所蔵している「歴民」の、そうした活動は少ない。「歴民」の有する、資料や情報を、より正確により多くの人に々に伝えていくことが、「歴民」の最も基本的な活動である。こうした動きは、愛知県でも、いくつかの「歴民」でみられるようになってきている。特に、地域に即した専門的な「歴民」にはその傾向が強い。一つの方向性として、今後に進めていくべき活動と



(歴民部門研究会)

おもわれる。

4 愛博協「歴民」研究会

これまで述べてきたような、「歴民」にみられる多くの問題を、少しでも解決するため、愛博協では、昭和58年3月に、「歴民」研究会を発足させた。現在までに、3回の研究会を開いたが、その成果はまだ表面にはあらわれてきていない。しかし、館によっては、交流の枠を広げようとする動きが広がってきている。そして、単なる職員の交流から、館相互の交流に進み、将来的には、県内の「歴民」によるネットワーク化をめざしている。「歴民」が地域を立脚点としている以上、より広範な事業を行う場合に、他地域の「歴民」との連繋は欠くことができないものであるし、歴史や民俗は、現在の行政区画に納まるはずもないことなのである。また、他館との密接な協力によって、スタッフと予算の不足を補った、企画展の開催も可能である。勿論、こうしたことは簡単には実現できないであろう。市町村それぞれの文化行政さらには県の文化行政をも変えていく必要がある。しかし、最近の新しい「歴民」の動きや、そこでそれぞれ努力している館員達は、同じような方向を求めているのである。近い将来、すべての市町村に「歴民」が建設され、同じ方向で結集したとすれば、これは、充分に県の行政をも変え得る力となる。少なくとも、そうした展望のもとに、愛博協「歴民」研究会は発足したのである。非常に困難なことではあるが、かなり恣意的に使用されている“地方の文化”を、「歴民」によって確立していくことは、決して不可能ではないと思うのである。

(愛知県陶磁資料館学芸員 浅田員由)

美術部門研究会の現状と課題

この標題によって、われわれ「私立・中小規模・日本美術系」博物館の交流研究会について報告するようもとめられて以来、わたくしは、困惑の只中に居坐りつづけている、というのが本音である。というのも、その発起の趣旨をひとまず措けば、「美術部門」と唄えるような内容についての研究会などまだ開いたことはないのであるし、また、そもそも「日本美術系博物館交流研究会」設立の主要目的からして、「美術部門」というほどの括がりをすら、めざしてはいない、というのが実状だからである。

標題で、「美術部門研究会」と略称されている研究会は、「博物館によせられる多大な期待に応えるためにまず解決しなければならない諸問題を、情報交換・資料の有効な利用など同種館間間の交流によって、より効果的に解決す」べく、「私立・中小規模・日本美術系」の3博物館がはじめたもので、われわれのあいだでは、「三館交流研究会」というほうが、とおりのよいよびかたとなっているものである。

ここで「三館」というのは、昭和美術館、桑山美術館、岩田洗心館のことであり、これらの三館は、——「中小規模」という概念規定の曖昧さをひとまず措けば——、ともに財団法人立であり、その所蔵品は材質において日本美術といわれるもののそれに比定できる、という共通点をもっている。これら、運営主体、規模、目的の共通する博物館には、相互に緊密な連絡・交流をとることによって互いに資するところ大なるものがあるろう、と考えるのは、あながち、シロウト考えとばかりはいえないだろう。

財団法人立、ということからいえば、税法対策

上のあるいは人事上の諸問題、また、規模の点からは、職員の身分保障・館蔵品の更新・その他博物館活動全般にあらわれるさまざまな限界の克服といったこと、さらに、日本美術系ということでは、収集・保管上の諸問題、学芸員の専門的な能力の相互研鑽といったこと、など、たしかに交流することによって一定程度以上解決可能な共通課題、というものは、少なくないのであるから。

以上が、「美術部門研究会」と美称されてしまっている「三館交流研究会」について、わたくしが報告できることである。報告者には、愛博協加盟の「美術系」博物館全般に対する知識が欠如しており、愛博協の実施した過去2回にわたるアンケートの集計結果をみても、「美術系」と限定して論ずべき問題の所在については、明確とはならなかった。むしろ、個々に訪れたことのある美術系博物館とか、その職員ならびに運営担当者諸氏との座談とか、といったことからえられた観念のほう、が、よほど、確たるものを孕んでおり、しかしながら、それらは、あくまでも個性的なものとして存在しているうえに、個人的臆見として公式見解からは削除さるべき性格のものようであって、やはり、「報告」という形式にはふさわしくあるまい。

そこで、累卵の危をおかす愚とは承知之助で、いっそ、臆見に凝り固まった「三館交流事はじめ」を、陳述してみたい。

美術館というのは、さまざまな分野にわたる博物館のなかでも、かなり古くより成立しているもの、とおもわれるが、学芸活動の面からいえば、いくつかのジレンマを孕んでいて、それなりに困難な分野である。

第一に、保管と展示、のあいだのジレンマ。これは、どの分野の博物館においても同断であろうが、しかし、展示・保管すべき資料の特個性（代替不可能物ということ）が、美術品などにあっては、きわだって強く感じられるだけに、このジレ

ンマは問題である。というのも、年間展示日数の上限をまもること、それを保障すべき館蔵品点数の確保ということ、の重要性が、美術系博物館にあっては、とりわけ強く感じられ、そこから、年間開館日数の限界、一度に展示しうる点数の限界、といったことが、館蔵品点数のほうから下向法的に導出されてきてしまうからである。

第二に、展示における解説と美の展示とのあいだのジレンマ。「美」というものは、「美しいもの」においてあるのみであり、それは、個人の特有な深みにおいて感得されるのみ、なのである以上、美しいもの、に関するかぎり、いかなる解説も本来不要、なのであるが、他方、展示資料の来歴を知ることによって開かれる観賞の場、というものがあることも事実である。事実は本質を証明しない、かもしれないとしても、とりわけ、展示されている「日本の美術品」について、なんらかの解説をくわえることは、博物館としてはヤムヲエナイことであろう。いずれにせよ、「美しいもの」を展示するのか、「美術資料」を展示するのか、は、美術館といわれるもののジレンマであり、わたくしは、これが、美術館乃至画廊 gallery と美術博物館 museum of art との対立の理由である、と考えてきたが、ともかく、これも学芸員を悩ませる問題であり、他館園学芸員との意見交換や試行錯誤の報告会などが望まれる所以であろう。

これ以外に、博物館一般のかかえる大問題として、結局は第一の問題とおなじ事態に由来することではあろうが、展示更新とそのための博物館資料の不足ということがあり、その解決のためには、同地域・同種博物館の相互提携以外にも、資料調達のフィールドを開拓・確保してゆく必要があろう。この点については、代替可能物をもってその博物館資料としている自然史系や科学系の博物館の行きかたが、よい参考となる。それらは、地域全体あるいは日進月歩の科学という知のフィールド、を資料調達の間としているのだから。美術系

博物館のあつかう資料が代替不可能物であるだけに、一層、フィールドが広く豊かなものであること、を必要とするであろう。そのためには、どこになにかあるか、どのような、この地域というフィールドに関するデータ・ベースの整備が必要である。たしかに、それは、学芸員個人が営々として蓄積してきた知識を基礎としてはじめて作成可能なものであって、個人資産の無償供与である、ということがいえよう。しかし、「美しいもの」をあつかう以上、問題となっているのは、知識の多寡ではない、というぐらいの気概をもっていなければ、「資質の向上」も先が見えている、といっておこう。

さて、以上の諸問題を解決する方途をさぐべき場として、「日本美術系博物館交流研究会」が設定され、昭和58年6月、その第1回が、「私立博物館運営の実態——収支バランスの適正化をめざして」という標題のもとに、現に寄附などにたよらず意欲的な博物館活動を展開している昭和美術館の服部事務長から、昭和美術館のみごとな運営努力とそのノウ・ハウとを、御報告いただいたのであった。

このとき、愛博協を通じて広く諸館園の御参加を呼びかけたことからもおわかりいただけるように、われわれ三館以外の館園の参加というものを排除する考えは毛頭なく、折々の研究テーマに対する関心を共通にする諸館園の参加を強く望んでいる、とはいうものの、三館交流研究会が、単なる意見交換以上の交流・協力ははたして可能か、という問いかけを孕んでいる、ということも、また、重要な点であろう。というのも、資産も人員も決して恵まれているとはいえない博物館では、よほど覚悟して努力してゆかないかぎり、10年もすれば、マンネリにおちいり、職員が意欲をうしなってしまう、という危険性があるからで、一旦職員が意欲をうしなしまえば、博物館自体がただちに休眠状態にはいつてしまう、というのが

予想されうる事態だからである。三館交流研究会は、そのような事態をさけるために、相互交流によって活性化をはかるとともに、最終的には、館蔵品の借入れ貸出しや、合同展の企画立案など、までの可能性をさぐろう、としているのであるが、私立日本美術系博物館には、このような最終目標への到達を困難にする特殊事情がある、といってよいであろう。というのも、一般的にいつて、材質的には毀損されやすい館蔵品一点一点がきわめて個性的で、市場価格的にも高価なものがおおく、さらに、寄附設立者乃至その末裔の方々の意向とか法人によせる愛着とでもいったもの、が強く作用して合同展などに対する阻害要因となる——もっとも、私立博物館の存立には、この愛着が非常に有益なものであることは、論を俟つまいが——、と予想されるからである。

それゆえ、この最終目標に到達するためには、館相互の信頼関係——つまるところは、人間の信頼関係、というようなことになるだろう——を、形成してゆく必要があり、この交流研究会はそのためのごくささやかな第一歩、というように、わたくしは理解している。

かくのごとき、ごく「プライベート」な試みを公的なものと詐称して、内部的にも統一された見解であるかのごとく、公に報告することには、やはり、かなりの困惑がともなうわけであるが、将来的な展望ということからいえば、「私立・中小規模」の博物館にとって、同地域における同種博物館の相互提携、という課題は、博物館活動の活気ある持続、ということを念頭におくかぎり、さけてとおることのできないものであろう、というのが、われわれの考えである。

しかし、このような最終的協力体制を云々するまえに、検討しておいてもいいんじゃないの、という研究テーマは、山のごとく多々あるものとおもう。各館個々にいますぐにでも実施できる学芸活動への貴重な示唆とか、保存のためのちょっと

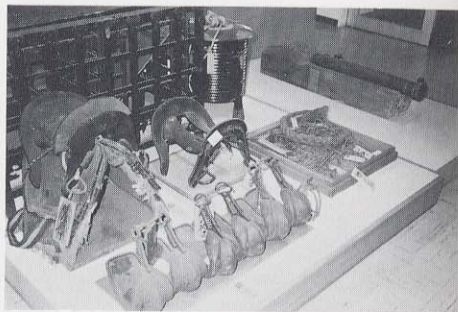
した工夫・努力とか、運営上・決算処理上の名案とか、館蔵品の共通分類方式の策定、データ・ベースの作成、といったようなことである。

われわれ3館の職員は、少なくとも精神的には「発展途上人」であって、これまでの経験によって修得できた知識を、自分の所有物、と考えるほどには成長していない、ようであり、これは、ヒョットしたら、「三館交流研究会」の最大の美質なのかもしれない、とおもわれる。それゆえ、「学芸員資質の相互研鑽」ということに関するかぎり、われわれの未来は明かるいのだ、と断言してしまう。

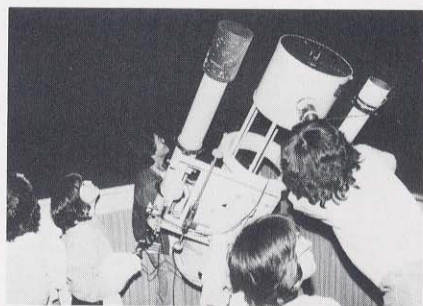
以上、たとえ、弱小中の弱小博物館である当館にとって都合のよいことばかりの御託といわれようとも、利用者側の要求の多様化、に博物館がついてゆきかねている、ようにおもわれる現在、中小博物館における博物館・学芸員帝国主義は、脱皮のための阻害要因でしかない、というのが、わたくしの考えである。

勿論、このような交流・提携には、きわめて慎重に仕上げておくべき準備段階、というものがあはるはずであり、交流研究会の参加条件は、いきおい、狭隘なものとならざるをえないだろう。しかし、そこには、愛博協が協力できる場、というものもありえようし、また、諸館園がそれぞれに心を砕いていただきたい試み、でもあると考えている。

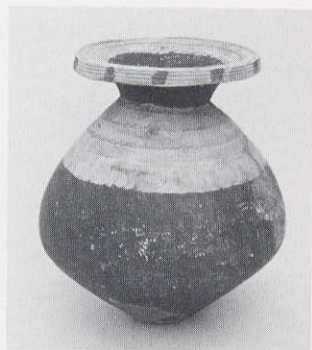
(岩田洗心館館長 岩田正人)



(土豪鈴木家伝来武具馬具 蟹江町歴史民俗資料館)



(25cm 反射望遠鏡 奥三河御園高原自然学習村)



(壺形土器 清洲貝殻山貝塚資料館)

管理部門の諸問題

1. 博物館の管理部門

狭義の管理部門とは、学芸部門、学術部門に対してそれ以外の部門をいう。博物館の表の顔とも言える、直接入館者との接点になる、展示、教育、普及と、それらをささえる調査、研究、資料収集及び保存に、直接にはたずさわらない部門が管理部門である。具体的に言えば、総務・庶務部門や、入館料の徴収、入館者の案内整理、図録の販売等を行う業務部門、施設の維持管理や営繕関係、また入館者サービスの為の食堂やミュージアム・ショップがある。表の顔である展示、教育普及の効果がより上るよう、円滑に行くよう裏方として学芸部門をささえている部門が管理部門である。

管理部門を、博物館経営を含めて広義にとらえた場合は、博物館の経営、運営、維持管理とまとめることができよう。愛知県博物館協会（以下、愛博協と略称する。）には昭和58年度現在、59館が加盟している。館種別に見ると、全国的な分類と同じく、美術館、歴史資料館、科学館、動物園、植物園、水族館等々、全ての部門にわたっている。他県にくらべてきわだっていることは、博物館明治村、リトルワールドと大きな野外博物館のあることであろう。最近の傾向としては、歴史民俗資料館の新設が目立っている。館園により、同じ博物館であっても、それぞれ内容の異った点が多く、狭義にとらえた場合の具体例については、それぞれ特殊性があり、共通の問題としてまとめることはむづかしい。しかし、広義に解した、経営、運営、維持管理については、設置者別にかなりきわだって異ってはいるが、学芸部門にくらべて、共通の問題点がしばり易い。

管理部門を別の表現でまとめると、「施設」と「もの」と「人」の問題と言えよう。施設とは、建物

設備である。ものとは、博物館資料を主体とするものであり、人とは博物館の職員に関する諸問題である。

本稿では、設置者別に、施設、もの、人の問題を、愛博協としての共通の話題にしばって、迫ってみたい。

2. 設置者別に見た諸問題

加盟59館を設置者別に見ると、県立 3館、市立 22館、町立 10館、財団法人 10館、宗教法人 3館、会社 7館、個人 4館になっている。公立と私立に分けると、35館と24館になっている。

公立と私立については、職員の身分保障の問題をはじめ、いろいろな面で大きな相違がある。公立でも、県立と町立では規模の上からも大きな差があり、また私立でも、法人経営の大規模館と個人経営の博物館では、かなり問題点が異っている。

(1) 公立博物館の諸問題

愛知県内には、国立博物館はまだ設置されていない。県立博物館は3館あり、その規模は大きい。市立は22館で、町立が10館である。市立のうちでも名古屋市博物館、市立名古屋科学館をはじめ大都市の施設は、規模の大きいものが多い。

公立というだけで、大小さまざまな各館をひとまとめにして論じることが難しいが、私立に対して特徴的な共通事項を指摘することは可能である。

公立、私立を問わず、年間計画をたて、予算を組み、それにもとづいて実施することは当然であるが、公立の場合は特に、予算に制約される度合いが大きく、極端に言えば1円の差異も無く予算を執行することが求められるのである。収入と支出は別になっているので、予定より収入が少なくなくても、また支出とのバランスがとれていなく

でも、予算通りの支払いが行われ、必ずしも独立採算は考えられていない。

予算は単年度で組まれ、決算されているが、資料の永久保存をはかっている博物館のこと、5年、10年の単位でものごとを考えなければならない事項も少なくない。また、3月から4月までと2年度にわたった催事は、原則としては実施できない。1年前に予算をたてるため、計画立案から実施までの期間が長く、物価の変動も含めて、実施に当って予測がずれることも起り易い。また原則として予算費目の流用はきかない等、融通性に欠けている。

入館料無料の館も少なくない。支出は全て税金でまかなわれている訳である。独立採算ではないが、長い目で見れば、少くとも支出に見合うだけの高い内容の教育サービスを提供できる博物館活動が要求されているのである。しかし立て前が独立採算になっていないためか博物館職員に、経費が税金でまかなわれていることの意識が薄い人も少なくない。一部の人ではあるが、入館者が増えるのと仕事量が多くなり研究時間が少なくなって困るなど、本末転倒の発言をした人がいたが、原価意識、社会教育職員としての意識が欠けていることによるものであろう。

入館者、利用者が増えるような魅力ある、内容豊かな博物館を目ざす努力は、いずれの博物館職員にも必要であるが、入館料無料の職員ほど、特に意識して努力することが必要かと思う。安いかから悪くてもしょうがないでは、魅力が無く、発展はのぞめない。地域に密着し、地域の人々から大いに利用され、親しみをもたれ活用される博物館づくりが、市町村立博物館の使命である。

職員の身分については、県市町それぞれの公務員として保障されているところが多く、退職金や年金、保険の制度が備わっている。しかし、人事移動には問題が多い。特に専門性が強く要求される学芸部門に従事する職員についても、数年周期

でまったく他の部署へ配置転換させられてしまう場合が少なくない。学芸職員を専門職とすべきかどうかなど、博物館員の中でよく話題にされるが、当事者の役所内での昇進、待遇等のことを考えると一般論で割切れる問題ではない。愛知県や名古屋市のように類似の施設の比較的多いところは、比較的専門性を考慮しながらの配置転換も可能であるが、1市に1館しかなく類似職務の職員がいないところでは、専門性を生かした人事移動は困難になり、時として施設の活力を低下させることもおきる。

公立博物館は役所内では、教育委員会により所管されるところが多く、専門職員の配置も教員をもってあてることが多い。しかし学校教育機関と社会教育機関の博物館とでは「教育」の理念と方法に相当隔りがある。したがって校長の定年退職者を博物館長とするような人事では、博物館の十分な発展は望めないであろう。

最近では、博物館業務の全部を直営としないで、食堂や売店をはじめ、外部へ委託するケースが増えている。待遇の問題、収支の問題など、役所の融通性の利き難いところを補なうことから考え出されたことであろうが、今後もその傾向は増えて行くであろう。

(2) 私立博物館の諸問題

22館のうち、財団法人が10館あり1番多い。会社法が7館、宗教法人が1館、個人経営が4館となっている。

大規模な法人経営と、個人経営の館とをひとまとめに論じ、共通の問題点を考えることは難しい。個人の博物館では、館長の個性が十分に発揮でき、また誰れの了解を得る必要も無く、迅速に企画を実行に移すことが可能であるため、順調に運営されていれば、館長の個性がにじみ出て、特色のある展示資料を持つ魅力のある博物館になり、活発な博物館活動が行われているところも多い。難点は、職員が少なく、人手不足による活動の停滞や、

資金面からの制約が多いことである。

財団法人等のいわゆる大規模館の場合、入場収入が多い場合は、比較的理想的に近い運営、博物館活動が行われ、公立のように予算制度も厳しくないで、重点主義的な金の使い方、融通性もあり、所謂小廻りが利く。その反面、入館収入の減少が直ちに活動の停滞を招いたり、経営者の適不適により、博物館活動が良くも悪くもなりやや安定にかけることもある。

職員の人事については、公立の場合のような定期的な人事移動は少なく、終身同じ仕事に従事する場合も多い。保険や生活保障の面では、個人経営の場合など、博物館以外の所で得られるよう考えなくてはならない場合が多い。

PRについては、公立の場合、自治体の公報に行事を掲載できる便もあるが、私立の場合、ポスター等にたよることが多いが、これらのポスター掲出料も高く、実際には、頻繁にはできない館が多い。

今ひとつの問題は税金であろう。社会教育の実を上げるべく努力している博物館の性質上、収入が支出を上まわることがはまず考えられない。しかし、寄附行為に対しても税金がかけられるのは問題である。米国のように、博物館への寄附に対しては免税扱いにするなどの優遇処置がのぞまれる。高額な税金分を用意した上で、寄附を考える人はまれである。

3. 愛知県博物館協会の役割

アンケート調査によれば、人件費は各館共比較的大きな部分を占めている。人件費0円の場合は、市の職員であったり、会社の社員であったりして博物館の費用としては計上されていないだけである。

管理費、事務費だけで、調査研究費0円の館が数館あるのは問題である。開館までは多額の建設費をつぎこんだが、その後は展示を維持管理しているだけと想像される。このような館で働く職員

は、実質上博物館活動を発展させることはできない。大きな展示替えは所管部署等で行うため、館の費用として計上されていないという場合には、必ずしも停滞と評価するのは一面的過ぎるかもしれない。しかしこの場合でも、館職員による独自の調査研究の蓄積は残らない。

大規模館、小規模館とよく言われるが、敷地や建物の広さでくらべるのではなく、調査研究費に表われているように、博物館としての研究や調査がどれだけ行われ、充実しているかによって論じられるべきではなかろうか。愛博協として、加盟各館のことを考える場合、大規模館と小規模館、公立と私立等の配慮も必要であろうが、余りこだわらず、全体的に見て必要なこと、有益なことから協会活動を手がけていける事項も少くない。

愛博協として、総合的ポスターを作ったり、愛知県の博物館全体のPRと、加盟各館の紹介に、もっと努めなければならない。

また、博物館学の基礎的な研修の機会をつくることも大切である。学芸職員だけでなく、管理部門にたずさわるいわゆる事務職員を対象とした研修会の実施がのぞまれる。事務職員にも役立つ学芸関係の研修会の実施が必要である。学芸部門と管理部門の職員が車の両輪となって、自館を発展充実させていかねば、円滑、正常な活動は望めない。

(博物館明治村学芸員 海老沢立志)

III. 愛博協の将来を語る

座談会 「博物館の情報交換収集について」

これは昭和58年10月28日愛知県文化会館研究室において開かれた、愛博協実行委員会メンバーによる座談会記録です。なお内容の一部については要約あるいは省略してある場合もあります。

山田 本日は「博物館の将来を探る」というテーマでお集りいただきましたが、時間的に少し無理があるようですので、博物館の情報・資料の交換を主体とした座談会にしたいと思います。

広瀬 私共の動物園博物館としては、珍しいものを集めるのも大事な仕事だが、果して新しい動物を集めて飼育出来るかという問題もある。ワシントン条約の関係で規制される霊長類の新しいものは殆んど手に入らなくなっている。だから出来るだけ現在あるものを健康的に管理し、長生きさせ繁殖させる事を基本としている。

山田 私は出席しませんでした。この前の日本博物館協会の会議で、それぞれの博物館から情報センター的なものの要求が出ていたようですけど、これについてはどうですか。

三輪 情報センター的なものの要求は出ているが、センターを作るとなると、どこがセンター役を引受けるか、ハードウェアとか経費はどうするかということで、はたはた困ってしまい結局お題目になってしまう。只、資料の交換よりまず資料についての情報を収集するセンターを早く確立する事は、以前から問題になっている。科学館といっても2種類あり、一つは科学技術の歴史資料を収集保管する所、こういう所はそれなりに資料の集積が展

示の一つの大きな価値となる。もう一つは新しい科学技術を中心に展示する所、ここでは資料がすぐに陳腐化するので更新し、次々に廃棄していく。だから廃棄される品物が分っていれば、欲しい所に譲る事も出来る。このような情報も実は充分でなく聞きづてでやっている。やはりセンターは欲しいが、このような事が出来るのは人と経費の点で大規模館になる。大規模館と言えども人が余っている訳ではないので、機械の助けを借りるという事でコンピュータ化する訳だが、そのデータ収集が大変な事になる。そのデータ収集の共通確立が必要ではないか。

広瀬 動物園水族館植物園協会というのでは、月報に各館園で余った動物等が載っている。これである動物園では何が余っているかが、かなり具体的に分る。そういう事は科学館関係ではないですか。

三輪 科学館関係は、情報交換が遅れていると思う。東京の科学技術館が不用品を地方に案内はしているが、輸送費等がかかるのであまり軌道にはのっていない。只そういう情報はだれでも欲しいとは言っている。

山田 資料の分野の一つとして陶磁を専門にあつまっている県陶磁資料館の方はどうなさっていますか。

浅田 情報交換という事は、とくにやってないが、やきものという事になると、みんなうちへ持ち込んでくる。問い合わせも1日に1件ぐらいあり、個人の人が家に古いものがあるから見に来てほしいという事もある。それらの情報と歴史民俗資料館からの依頼による館蔵品調

査等で、分ったものをカード化^{だい}して、大分貯^ほってはいるので、何処に何があるかは、わりあいつかんでいる。しかしこれを情報センター的にするのは無理がある。自分たちでは展示に使っているが、仲々一般的にはならない。

山田 各館それぞれ収集の分野が色々違うので難しいと思う。明治村さんみたいな建造物という分野ではどうですか。

海老沢 建物保存を中心としているが、うち以外でも江戸のものとか保存している所もある。そういう所と、たとえば保存方法のテクニク等を交換し合う事が段々出てくるのではないか。

岩田 昔の建物図面を保管していますか。

海老沢 今迄建てたものを中心に保存している。それに限らず有名な建築の図面保管もやらなくてはいけないとも思っている。

広瀬 最近は現地保存が増えているので建物としては集めにくなっているのではないか。

海老沢 それは集めにくなった方が本当はいい。本来は現地保存が一番よいのです。ですから町並保存なども余裕が出来たら応援したい。それと博物館というのは、どこでも同じだが自分の所に資料として入れたものは永久保存としている。展示も大事だが保存という事も大事、保存に自信がないものは収集出来ない。それと1館の保管には限度のあることも考えていかなばならない。

浅田 増えすぎたものの交換もあるのではないか。例えば九州の方で弥生時代のかめ棺なんか一杯ある。福岡から大分の資料館では一館で30から40も持っている。それも大きいものなので邪魔にもなっていて、欲しい館に譲ってもよいと言っている。私は、それを瀬戸の陶片と交換しようと思った事がある。そのように資料に対する考え方もいろいろなものが

ある。

海老沢 明治村は建物以外に明治の資料も集めている。うちの場合は、西洋技術が少しでも入っているのを対象としている。それ以外に明治村と言う事で、明治のものとして何でも寄贈依頼がある。それで農具なんかの保管依頼があるとリトルワールドに紹介したりもしている。するとリトルワールドだと外国と交換も出来る。そうなれば対等交換という事も可能性がある。

三輪 同じ資料でも取り扱う館によって事情が違っているので、分野が違ふという事だけで寄贈を断わるのでは無く、他に紹介する姿勢が大事なのではないか。

山田 考古関係は、情報とか相互の連絡が密接なのではないですか。

荒木 私の所では、あまりやっていませんが、陶磁資料館では少し情報交換をやっている。作品貸出としては、陶磁資料館・名古屋市博物館の方へはやっている。

岩田 美術館では、名品と云われるものと普通のものとの格差がある。他館の展覧会開催の折よく貸出しはするが、自分の所の展覧会開催において借入れは難しい。格が違ふ事もあるので資料貸借は出来にくい。こういう事の解決策はないものか。それと各館ではあると思うが、展覧会開催の折、損害保険・運搬等のマニュアルがまだ一般化していない。

浅田 重要文化財は、移動する時に国の移動許可がいる。届出制だから貸主が良いと言えば良いような気がするが、施設的な面で駄目な事もある。それと国立近代美術館等では3点位しか貸してくれない時もある。

山田 貸借は、必ずしも施設だけとも言えない、昔からの実績とか人と人とのつながりもある。

浅田 人と人とのつながりもあるが、實際上1年

に1回だと人も移動してしまう。現実的に無理が少しある。その辺で個人的感情ではなく、もう少しきちんとした規程があると良いのだが。

磯野 只うちの館では作品貸出が年間30件近い。点数にすれば150点余りになる。収蔵品が多い所では貸出依頼の整理には困っているのではないか。

岩田 私が一つ思うには、個々で持っている情報、例えば何処が何を収蔵しているかというようなものを博物館相互で融通出来る方法が必要ではないか。

三輪 しかしそういう情報を握っているのがベテラン学芸員ではないか。

浅田 もちろんそうだが、それを個人的なものにしておくと情報収集する人はすごく時間がかかる。

河合 小さい範囲では確かに得る事が出来るが、広くは仲々収集出来ない。うちみたいに地方の美術博物館だと地域に関する情報を集めるのが大切な仕事になる。例えば3年程前に中村正義展を開催したので、その情報データとしては日本一と自負している。来年神奈川県立近代美術館で正義展をやるが、絵を貸すだけでなくデータも出来るだけ提供している。

三輪 情報をみんな集めるには無理がある。何処の館が、どのような情報を持っているかという情報位なら集められると思う。それらを他府県の協会と交換する。その程度で進めるのが一番でないか。

浅井 愛博協で県内の何処の館がどのようなものを持っているか全体的把握が出来たらよいと思う。そしたら協会にたずねて、それから各館に問合せが出来る。

浅田 私は、このような企画で展覧会をしたいと思った時、小さな館では仲々収蔵先が分らないので、愛博協として、こういう事はこの館

に聞きなさいと云う事位のサディション資料は持っていたい。

河合 只情報交換も人の研究成果を安易に取る恐れはある。

三輪 人の努力をうまくただで使う事にもなる。研究を評価しないと。

三輪 資料交換では、動物園はよくやっているが、それ以外はあまりないみたいですね。アメリカなんか自分の所のものを市場に出す事もある。

広瀬 生きものでは等価交換という事もある。しかし価値観の相違もあるが。

浅田 外国は多いみたい。この間もスウェーデンの博物館の人が交換したい事を言ってきた。うちは県有物品で困ってしまった。ありがたいが仲々出来ない。

磯野 絵画では、外国は売却もしている。その時必要なものを買い換えると云う事でしょう。

浅井 うちでは最近貯り場になっていて非常に同じものが集まる傾向がある。農具の持ち込みが多くてくわなんか何十丁もある。

三輪 物々交換の出来る県内の体制を整える事も重要である。余っている所と欲しい所の交換情報を会誌に掲載する事も必要。

岩田 博物館バザーですね。

三輪 不用品の交換と云う事であれば、予算措置をしなくてもよく、輸送費程度で収集出来る。メリットがあるので推進する必要がある。ただ公立では、備品になったものを廃棄や交換するのは難しい面もある。いまだに解決しない問題であるが、動物園はやっているのだから出来ると思うが。

広瀬 簡単に出来るのは償却をしている事と、動物は死ぬという事がある。

浅田 公立でもやれば出来ると思うが、手続が複雑と云う事もある。

山田 情報で思うに、展覧と調査・研究を並行し

てやっていくと、学芸員だけの能力では無理がある。資料の所在情報・資料研究情報等どうしても集めなければならない。

三輪 情報そのものの収集・整理・分類して保管する学問はある。博物館の中では、あまりそれをやらないで個人の財産としている場合が多い。科学技術だと日本科学技術情報センターで、お金を払えば収録と情報検索をやってくれる。商売として成り立つから、歴史では商売にならないから個人と機関がやるしかないのだが、一地方協会がやる事には疑問になる。この狭い地域では意味がなく、広い範囲でやらないと価値がない。

山田 ただ地域的な情報を広範囲に流す事は出来る。

広瀬 結論的に言うと専門性を持った博物館が最大限集めた資料と云う情報を公的に使えるよう公開する姿勢だと思う。

荒木 皆さんに聞きますが、うちは自分の所で作った目録等は、県の文化会館・陶磁資料館・市の鶴舞図書館・国会図書館に送っている。送り先はどうですかね。

三輪 うちも同じです。協会事務局にはそれらは置いてありますか。

浅田 一応図書室は公開しており、送って来たものは県内と云う分類の所に置いてある。

海老沢 事務局に愛博協の資料室があるとよいのだが。最低限事務局には、各館の目録・資料台帳・特別展の図録があるとよい。なければ送付するよう指示するとよい。そうすると、何か企画するときの手掛りにはなる。

広瀬 動物園では、京都市の動物園が動物図書館を設置している。職員としては大変だが、そうすると好むと好まざるに関わらず資料が集まってくる。

三輪 うちの館では将来情報資料室を新設して、技術情報を含めていつでも提供出来るような

構想は持っている。西館の計画に入っていて、相談コーナー・レファレンスサービスが出来るようにしてある。

海老沢 それは市の科学館としてだから、何か愛博協の立場として出来ないか。

岩田 まず事務局に、今迄出た目録・図録・関係資料を送るよう各館に呼びかける事から始めましょう。

浅田 県内の情報・図録をうちで保存してゆくという事ですな。

岩田 まずドキュメントを確立して、各館の情報を収集するのが大事である。

海老沢 結局情報の交換・人の交流が愛博協の使命ではないか。

山田 博物館情報・資料の交換という事で色々とお話いただきましたが、資料交換に関しては、特に公立館の場合は一旦所蔵品になると手続上難しい事が多い様に思われるが、自然史系博物館に於ては多少趣きを異にしている。しかし、民俗系博物館に於ては、資料提供がある場合に、所蔵品との重複等で資料交換及び他館への資料紹介という道も残されているのではなからうか。

資料交換も含めた広い意味での博物館情報は、多様化して居り、一概に博物館情報といっても、地域的に見れば、館所在地周辺から全国的な、さらに世界的な情報があり、内容的には、所蔵資料、地域文化資料調査・研究資料と多岐にわたる。



特に内容的な情報は、博物館活動における重要な資料とまでなっており、情報の収集・整理・分類は将来学芸活動から独立した体勢を持つまでに重要視されて来る様に思われる。博物館情報学というべき学問は確立がなされるものであろうか。しかし、情報交換の内容については、かなり高度な資料的価値を有するものがあり、特に調査・研究資料等の情報提供には、個人財産的意識が高くまだopen 的状况とはいえない。

この様な中で、愛博協として可能な情報交換を探求し、拡充する必要があると思われます。

本日は皆様御多用の処御出席賜り有難うございました。

(文責 磯野英男・山田 蓉)

※ 出席者名簿

愛知県陶磁資料館	学芸員	浅田 員由
荒木集成館	館主	荒木 実
熱田神宮宝物館	学芸員	山田 蓉
(財)日本モンキーセンター	部長	広瀬 鎮
市立名古屋科学館	係長	三輪 克
知多市民俗資料館	学芸員	浅井 紀子
博物館明治村	課長	海老沢立志
豊橋市美術博物館	学芸員	河合 正樹
愛知県文化会館	主事	磯野 英男
(財)岩田洗心館	館長代行	岩田 正人

若手学芸員大いに語る

浅田 愛知県博物館協会20周年を記念して、記念誌を出すことになりました。そのためのいろいろな企画がもたれておりますが、今回の座談会「若手学芸員大いに語る」もそのうちのひとつです。フリートーキングということで、日頃思っていること、博物館に関すること、自分の研究、何でも結構ですので遠慮なく話していただいて、交流を深めていって下さい。

学生時代考えていたことと現実とのギャップ、勢い込んで入ってきて雑用ばかり、というようなことについてはどうでしょうか。

伊藤 まだ何もわかっていないのですが、とにかく一通りの仕事をみてから、それから自分なりにやってゆければと考えています。確かに、現実にはお茶出し、電話などで一日が終わってしまうことも多いです。

山田 協会からの連絡、「東西南北」「愛知の博物館」も含めて、協会に関する認識、あるいは期待などといったことについてはどうでしょうか。

水野 研修会などでは、さまざまな館が集まりますので話題がひとつになりにくいように思います。私たちがやっておりますセミナーでも



そうですが、互いの悩みをぶつけ合えるような気楽な場を協会の方でも作っていただければと思います。

杉山 うちは、研修会などで、同系統の館が少ない、あるいは全く関係がない、と思われるところですが、わずかながら展示方法などでその接点を見つけることができます。うちは小まわりがきくので、利点があれば積極的に取り入れますし、また個人的には他館の人との接触はよい刺激になりますね。

広瀬 今までの研修会で特にためになった、印象に残った、というのはありませんか。

杉山 分野が違うので、ものすごく得をした、ということはないんですけど、例えば解説の仕方などかなり参考になりました。

家田 私も小まわりがきく方ですので、研修会にはよく出席させていただいております。やはりそこでは、いろんな人と知り合うというのが一番大きいでしょうね。例えば前回がそうでしたが、視聴覚器について詳しい方とか、一つのことに打ち込んでおられる方とか、そういう方々にふれ刺激を受ける一参加するたびに何かしらそういったメリットがあると思います。

山田 協会以外の研修会で特によかった、というのはありませんか。

佐伯 今年3月にありました全科協の透視図研修会はよかったですね。今まで我流でやっておりましたが、これは基本的なところから研修できましたし、展示のかざりつけ、ジオラマ展示など非常に参考になるものでした。

広瀬 それで何とか書けるようになるのですか。

佐伯 ええ、まあ何とか。でもこれを機会にその後も勉強をしないと、ものにはなりませんでしょう。

広瀬 今後は、そういった研修会は続けられるのでしょうか。

佐伯 一回きりでしょうね。展示のレイアウトとは、平面的ではなく、立体的になされる必要があると思いますし、またその際には、美術的なセンスを生かしたいものです。今後は、こういった方面の勉強をしてみたいですね。

浅田 ところで、研修会などの通知というのは、きちんと皆さんの手元に届いているのでしょうか。

広瀬 公的な機関では、だいたいにおいて通知、文書類は目を通すことができますようですが、私立の方はどうなっていますか。

尼 館員数が二名ですので、研修会や展覧会のため外出するのがむづかしい現状です。ですから、「東西南北」や「愛知の博物館」は、とても大切な情報源となっています。

中野 公立でもうちの場合は、学芸員1人、他3名でやっています。これまでも、愛博協の通知などは目を通しておるんですが、研修会にはまだ一度も出たことがありません。結局、仕事のシワ寄せを考えてしまうのですね。しかも今年は人員を1名削減されまして、こうした博物館法にのらない歴民関係館というのは、年々名ばかりのものになってゆくように思えます。そういった中で、我々がどういふふう勉強しながら活動してゆくかということで、これはかなりえらいことだな、と言うわけです。私などは、愛博協に強力な行政指導のようなもの、例えば学芸員は最底2名からとか、学芸部は独立せよといったようなことをやらしてもらえばいいな、とつねづね考えているんですけどね。

広瀬 歴民は、少しずつでも（良い方へ）動いてゆく可能性はあるみたいですか。

中野 だんだん、じり貧になりつつある状況だと思いますね。

現在は、正直言って低い方へ低い方へと流れてゆく、足をひっぱられてゆく感じです。

また予算も各項目ごとにカットされるとなると、これはもう行政担当者としての知識なんです。こうした面では、財政担当者などに立ちうちできないのが現状ですから、それに対しての研修会もやっていただければと思います。

井上 私は学芸員として採用されながら、実際は10余年行政マンの仕事をやらされました。博物館に入ったのはここ数年前のことですが、以前の経験が非常に役に立っています。例えば今も出ましたが、財政担当者と互角に渡りあえるんですね。ですから、学芸員だということで専門バカにならずとにかくいろんな人と知り合い、好き嫌いを問わずいろんな仕事をやってみることだと思うんです。

広瀬 やはり苦節10年、それくらいかかりますかね。

井上 そうですね。それから少しずつですが、自分の思うように事が運ばれてゆくようになると思います。こうしたことを若い人たちは、専門がおろそかになる、みたいにいいますがこうしたことも、また必要なんです。

中野 専門ということも問題なんです。何とか自分も第一線にしがみついていたという思いが、企画展での知識の切り売りや財政面での問題、発掘やそのまとめ作業などで危うくなってきました。また学芸員としても3年目になってようやく動き方がわかってきたという時に、予算カットでやりたくてもやれないなど問題が非常に多いんです。私自身としては、まだ第一線と学芸員の中間にいてと思っているんですが。

山田 大きな館では、そこが研究機関的な性格をもっているところもあって、行政・学芸ともそれぞれが専門だけをやっていればいいのですが、小さなところでは、そういうわけにはいかないですね。

野村 公立館で予算のとり方の話が出ましたけれども、私立館としては、一種の「商売の仕方」を考えてゆかねばならないという悩みが出てくるのではないのでしょうか。例えば、よい展示をしても人が入らないなど、見込み通りにならない場合の処置、こういったところに公立館にはない私立館の悩みがあります。ですから先ほど出ましたように、行政の研修会とともに私立館としては「商売の仕方」についてのそれが、期待されると思います。

山田 公立館では、収入としての観覧料が云々というのはないのですか。

中野 ないんですね。ですからいくらいい企画をやって人をよんでも、観覧料は雑収入でしかないんです。

磯野 博物館の矛盾なんです。逆に人が入るほど仕事がえらくなります。人が入らなくてもいいんですよ、つまり。

広瀬 学芸員の努力というのが、館内外でどのように評価されてゆくのか、この辺が問題になりそうですね。学芸員の位置というのは、何かをやってゆくことで存在を主張してゆくものなのかどうか。そして、それは組織の中でゆがめられた形で認められてはいないか…。公立の場合はどうでしょう。行政的評価はされるのでしょうか。

中野 それほどではないです。

浅田 歴民に求められているのは、地域の総合文化センターのようなものなんですよ。ですから地域の人たちに知識を提供する場としてしか、今後歴民の生きる道はないのではないかと思うんです。

中野 そしてそれには2つあると思うんです。1つは国宝・重文級のものを見せること、もう1つは地域の文化財を見つけてきて再認識してもらうことです。しかし、そこで最近の美術館、博物館の発展の様子を考えますと、も

う後者の選択しかないわけで、その展示をどういうふうに構成していくかがこれからの問題になってきます。

井上 歴民の行き方について話が出ましたので、見晴台考古資料の例ですけれども、ここもこれからの行き方というのが大きな問題となっています。しかし結局は地域の人たち、タイアップしてくれる人たちをどうつかみ、活気ある博物館にしてゆくかということになってしまいますね。展示などにはお金をかけず、日常活動をどうするかということで今もやっているのが現状です。

広瀬 見晴台については、大変関心をもっております。それは学校の先生とか、考古に興味ある人たちが見晴台に集まり、それをまた受けとめてくれる人たちがそこにいる、ということなんです。

井上 地域の人たちというのは、学校の先生も含めてですが発掘にしろ何にしろ、実にさまざまな要求をつきつけてきます。そして、こちらとの一種の戦闘状態のようなやりとりの中から、今日の見晴台の活動ができあがったと思いますね。ふだんの地域の人々との対話、接触の仕方などから博物館が活発化されていたといえるでしょう。

山田 入館者から展示に対しての意見を聞くというのは、どのようになっていますか？

井上 「あなたの声」やアンケートなど行っていますが、まあいろいろありますね。しかし、施設面など、我々では気づかなかった点の指摘によって、それが少しずつでも改善されてきていることは確かです。

広瀬 展示学会というのがありますが、これは日本中の博物館を片はしから見て勉強してゆくというものです。こうした博物館を見る目というのが専門家の間で養われてきますと、そういった活動も今後出てくると思います

ね。以前は、博物館見学がいろいろなところで行われていましたし、実際、学問的なことではなく、様々なことを学んで帰ったものです。しかし、これを研修会ではなくて学習会の対象にするといった場合、どんな活動をしてゆけばよいのでしょうか……。浅田さん、先日の美術品梱包の研修会というのは大事な勉強会なんでしょうね。

浅田 ええ。小さな館では自分で借用に行かねばならないこともありますから。その時に、相手に不安感を与えない程度の梱包技術は必要です。この企画をもったのですが、意外に反応が少なく残念でした。

井上 うちでは日通やヤマト運輸を使いますが、梱包は基本的なことです。若い人には是非知っておいてもらいたいです。

山田 文化庁の行う学芸員の講習会の中でも、必ず梱包については設けられています。ものについての知識がなくては梱包はできませんから、原則としては、学芸員は梱包ができ、専門である日通などにも指示ができる、というのが基本ですね。

ところで、新人の皆さんは、どのように勉強をしておられるか聞きたいですね。私は、現場に入ってから勉強時間がないんです。学芸員というのは、どこまで深い勉強ができるのかと感ぜないでもないですね。若い皆さんは、今、何かこれだけは自分のものにしてしまおう、というのがありますか。技術的に体得しなければいけないこともあるでしょうし……。そのあたりはどうですか。

神崎 私たちにとって最低必要なことは、展示屋になりきることです。けれども、展示に追われる中で、最も刺激的なことは講演会であり、それを依頼する先生と接触がもてることですね。当館の性質上、茶の湯に関する講演会を、春秋2回行うわけですが、その後も先生方と

は面識を保てるよう努力したいと思っていますし、こうしたことが何よりの勉強となっています。

尼 私も、人とのつながりを一番大切にしたいと思っています。当館の場合は、来館者のいろいろな見方をきくことが、いい勉強となっていますし、館としての将来性を考えた場合、人が集う美術サロンとして方向性をもっていった方がよいのでは、と思っています。

浅田 個人コレクションを公開しているところでは、地域の人たちとのかかわりはどういうふうなんでしょうか。

尼 近くの婦人会などの会合に場所を提供したり、小学校の先生方へはたらきかけたり……老人会にも人気がありますね。地域と結びついて、というよりも、まずは場所を提供して知ってもらおうというところからはじめようと思っています。

神崎 当館の場合は、町内に招待券を配布しているくらいですね……。

広瀬 ヘビが嫌いでヘビ屋になってしまった杉山さん、どうですか。例えば、こういった時間があれば、といった若い時代にありがちな、先を思っの勉強時間などについて…

杉山 入園者の多い日曜などには、私自身もっと積極的にはたらきかけたいと思っています。最近少しずつボランティアの人たちができてきましたのでその人たちと一緒に活動しながら一人では気づかなかった点、勉強不足な点など補ってゆければ、と考えています。

広瀬 科学館では勉強というのはどうですか。

佐伯 私の専門は電気工学ですが、物理・化学など、科学館で扱うすべてを勉強しなくてはなりません。また、展示については、いかにして興味を持たせるかといった動機付けになるようなものを常に考えているわけですが、決

定的なものはなかなかみつからないですね。今のところ、館全体としては動機付けになるような展示、ということで方向性をもってやっています。

広瀬 そういった努力というのは記録に残ったり、館内の刊行物などに出したりしておられるんですね。

広瀬 個々の学芸活動というのは、館内外などで残っているというのは案外ないのではないかしら。

山田 愛博協の研修会、総会などの会場を提供した館というのは、そのことで何かのメリットはありましたでしょうか。

神崎 はい。それ以後の私たちの活動が、若干やりやすくなったように思います。

家田 文化振興会議がありましたが、地下資源館をみていただいてセラミックスの話が出たことは具体的な成果だったと思います。ただ、館員の意識がどうした、ということはちょっと……。

山田 中小規模の館が、こうした会合を機会に変ってきた、みたいな報告を、協会の方としては聞かれたことないですか。

岩田 うちなんかが大変小さなところですが、私が入ってすぐ翌年々に総会をひきうけました。これは、野心をもって、です。とにかく名前を知ってもらうことを考えましたし、それによって自分の仕事にもはずみがつくんですね。そういう感じというのは公立館の皆さんにはないですか。

広瀬 総会など、ひきうけられるかどうかについてはそれぞれ事情がおりでしょうが、野心は皆さんお持ちでしょう。

山田 桑山さん、常滑さん、ヘビセンターさんで、仮に研修会や総会をもつとして、何らかの効果というのは多少でも期待できるでしょうか。

杉山 かわらないと思います。

中野 現状として、今総会などをひきうけても、何の活力にもならないのでは、という見通しですね。

尼 館全体の人に、学芸員の世界を理解していただく、という意味では是非やっていただきたいと思います。

神崎 総会などに、学芸員以外の人をも同席してもらうことによって、うまく効を奏する場合もありますし、かえって全く正反対の結果を生んでしまうこともありますから、むづかしいところだと思うのですが……。

浅田 岩田さんが始めた美術館部会はどうなっていますか。

岩田 今は何もできない状態です。第1回目は昭和美術館の服部さんによる税金に関する勉強会でしたが、これはよかったと思います。

私は、何でもやってやろうという主義をもっておりまして、とにかく手を広げてゆくんですが、公立の方というのは自己規制のようなものをされているのでしょうか。

広瀬 岩田さんは、学芸員活動というものに、非常な執着をもっておられますが、その地域への働きかけには、大変興味深いものがあります。御存知かも知れませんが、犬山で尾北地域学創造センターを発起し、活動されていて、博物館も地域へとび出す時代になったか、という気がします。そのあたりはいかが

ですか。

岩田 まだまだ手探りの状態ですし、皆さんからの御意見など伺いたいと思います。ただ、うちは物がありませんので……、地域は宝の山です。それだけです。基本的には。

広瀬 学芸員の活動というのは、研究といっても展示に限らず、こうしたダイナミックなアプローチも含まれるんだということを、若手の皆さんにも知っていただきたいと思います。

中野 広瀬先生や岩田さんのように、地域に出ていって活動するというのは、確かに地域の博物館にとって有効であると思います。しかし、もうひとつ専門家としての学芸員活動もあるわけで、私はこの後者の方にひかれています。つまり、教育者としてよりも専門家として地域の人たちに認めてもらうという道もあるんじゃないか、ということなんです。

岩田 私の感じでは、社会的なニードという面から考えると、博物館は研究機関ではなく教育機関なのではないかと……。

中野 しかし、学芸員に求められるのは、より研究者に近い資質だと思います。

岩田 知識は確かに最先端のものを持っていなければいけない。でも、実践できなければだめだと思うんです。ヨーロッパなどの例からも思うんですが人と接する資質みたいなものを作ってゆかなければいけないし、それがまた、求められていますよ。

中野 広く浅く、同時に専門的に、そして教育者として、というのが、確かに求められていることですが、それは無理ですよ。

中野 若手の学芸員の野心というのは、専門にこだわることだし、知識の切り売り屋的なところに身をおとしめたくない、そういうところで迷っているんですよ。

広瀬 若手学芸員が専門に対して燃えるような思いを持ってくれるのはいいことだし、それが



また、博物館の水準を高めることにもつながります。とにかく、学芸員は猛烈に勉強しないとだめなんです。でも、それをいち早く社会教育へ還元することを要求されるから、学芸員は悩んでしまうんですね。

山田 確かに、今の若い学芸員で、研究をしたいという人は、知識の切り売りのことをやっていて将来が不安である、と悩んでいるようです。

井上 初め博物館で働きたいと思っていた時点でどのように考えていたか、また実際に入ってからかどうか、ということも問題だと思います。それによって、自分の生かし方もずいぶん違う方向に進んでゆくのではないですか。

広瀬 研究、という言葉は、実にたやすく用いられるところがあって、つき合いきれない感じがです。むしろ学芸員が、ものすごくやりたいということを博物館が保障してくれるかどうかですね。

岩田 そういうことになると、博物館の機能の問題になって、その中の人間の思いではなくなくなってしまおうと思うのですが。

広瀬 現代の多様なニーズに対して、限られた人間が一律の対応というのはできないですね。

岩田 一番対応しにくいのは予算規模だと思うんです。例えばエジプト発掘といったような一大プロジェクトと地域の文化の発掘というようなことなど。

山田 私はいくら大きなお金をかけようが、いくら大きな組織をもとうが、博物館活動というのは必ず穴が出来てくと思うんです。ですから、それを埋めてゆくような展覧会も必要でしょうし、またこうしたことから博物館の展覧会というのは、もっともっと広い意味を持っていると解釈できると思うんです。

広瀬 我々は、既成の学問ではおさまらない仕事をしています。ですから若い人にはどうかは

わかりませんが、個人的には、博物館で仕事をしている方が、より可能性が高いと思っています。ただ、博物館に残る人というのは、そうとう貧欲だとは思いますが。

井上 つまり、置かれた環境の中で自分をどう生かすかということです。やれる範囲のところをつついてみるとか、ふくらませてみるとかしないと減入ってしまうんじゃないかな。

佐伯 科学館の職員配属は希望ではなく派遣です。そして、2、3年いておもしろいと思えば残ってゆく、という感じです。また、科学館では目標がありまして、それをいかに効果的に達成するか、というのが当面の目標となるわけです。ですから、自分の研究というよりも、その目標を主眼においてやってゆくことになります。

広瀬 実際、科学館は科学館学といっていいほどのサイエンスをやっておられますね。研究も独自のものに根ざし、定着して広がってきているようです。

佐伯 これからは、各部門部門に専門家を配置して、本来の形に整備してゆきたいと考えています。

伊藤 私は博物館に興味があり、明治村が好きで入ったわけですが、勉強することが山ほどあって、とにかく一通りをこなせるようになりたいと思っています。また、学生の来館者が多いのですが、彼らにどのように正しく理解し、生に接してもらうか、というようなことが自分自身の課題になります。

広瀬 明治村の文化建築は幅広いですね。どんな視点の分野からでも入ってゆけるというか……。

伊藤 自分でもどうやっていいか、というのがまだしばれないんです。建築が基本にはなっていますが、私がやってきたのは古代ですし……。

佐伯 科学館や、他の公立館でもそうした所があ

るみたいですが、何年か経つと転部の希望はないか、という紙が回ってきます。拒否はし続けていますが、その可能性はなくはありません。私たちの場合、そういう悩みもあるんですよね。

伊奈 これまで、学芸員として採用された人たちの悩みをきいてきましたが、私たちにとってはぜいたくに聞こえる部分もありました。人事異動の時期というのは、やはり胸さわぐ頃です。

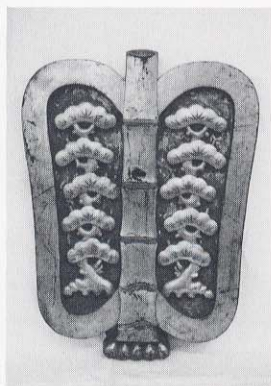
広瀬 昨年度の関東地方では、不当配転の問題もありましたね。立場上、そういうこともあるでしょうねえ。

浅田 まだまだ話が尽きないようですが、予定の時間をかなり超過していますので、今日の座談会は、ここで終らせて頂きます。いろいろな話しの中で、学芸員自身あるいはそれを取りまく環境など、随分多くの問題が明らかになってきたようにおもわれます。特に、議論のふつとうした専門性や研究と教育の問題などは、若手といわず、すべての博物館人に共通の、直面した重要な課題といえます。今日の出会いを大切に今後深く考えていくことを痛感して、しめくくりとします。どうもありがとうございました。

(おことわり)

紙面の都合上、座談会の半分ほどをカットしました。

(文責 浅田員由)



(中津藩船印 長篠城趾史跡保存館)



(陶製ヤクシャ像頭部 ヨコタ南方民族美術館)



(愛知県文化会館美術館)

IV. 愛博協の発展

愛されるものに

鈴木 睦 美

愛博協でお世話になって既に久しい。愛知県教育委員会に文化財課設置（昭和46年4月）から主事、教育主事、係長、主査と7年、この間の担当の一つが博物館でした。多くの皆様にお世話になり、また大変可愛がっていただいた思い出も数多い。もちまわり例会では広く殆どの館にお邪魔しました。愛博協行事では、東海大会、学芸員研修会、資格取得のための講習会、「愛知の博物館」の二度目の編集（現在改訂中）等々、懐かしい。編集には文化会館の浅野主事と時間もかけたし、文化財紹介も資料に入れようなど、いろいろ懐かしい。新城教育事務所次長に転出の折には、愛博協から異例の「感謝状」まで拝受し、恐縮至極——以来、6年の空白、ごぶさたをしてしまいました。東三河教育事務所3年そして県立吉良高等学校長と教育行政、学校現場にいたわけですが、このたびの異動で、まったく、図らずも、陶磁資料館副館長兼学芸部長を拝命就任しました。縁は異なものです。倍旧のご指導、ご支援を心からお願い申し上げます。

加盟館数も隔世の感。愛博協の発展はめざましいのではないと思う。当時を偲べば、リトルワールド建設計画時も懐かしい。卵が先か、鶏が先かの議論に担当者としては困惑し、板ばさみで悩んだことだった。登録博物館となっていなければ、保安林解除が出来ないし、資料運搬の特例措置が受けられない。外国側の信用が得られない。登録要件からすれば、「土地、建物があることが充たされねばならない」というのである。博物館法と、土地の法とがかみ合わないのである。また、文部省の公立博物館施設設置基準なるものが出され、

指導をうけた当時、国と地方の考え方が合わず、その解決も平行線をたどり何とも前進しない。学芸員数だけでも、経済的なこと以外に、人事問題、知事部局主管と教育委員会所管等の行政上の問題等々、難問題が多かった。学芸員試験のための講習も、この打開策の一つとして実施、一種の立ち泳ぎ方策であったともいえる。文部省担当官に依頼して、講習会をしたり、一方県民大学の一環として講習会、研究会も実施したりもした。広瀬先生、金子功先生はじめ、協会の多くの方々のご支援を仰ぎ、登録審査要項も作成したりもした。博物館相当施設申請書も、資料、要件一部不足などで、解決に至らず、戸棚に温めざるを得ないなど、今の立場になってその責任を痛感もする次第である。

研修会、講習会を離れて、胸襟を開いての懇親会の懐かしい思い出も亦多い。県外研修等をも重ね、人間的なご交誼も頂いた。博物館のおつき合いは、抹香臭い、年寄りのなものでないもの、若々しいものであること、余暇行政をのり越えた大きな社会教育の大事な柱であることも学んだ。愛され、親しまれるものにする努力こそと覚悟を新たにしているこの頃です。

（元文化財課主査・愛知県陶磁資料館副館長）

博物館への期待

服 部 鉄 治

私が愛知県教育委員会文化財課に属し、文化振興の業務に携わったのは、昭和52年4月から58年3月迄の6年間でした。仕事の中に博物館登録に関する事務があり、昭和53年から56年迄に、実に8館の申請を受け、その他に数館について種々相談を受けました。登録申請のあった館の審査に当って、愛博協加盟の各館の学芸員の方々に種々御協力を頂き、その際の御発言は、担当者にとって血となり肉となっていたのです。

昭和50年代は、戦後の20年代の文化国家日本の建設とは異った背景を持っていたとはいえ、一種の文化復興の気運が見られた時期であります。地方自治体がモニュメンタルな美術館を建設して話題になったり、市町村が競って文化会館や資料館を建てたりしました。文化行政とか、行政の文化化という言葉が流行語になりました。少し俗っぽく言えば、経済成長・福祉と続いてきて、今度は文化の番だという感じでした。施政方針演説で大平首相が文化に言及したことを、画期的なことではないかと指摘した人もおります。政治の常として、今では別の言葉がもてはやされるようになっていますが、この戦後第二の文化の波というべきものの意義を考えてみる必要はないでしょうか。

博物館の建設ブームについて、当時、タテモノ先行で中味が後回しだというジャーナリズムの批判があり、企画や展示について博物館同士の連携が言われ一部で実を結んだものもあります。東海北陸の県知事会議で、収蔵品の相互交流の具体化が論じられたこともありました。その中で、優れた学芸員の確保の必要性が三重県あたりから提言されました。つまりモノからヒトへと問題の追求が深められてゆく動きもあったということです。愛博協が、若い学芸員の資質の向上を目指して、幾つかの勉強会を企画し実施されたことは、大変

大切なことと思うのであります。自主的で自律的な勉強会が、自由な雰囲気で行われるようと念じております。

博物館の建設そのものについては、私などは、イレモノ先行批判もさることながら、このところ美術館志向が強すぎるのではないかと感じております。例えば、産業技術博物館といったものの建設が、特に工業県といわれる愛知県で誰かが考えてみてはどうでしょうか。

博物館行政は、それが社会教育施設であるという観点から文部省社会教育局の管轄するところです。他方国立博物館施設は文化庁が関係しております。行政の組織のことはともあれ、博物館を社会教育施設としてのみ見るのではなく、文化施設としても考えるべき時期が来ているのではないのでしょうか。博物館登録の相談に来られる方に、社会教育施設であること、研究施設であることともに文化施設であることを要求したものでした。

文化ということになりますと、その基盤はヒトとヒトが出会い、ヒトとヒトが語り合うことではないかと思います。美術館に展示されている美術品や工芸品は、一つづつ切離され、時系列に沿って並べられております。それはそれで良いのですが、このような美しいモノを、どんなヒトがつくったのか、どんなヒトがどのように楽しんだのか、使用したのか——つまりはモノの中に化石化しているヒトに思いを馳せ、自由にイメージを膨らませてくれる場としての美術館を考えてみたいわけです。紗という上等の絹のすけてみえる向う側の世界、それは私たちにとっての遙かなる忘れられた故郷であるかも知れません。

「文化」という言葉のよく言われる時代は往々にして、一つの時代が終りを告げながら次の時代が未だ霧に包まれている「あいだ」の混乱した時期であります。技術とともに、「哲学」が強く求められているのではないのでしょうか。

(前文化財課主査)

博物館に思う

上 阪 堅一郎

665,377人、累計3,560,268人。これは名古屋市博物館の入場者数である。上が57年度の、下は昭和52年10月開館以来の数字である。名古屋市が人口200万人突破記念事業の一つとして建設されたこの歴史博物館、当初はいろいろの面から批判もあったが、開館後6年余を経たいま、名古屋市を中心とする尾張地方の歴史、考古、民俗および美術工芸に関する資料の収集保存、調査研究ならびに展示をする歴史博物館として、独自の地位を築いたようである。

その間、中国、韓国、メキシコ等との文化交流展を開くなどして国際交流への市民の関心をより一層高めたことも特筆されてよい。このように何十万、何百万の人々を吸引した博物館も、その台所をみると、館自前の収入は予算の1割5分にも満たず、経費の大半は市からの繰り入れによって賄うというのが実情である。

公立の博物館でさえこうした状態である。愛知県には50を超える博物館や相当施設があるが公立の博物館は約3分の1である。他の施設では、施設を維持してゆくだけで精いっぱい。運営における財政的ゆとりのある施設などはまずは少ない。

事実、名古屋市内の由緒ある施設にしても財政的危機に見舞われ、財界をはじめ一般の援助を求めざるを得ない状況である。一方、博物館として本来の仕事である資料の収集保存、調査、研究、ならびに展示にしても、財政上からくる人手不足ということは、多少の差異はあるにしても、どの博物館にも共通の悩みでもある。そのような状況の中から、愛好者のため、あるいは小、中、高生のため、より多く、また広く利用されるよう並々ならぬ努力が払われている。

しかし、それらの努力にも限度があるだろう。それは単に私立の博物館だけの問題ではない。公

立の博物館にしても、私がこれまでみてきた中にも、問題をかかえるところがないとはいえないのである。これらの問題をどう解決してゆくか、それぞれの館の独自性を失わずに、共通の問題として解決してゆく方法を、博物館協会設立20年を期して、真剣にしかも卒直に考えてもらいたいと思うのである。

博物館の建設は都市の大小にかかわらず、文化行政の一つの柱として大きくとりあげられている。建設される館はそれぞれの地域の特性、あるいは永年のあいだに培われた個々の性格によって特徴づけられ、地域住民をはじめ愛好者らの関心と呼ぶ。しかし、いかに時間距離が短縮されたとはいえ、それぞれの館の展示その他をみて歩くことはなかなかむづかしい。もちろん、観光的要素の濃い地域では、季節的な見学者もけっこうあるだろう。しかし、そうした要素の少ない地域での、しかも民俗的にも価値がある資料を保存、展示する館などはごく一部の人々しか知られない場合が多いのではなからうか。

地域の人々の熱意と努力でつくられた資料館などが、あまりにも知られなさすぎることで、埋もれてゆくことも考えられないことはない。もっとも、捨て去られ、忘れ去られるものが、例えば人々にあまり知られなくてもそこに保存されるだけで目的の一部は果されたともいえないことはない。が、それだけで果していいのかどうか――。

そうした意味で、地域ブロック別にあるいは東海において、センター的性格を持った博物館を中心に、合同展示などを試みることも考えられていいのではないだろうか。例えばある期間、西三河のある館では西三河総会展示が行われる、といったように。

一利用者としての、夢のまた夢であるかも知れないが。

(名古屋市民文化委員会委員)

愛博協の思い出

内 藤 徹

今年は、殊の外寒さが厳しく、雪降りなど減多にない三河湾国定公園内の幡豆海岸もご多分に漏れず、もう何回も雪やみぞれに見舞われております。その為でしょうか、私共愛知こどもの国へのこの冬の来園者は、めっきり減って現在のところ例年の半分近くに落ち込んでいる実情です。皆様方の博物館も例外でなく、今年はこのような同じ悩みを体験なさっておられる事と推察いたします。

さて皆さん、平素は心ならずも絶えてご無沙汰いたしておりますが、月日の経つのは早いもので、こちらに来てもう5年、過ぎ去ったあとはまだ昨日の夢のような気がいたします。

顧りみれば、私は昭和51年4月に愛知県文化会館長を拝命し、同時に愛博協会長に就任したわけですが、全くの素人の私が、有資格で、しかも幾多経験豊富な先生方の中に入って、なにか身を締めつけられるような気持でしたが、兎に角私は会議には必ず出席いたしました。その際できるだけ予習の特訓を受けて出るのでありますが、前述のように相手は其の道のベテラン揃いですから、常に聞き役でした。それでも私をどうにかリードしていただき、昭和54年3月まで満3カ年間で、面倒を見ていただいた事を心から感謝している次第で、これが先づ第一の私の思い出です。

次に愛博協の円滑な運営を確保するため、新たに実行委員会を設置した事です。御園天文科学センターの金子功先生、日本モンキーセンターの廣瀬鎮先生、博物館明治村の海老沢立志先生、荒木集成館の荒木実先生、徳川美術館の木下稔先生、そして市立名古屋科学館、名古屋市博物館及び県文化会館美術館の諸先生方で運営されたのですが、何しろ真から熱心なメンバーで、退庁時間を忘れて事業計画や活動のあり方など話し合った事も再三再四、今にして想えば懐かしい限りであり

ます。

また、ガイドブック「愛知の博物館」を刊行した事、その際、著名な未加盟館の扱いをどうするか。一同腐心の揚句、最後に「その他の施設」として一括列举することにした事なども思い出される一つです。

そして三重県、岐阜県との交歓研究会を開催した事も大きな喜びの一つでした。

その他愛博協表彰規程を制定して功労賞、奨励賞を設けた事、県文化財課と文化振興会議を開催した事、また一方、名古屋市博物館、県陶磁資料館、香嵐溪ヘビセンター、ヨコタ南方民族美術館、古橋懷古館、マスプロ電工美術館、鈴木そろばん博物館及び昭和美術館の新規加盟で、38館を数えるまでに愛博協が成長した喜び等々懐かしい思い出は尽きません。

そして最後に3カ年の功績感謝状をいただいた事、また、一部有志により送別の宴を賜った事など終生忘れ得ぬ思い出であります。

さて、愛博協もすでに20周年を迎えるという。加盟館数も昭和58年で何んと58館と聞く。さらに来年度中には65館にまで発展すると承り、僅か数年の事です、隔世の感を禁じ得ません。

とりわけ、最近のいわゆる地方における文化活動の活発化と文化財保存の思想の向上、さらには諸般の環境条件の好転等が、拍車をかけて今日の博物館状況を現出していると私は思料いたします。

どうか会員の皆さん、お元気で頑張ってください。そして老後の私が、いつの日にか訪問させていただいたその節には、どうぞよろしくお願いいたします。昨年も機を得て「明治村」を訪問してその発展ぶりに驚きましたし、また、これから先、懐かしい皆様方とどこかでお会いできる日を心から楽しみにしております。

最後に、愛博協の今後ますますの発展と皆様のご健勝を心からお祈りして擱筆いたします。

(愛知こどもの国協会理事長)

地域博物館の連携

平 沢 康 男

愛博協発足当時の20年前といえば、圧倒的なキャリアを誇る、人文系・自然系等の博物館群に、理工系館がボツボツと仲間入りを始めた頃でもある。国民の経済・科学技術の浸透を背景として要望され、設立されたものであるが、プラネタリウムも含めて五里霧中の運営セオリーを見出すべく、館職員は四苦八苦であった。このような幼生期には、協会を仲介とした近隣の先輩館諸兄の御指導・交流は、どれほど支えとなったことか。例え、全然運営スタイルの異なる美術館や動植物園からでも、得るところは多大であった。

どこにも共通したことではあるが、一旦オープンした館は、「ああしたい、こうしたい…」という館職員の熱意は満されるところか、ともすると物価上昇にも追いつけない予算となるのが通例である。設立母体の経済的事情を考えれば無理からぬことではあるが。

そのような事情の館で構成された協会の活動も、よく続いたものと思う。愛博協のニュース(東西南北)も、わら半紙一枚のガリ版刷りであった。この“手作り”の精神はそれぞれの館の展示にも生かされ、例えば、すべて手作りの設備による天文施設での普及活動とか、タイプ印字の焼付けによるパネル製作、スクリーン印刷によるチラシなど、多々あるが、協会としても、加盟館の職員の奉仕による、マンガ風イラスト入りの愛知県内の博物館分布地図ポスターを作ったのは傑作だったと思う。(後年、多地区でも同様なものが作られているのをみても、型破りのユニークさ、博物館への親しみ、PRには大いに効果があったであろう)

愛知県の博物館も、ずいぶんバラエティに富むようになってきた。地図上に散布している状態をみるとよくわかる。そして隣接県のも記入してみると、河一つへだてて、すぐ近くに立派なものが

あり、交通的にも、そこを1グループと見てよいブロックもある。

このようなブロック別の博物館チェーンを例示して関係機関に紹介するのも、事業として意義あることと思う。方法としては、やはり絵地図が好ましい。交通アクセスがわかりやすいことが必要である。

一般の団体見学者を動員するには、一館のみでなく、バラエティに富んだ複数の館を見学して、一日を有効に費したいのであり、関連して公園的なリクリエーション兼、昼食などの場を求めるのが常である。複数の館は非常に相乗効果があり、長い目でみると比較的経費に恵まれない館にもPR効果が上り、ひいては収入増にもつながることと思う。特に学校団体は、ある年のコースが満足であると、翌年も“推奨コース”として定着する傾向がある。専門別コース、バラエティコースなど、種々の組合せも考えられる。

筆者は現在、今年7月にオープンが予定される「名古屋海洋博物館」の建設準備に従事している。地下鉄名古屋港終点からすぐの岸壁に、風を孕んだ帆船のような、塔をもった建物、「ポートビル」の3、4階が博物館活動の場であり、港の歴史と現状・海事・船や海の自然などを紹介する展示は、主として3階博物館に置かれ、展示専用面積は1,229m²、他に展望室(眼下の名古屋港の実景と、展示室を結びつける接点である)やロビー等にも分置されている。

名古屋市内としては、この種の博物館は初めてであるが、伊勢湾・三河湾それに静岡方面も含めて、そのエリアには国内にもすでに広く知られている、立派な人材・施設を擁する先進館がある。後発の当館は、すでにいろいろな勉強をさせていただき、御援助も得ているが、将来とも協会を核心として幅広い分野の館を含め、相互関係の発展を、紙上ををお借りしてお願いする次第である。

(名古屋海洋博物館担当)

美術館・博物館に望むこと

三 浦 小 春

30年も美術記者をしていて、随分とたくさんの展覧会や美術館をみた。ひとつひとつ憶えてはいられないが、決して忘れられない印象を与えられたものが多々あるのである。例をあげると、もはや20数年も昔、サンフランシスコから帰国しようとして、ちょうどストライキに入ってしまった船を待つために（当時まだ、日米間を往復する定期旅客船があった）三週間ほど滞在していたときのことである。或る日、市内地図の裏にのっていた美術館案内を手掛りに、小さな美術館をたづねあてた。富豪の邸宅だったもので、部屋数は上下合わせて十数室、ダンス・パーティを催したという大きなホールも二つあって、きらびやかなシャンデリアが中央と四方に垂れていた。そうした部屋部屋に適当な間隔を置いて並べられていたのは、クレーの絵ばかりであり、全部で百点近くもあったのではなかろうか、物の形はハッキリしないのに詩情だけは濃くただよう夢のようなクレーの絵、それらのかもし出す靄のような雰囲気包まれて、私は魅せられたような数時間をすごしたのであった。今はその美術館の名も場所も忘れてしまったのに、そこで心に刻み込まれたクレーのイメージは、脳裏から消えることがないのである。

もう一例をいえば、土岐市泉町上窯の元屋敷登り窯の窯あとから出土した織部陶器を収蔵する美濃陶祖古陶器保存会のコレクションだ。破片も多く入りまじって、完器の方が少ない雑多な器類だが、江戸初期の、いきいきとしていて、しかも古雅な趣きの残る美しさ、デザインの多彩さには、一見して心奪われた。その後私が江戸前期の文化について考える時必ずここで得たイメージが、代表的なサンプルとなって目の中に浮んでくるのである。

これらの美術館は小さかったけれど、一時代の

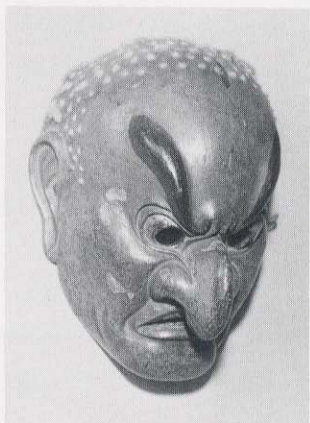
際立った性格のもの、或いは個性的な一作家の作品多数を集めてあったから、それはそれだけで十分な機能を果していたのである。中味が濃くて、ハッキリした個性の絵や物が集中して発揮するエネルギーは、会場に満ちて、いや応なしにやってくる人たちの心を捕えてしまう。

しかし、そうした集中なしに、一点とか二点とか各作家のものをバラバラに集めてあるとか、いろいろの性格や地域別のものを網羅するような展示のときは、作品や資料のもつエネルギーは、よほどの名品でもない限り、拡散していて、それぞれに対する予備知識があるのでなければ、観客はぼおーと通りすぎてしまい勝ちだ。従来ならばそうした人たちは“縁なき衆生”であって“仕方がない人たちね”ですませたのかも知れないが、このごろのように公立の美術館、博物館がふえてくると、もっと大衆にアピールする展示方法や資料の充実が必要になってくるのではなかろうか。或いは多少の予備知識をもってくる人たちの心を、もっと深みにまで引き込むような情報の準備がほしくなってくるのではなかろうか。

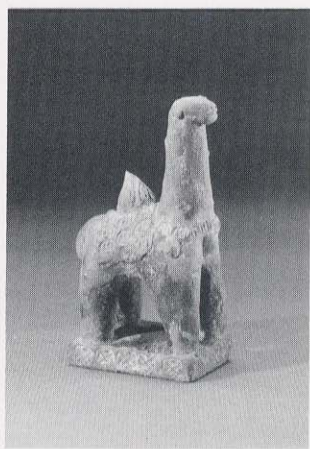
ピカソの絵が一点あるとしたら、ピカソの他の代表的な作品をそろえてビデオで見せるとか、その一点が青の時代のものであれば、青の時代の全作品をフィルムなり、スライドなりに収めて映写室で上映できるようにするといったことである。

考古資料、民俗資料なども、一個のツボがどのように焼かれ、或いは日常に、祭器に用いられたかについての考察、つまり学者や学芸員が研究していることを、解説風なビデオフィルムにする。従来も図解や写真、模型などを会場に掲げることにはなされているが、いまの世の中では、ビデオや映画での情報の方が強い伝達力をもつことはいまでもあるまい。その制作をどうするか、ということは専門家にまかせるとして、美術館や博物館で実際のモノをみて、さらに資料室でビデオや本などの資料をみて帰ってくるという図式ができ上

ってもいいんじゃないか、と思えるのである。
(光陵女子短大教授)



(重文・木造舞楽面拔頭 熱田神宮宝物館)



(麒麟〔神具〕 荒木集成館)

子供と博物館

久野三雄

私が勤務する小学校の学区に名古屋市博物館があります。一体、この建物は子供たちの目にどのように映っているのでしょうか。大きな、変わっているなど外から見えることについては、よく知っています。しかし、子供たちは、すぐ近くにある図書館のように、博物館を積極的に利用することは少ないのです。子供たちは、やはり楽しさや自分に必要感を感じなければ、足を運ぼうとしないわけです。

〈子供たちが親しめる展示品、展示方法を〉

「百聞は一見に如かず」ということわざの通り、子供たちが実際に展示品を自分の目で見るということは、大変意味のあることです。「何だろう。」「すごいな。」という疑問や驚きをきっと抱くと思います。しかし、疑問や驚きだけが積み重なってしまうと、子供たちはしだいに不満を持つようになるのです。

そこで、私はこうした子供たちの興味・関心を満足させてやるような工夫が必要であると思います。つまり、展示品ごとに子供たちが読んで“なるほど”とうなずくように絵や文などで表現した解説をつけておくことが大切ではないかと考えます。

単に展示品の名称と年代だけでは、見るだけに終わってしまいます。だから、見たからにはその意味を少しでもその場で理解したり、考えたりすることが重要ではないでしょうか。展示品ごとに立ち止まりながらじっくりと見ることが、子供たちに展示品を見る見方を養うことにつながると思います。

〈子供たちが調査活動ができる学習室を〉

子供たちは、よく図書館へ本を読みに行ったり、わからないことを調べに行ったりします。ところが、子供たちは、絵、写真、説明文などを通して

理解するのにとどまってしまいます。多くの子供たちは、本物・実物はどうなっているんだろうという疑問をきっと抱くと思います。

そこで、私が提案したいことは、子供たちが調べようとする時に、いつでも実物が見られるようなシステムーちょうど図書館で貸りたい本が見られるように一を導入してはどうだろうということです。こうすれば、子供たちは、より具体的に自分の疑問を解き明かすことができると思います。そのために説明コーナーあるいは案内コーナーがある学習室を設けるのもひとつの工夫になると思います。このコーナーへ行けば、質問に答えてもらえたり、説明を聞いたりすることができれば、子供たちの博物館への期待は一層大きくなると考えます。

〈日本や世界の文化がわかる展示を〉

博物館の命は、何と言っても展示品であると思います。見知らぬ地域の人々の生活を目の当たりに見た時、子供たちの世界は、自ら広がっていくと思います。子供たちは、家庭生活からスタートして、学校生活、地域社会の生活、………世界の人々の生活というように社会認識を深めるとともに、自分が社会の一員であることを自覚していくのです。この過程を経て、子供たちが県内や国内の人々のくらしだけでなく、外国の人々のくらしに目を向けていくことは、国際性豊かな人間になるために極めて大切なことであると思います。

この意味から、国内だけでなく世界の国々の博物館との交流を考える必要があると思います。そうすれば、わざわざ遠くへ出かける必要はなくなり、近くの博物館へ展示された時に見に行けばよいということになります。もちろん、博物館は世界の文化を展示するだけでなく、地域の文化を育てていくという重要なはたらきもあると思います。

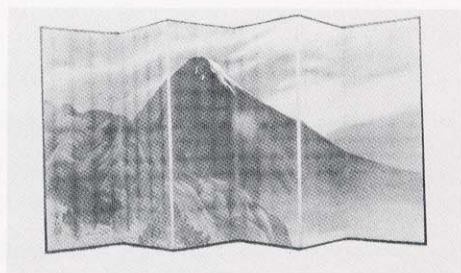
最後に、博物館が子供たちだけでなく、大人にとっても意義あるものにし、また、地域社会の文

化の拠点としてのはたらきをするよう関係者と市民・県民とが共に手をたずさえながら博物館を育てていくことが大切なことであると考えます。

(名古屋市立汐路小学校教諭)



(重文・黒糸威胴丸具足 三河武士の館家康館)



(森村宜稲画富嶽秋晴図 小牧市歴史館)

V. 博物館活動

— 事 例 研 究 —

民族資料の保存と利用

民俗資料とは、一般的に生活道具を指し、人の生活の推移を理解するために必要な資料をいう。

生活道具は時代の流れとともに変化し、生活の変化の中で不要になった物は捨てられ、新しい物にとって代わられる。

こうした時代の流れの中で変化し、忘れさられていく物を収集し保存するのが博物館や資料館の役目になってくる。

生活の中で使われていた道具で博物館や資料館に収蔵されるものは、ほんの一部のものにすぎない。ほとんどのものは使われなくなると、この世から姿を消していつてしまう。

姿を消したものの中でも貴重な資料は含まれている。しかし、こうした資料まで収集するには、収蔵する場所とそれに係わる人が少なすぎるのが現状である。

都市化されてきた地域では、資料を収集し保存することは、ますます難しくなっている。

そして、収集できる資料も同じようなものに限られてきている。こうしたなかで収集された資料の一部は展示され、その他の資料は収蔵庫に保存される。

収蔵庫に保存された資料は、特別展とか企画展などで展示される以外は大部分の資料が収蔵されたままとりやすい。

ところで生活道具の保存、収集には、一体どんな意味があることなのだろうか。その収蔵、展示には、最近、何億もかけて建物が造られ、文化財保護事業として各地域で行われている。それ程の価値はどこにあるのだろうか。はっきり言って、美術工芸的価値はほとんど無に等しいし、時代的価値についても、その評価は極めて難しい。

そこで、知多市民俗資料館の活動を通じて、この問題を考えてみたい。

私が民俗資料館に係わりを持ち出して日の浅い頃、ある日一組の親子が、古い倉庫の様な資料館へやって来た。母親は懐かしそうに子供にあれこれ説明し、子供に、子供の年代の頃の母親の生活を、追体験させようと一生懸命であった。しかし、子供は、母親の意に反してほとんど興味を示すことがなかった。

また、別の日には、近くの小学生が遊びに来て、道具をあれこれ手当たり次第にさわって歩いた。

はたご（織機）の所へ来て、かけてある経糸をハープを弾くように、パラパラと指で流して糸を切ってしまった。

並べて置くだけでは、大人はノスタルジアを感じるが、子供は大人の一方的な話だけでは、興味を示さない。道具を知った年代がいなくなったら、資料館の存在はどうなるのだろうと疑問を強く持った。

それ以来、来館する子供達が、何に興味を持つのかを注意して接触していると、民俗資料にまったく興味を示さないのではなく、道具として扱い、その働きと、使い方の説明には、目を輝やかせてくることが解った。

鉄筋のモダンな建物の中に、働き場をなくし、スポットをあび、展示台に鎮座する民俗資料。

寒い板の間にござを広げ、ぐらぐらするにぎりをコンコンとたたいて調整し、きりきりときまらせて回すことに歓声を上げる子供達を使う、道具としての綿繰。

展示台に鎮座する民俗資料は、毎日浴びるスポットで、変貌し、調整を受ける機会もなく、ある日、資料としての生命すら終わってしまう。

道具は、使えば必然的に消耗し、いわゆるガタ

がきて使えなくなると思われ、大切に保存することがよいと思われがちである。

しかし、道具は使うことにより、常に調整され、補修され、道具の機能を失わない状態が保存されていく。また、道具は使うことにより、道具そのものの存在価値を示す使用方法が、残されていく。いわゆる、テクニックそのものも保存されるのである。

その端的な例が、機織である。知多市民俗資料館では、機織教室を開き、機織技術の保存を行っている。

機（はた）は、布が織れて初めてその機能が伝えられるのであって、木製のボディーだけではどうにもならないものである。

布は緯糸を杼で通して、トントンとすれば織れていくが、緯糸が通せるようにするまでの準備が大変な作業である。これは、機という有形な道具資料と同等の無形資料として十分意味をなすものである。この作業を保存することが、単なる割り竹や、女竹の切れ端が、民俗資料として成り立つことを示し、古いガラクタである民俗資料を残す意味を示すところの生活者の知恵を理解させてくれる。

こうしたことから、民俗資料の保存は、資料を、道具として活きた状態におき、道具そのものの有形な物と、使い方、製作方法のテクニカルな面と、その原理、道理である知恵との無形なものが必要となる。

この、民俗資料館での民俗資料の動態保存は、ノスタルジアを感じない新しい世代へも有効な働きかけをする。

これは、参加できるという、館や資料への近親感の醸成と、複雑に展開する社会で生活する者が、道具を通じて単純明解な原理が生活の中に生きていることを理解して、民俗資料の保存価値を認めることになる。

一つのプログラムを紹介してみよう。

畑を耕し床を作り、秋、種をまき、冬麦踏みをする。そして春実った麦を刈取り、脱穀をする。のぎを取るのに麦たたきで叩き、唐箕にける作業を何回も繰り返し、やっと麦粒になる。しかし、まだ皮を被ったままでは食べられない。石臼を気長にひいて、小麦粉にする。ここでようやく食べ物に加工できるところまでたどり着いたのである。

さあ次は、うどん屋さん^{!!}。徐々に徐々に水を加わえ、ぐーんと粘りが出るまでこねてこねて、こねまわし、じっくりねかせてまたこねる。

それを面棒を使って平らに広げ、これを折りまげて、細く切ってやっとうどんに。ゆでて食べたうどんは、ぶつぶつでも、砂がじゃきじゃきでも、今までで一番おいしかったうどんになる。

このプログラムには、鋤からいかきまで、生産道具から生活道具まで種々雑多の道具を使う。

一年を通じての参加はできないけれど、ほんの一部分の参加であっても、子供達はききとして作業をする。

道具は使って初めて道具である。造った知恵、使う知恵と技術、これに道具があって、民俗資料の保存の意味が初めて認識されるのではないだろうか。

（知多市民俗資料館学芸員 浅井紀子）

専門博物館と友の会

—愛知県陶磁資料館の場合—

1 専門博物館の性格

愛知県陶磁資料館は、陶磁器に関する総合施設であり、その対象としては、土器・陶器・磁器などの陶磁器から、その生産道具や文献あるいは考古・民俗資料などを含めている。つまり、陶磁器に限定された専門博物館である。ただ、陶磁器は、人類が農耕を営む最初期の段階からあらわれ、以後、きわめて人類に密着して発展してきた生活用品で、その歴史は古く、範囲は非常に広い。古代における埋蔵文化財としては、陶磁器の占める割合は大きく、当時の生活の再現も、陶磁器を通して行われることが多い。そして、陶磁器は工芸品・美術品として、精神文化の面においても重要である。また、現代の生活においても、陶磁器は欠くことのできないもので、特に、最近のニューセラムックスは、最先端の科学技術ともつながっているのである。このように、陶磁器の専門博物館として、取り扱う資料がきわめて限定されているにもかかわらず、その対象とする範囲は非常に広い。ある意味においては考古・歴史・工芸・美術・民俗・産業・科学の分野を包括するものといえる。このことから、愛知県陶磁資料館は、むしろ総合博物館としての性格が強いといえるかもしれない。もっとも、専門博物館とは元来そうあるべきものに違いない。

愛知県陶磁資料館に対する利用者の期待は、かなり明確といえる。それは、専門博物館には共通のことであるが、利用者が限定されることでもある。特に、陶磁器という名称によって、利用者の平均年齢は、相当高いものとなる。先にあげた対象分野からいけば、必ずしも「年寄り趣味」の施設ではないのであるが、一般的に言って、若い人には敬遠されるところである。普通、博物館とい

えば、かなりの部分で学生を対象としており、事実、学生の利用も多いのであるが、陶磁資料館では少数である。例えば、団体に限ってみても学生の利用は非常に少なく、多いのは、老人クラブあるいは婦人会の団体である。ここに、陶磁器に関する一般の理解があるように感じられる。

また、専門博物館であることから、利用者の目的ははっきりしており、その要求するところは、かなり高度といえる。特に、一般利用者の場合は、何らかの意味において陶磁器に対する興味を抱いた人々で、自分自身の陶磁器に対する関心を満足させるために来館することが多い。その関心は、趣味的な要素の強いものであることもあれば、学問的な興味によるものであることもある。いずれにせよ、陶磁器に関してはすべてのことに応えてくれる場を求めて来ていることは確かである。

愛知県陶磁資料館が、専門博物館を標榜している以上、利用者のあらゆる期待に応ずる態勢で臨むことは必要であるが、現実にはかなりむづかしいといわざるを得ない。特に、最近の利用者の傾向としては、与えられた企画の単なる観客としてよりは、自から創造する場を求めることが多くなっており、従来の博物館のあり方では、そうした要求に応じられなくなっていることも事実である。愛知県陶磁資料館の利用者に対するアンケート調査からみると、数回以上来館している利用者がかなり多い。なかには、展示の代わる度に来館する者もあり、特定の人の利用頻度はきわめて高い。また、講演会や講座などの聴講希望者は予想以上のものがあり、上述のことを裏づけている。こうした、利用者の要求に対しては、どのような対応が考えられるのであろうか。講演会や講座の回数を増すこともその1例であるが、館の事業としては限界もあり、利用者にとっても受動的でありすぎ、自から創造する場を求めている者にとっては、きわめて不満足なものであろう。この一つの解決策として友の会が考えられるのであ

る。

2 友の会

従来、友の会は、館の主導によって運営されることが多い。館にとっては、友の会は、利用者の増加を図るものであった。そのため、観覧料の割引、見学会や講演会などの行事の施行など、恩典を与えることによって利用者を確保しようとしている。また、友の会の会員にとっても、割安に館の施設を利用できるという点に意義があった。しかし、最近では、利用者の意識の変革によって、友の会の新しい動きが出てきている。ここ10年ほどの文化施設の充実や余暇利用の多様化などによって、博物館利用者の質的向上は驚くべきものである。そうした利用者の意識は、既に文化教養講座の枠を越えて、より積極的な活動を進める方向にまで広がってきている。この傾向に、旧来の公立博物館は取り残されてしまっているのが現状である。そして、質的向上をみた利用者は、従来の博物館や友の会に飽き足らなくなっているのである。しかし、そうした多くの利用者が、自分達の知的欲求を満足させることのできる友の会を求めていることも事実である。

最近の新しい博物館では、これらの要望に応えるべくさまざまな友の会が組織されている。しかし、まだどこも試行の段階といえる。それでは、友の会はどのように考えればよいのであろうか。

友の会は、博物館と会員相互の利益になるものでなければならない。この場合、利益というのは、恩典などの物質的な利益ではなく、精神的な利益である。それは、館の設立に対する共通認識といえるものである。そのためには、会員が、その館に対して、あるいは設立趣旨に対して、より深い認識を持つ必要がある。いい換えれば、館への愛着心である。自分の館であるという意識が発原点であろうと思う。この点に関しては、地域に根ざす、歴史民俗資料館や郷土資料館などの地域博物館は、その地縁性によって有利に働くに違いない。

つまり、同郷意識や愛郷心が、自分達の館であるという意識を育て易いといえる。県単位以上の場合には、そうしたことが稀薄になるのはやむを得ないことである。しかし、逆に、そうした地域性を超越した働きかけ、特に文化の広範な共有性という点においては、より普遍的な支持を集めることが可能である。専門博物館においては、対象が限定されるだけに、こうした効果が大きいと思われる。

これらの認識の上になつて、友の会は成立するのであるが、友の会の運営においては、会員の積極的な参加が不可欠であることは言うまでもないことである。

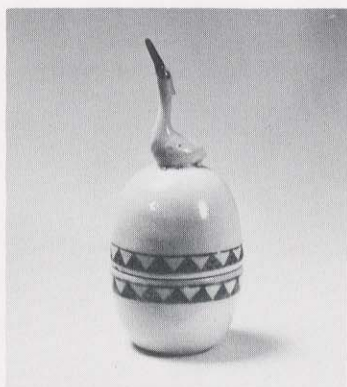
専門博物館とはいえ、会員がそこに寄せる期待は千差万別で、会員の興味もさまざまである。しかし、会員が自分達の興味ある主題について、より深く学びたいという点は共通している。この共通点に立脚して、会員相互の自己啓発を主とする各種の催しを開催することは可能である。というよりは、こうした自主的な会の連絡統合体として友の会を設けるべきものかもしれない。こうして得た知識あるいは成果を、目にみえる形で還元しようとするものがボランティア活動である。館にとっては、友の会の会員のボランティア活動によって、館独自で成し得ない事業が可能となり、会員も、その活動を通して自らの創造する場を獲得することができるのである。

3 愛知県陶磁資料館友の会

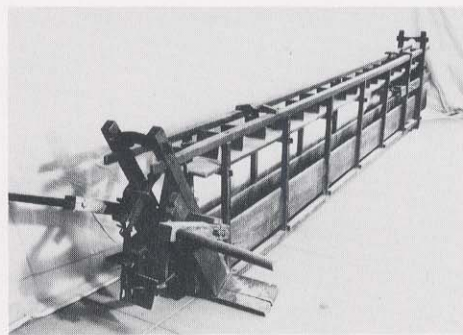
愛知県陶磁資料館では、昭和58年10月、開館5年目にして友の会を発足させた。友の会の基本的な考え方は上述のとおりであるが、実際にはさまざまな曲折を経て発足できたのである。発足時の会員数は415人、12月10日の時点で500人となっており、当初の予測をかなり上回っている。この会の設立は、館主導型で行われたため、今後の運営がきわめて重大であるが、現時点では、会員にとって好評のようである。当面は、会員相互の交流

が主で、自主的な活動も容易ではないが、いくつかの研究会、学習会を通じて、館と会員の両者に実りのある友の会となるよう努力する必要がある。しかし、会員の意見を集約してみると、こうした形での友の会に対する期待は大きく、積極的に参加しようとする会員も多い。このことは、従来の博物館活動では満足できなくなった利用者が増大してきていることを物語るものといえよう。そして、将来の博物館を考える上で、この友の会活動が、どのように展開されていくかということは、大きな意味をもってくると思われるのである。

(愛知県陶磁資料館学芸員 浅田員由)



(色絵鷺香合 仁清作 昭和美術館)



(龍骨車 半田市博物館)

個人が博物館を

つくることの意味と問題点

愛知の博物館の No.17 には荒木集成館の成立が、そして No.25 には実態と指針を投稿させて頂き、今回はその続きとしてお読み下されば幸いです。

荒木集成館で展示した人々の軌跡

昭和45年から58年の今日までに当館において展示下された愛顧者の方々について集成館パンフレット No.として何日、誰々がどのような展示会をしたと云う表向きの記録は残るが、全然記されていないその後の生き方を写し出すことによって、私に与えられた題にせまってゆくのではないかと考えついた。もっと大きく申せば愛知県、日本国そして全世界の個人博物館の縮図が荒木集成館13年間のこの小さな世界の中に次々と顔をのぞかしに行き、私に教えてくれたのではないかと推定し得たのである。

コレクションしている人々の夢

私を代表して云えることであるがコレクションが蓄積されてくると、その体系的分類などして楽しむが、これを私家の訪問客や、同じ趣味を持った人が来た時などは室内一杯に広げて見て貰う、その思いが博物館と云う姿に広がって行ったのであろう。10坪の集成館は個人コレクションを展示するのに適当な大きさであり、私の周辺にいた人々は学術的なコレクターばかりであったが、展示者の輪が広がってゆくにしながら次々と申込みが続いた。年6回の交代に決めていたから年老いた人を優先にして、若い人はグループで組んで貰うように協力をお願いした。名古屋で初めてそうした企画をしたミニ博物館が存在したのである。広瀬鎮氏のおっしゃる「博物館ギャラリー」である。展示し得た人々は老若を問わず終わりに私に残してゆかれる言葉に「将来自分もコレ

クションを飾る博物館を持ちたいものである」

郷土と密着したコレクション

一般人でも保存のきく物に措葉・鉱物や考古物は産出地が全く郷土と密着している。考古物は特に名古屋市のように市街地が発展し続けると遺跡など一塊もなく破壊されてしまい、戦前における発掘品、採集品などは貴重品になってきていた。当館で老人優先にしてきた結果は如実にあらわれて来て、もう幾人もの人が黄泉の国に旅立たれた。名市文化財委員であった故吉田富夫氏は市博の設立を夢みて、彼の先輩が死んでゆく前に説得して、死んだらコレクションを自分に渡して行くようにと約束している。そして吉田氏も市博の建設のない前に死んで行ってしまったが、それらの人々から預かっていた物と自分の収集品とを含めて、市博が建設されてから遺族が約束をはたして寄贈された。三渡俊一郎氏のご健在でおられますが、見晴台遺跡考古資料館が建設開館された時に見晴台で採集したものは全部寄贈された。その他にY氏の大切にしておられた資料をN大学が購入されたと聞き及んでいる。いずれにせよ考古遺物は再度出土するという物ではないから公立博物館が出来る場合は、郷土の物として個人の蓄積財産はねられるというのが実態である。ここで役所とか公立資料館の方々をお願いしたいことは物のみに眼を奪われて、それを収集した人間の尊さ、彼がいなければそこに物はないということを忘れ勝ちである。

資料台帳への役割

北村氏は当館で展示会を開く10日程前に急逝された。勿論葬式に参列したのですが、家族の方々は「父が急に死んで物は残ったが、さっぱりわからず展示会が開けるでしょうか」と心配されたが、もうその時にはパンフレットも出来ていたから私は「物と名前がはっきり記録されてますからご安心下さい」と答えた。即ち北村斌夫の考古遺物展になってしまったが、その展示される分に関して

は台帳が作製されていたことになる。その後市博にパンフ付で寄贈された。展示会以後死亡された人は勿論であるが、生存者でも自分が幾十年間収集したものを一度整理することになり、一つの区切りとして大切な台帳作りをしたことになる。天白に移動してから申込みも一段落を見た故に湯浅四郎氏にお願いして毎年一度ずつ収集品をテーマ別に展示会を開いて頂いてます。これは展示会が本目的ではありますが、湯浅コレクションの資料台帳を作製するのを副目的としています。収集品の量の多さでは随一であろうといわれているのですが、その整理台帳は湯浅氏の頭脳に入っているものであって、各博物館も各自の目的によって借り出しているが、他人の中までは入ってゆけない。北村氏によって知らされた事をふまえ、一つでも多く湯浅氏の台帳をと考え実行している。よって湯浅氏のパンフは解説付ライカ版写真集になり展示物はくまなく写真で掲載する。

社会教育集团とのかかわり合い

展示者には老人ばかりでなく若い人も出てくる。若い人は個人展でなくコレクションの量も少ないから幾人かのグループ展になる。このグループに深いかかわりを持ったのは東海化石趣味の会、名古屋地学会とをもって若い人の集まり東山地学会、そして名古屋考古学会であって幾度か発表をして下さった。現在名古屋市の各区に設置されつつある社会教育センターの前身の役割をはたして来たと同時に社教集団の育成に寄与した事になる。展示室しかなかった千種区の時は我家の座敷をよく利用していたが、なんとしても教室がほしいという希いが湧いてきた、幸いにも天白区に移動して今度は教室を持つ事ができた。博物館というものの活用の仕方の中に展示品を通して人と人のつながりを持ち、個人、グループ、団体と広がりがあり、大勢の人の集まりには説明会、講演会、座談会と自然発生的にコミュニティー広場が必要であった。

個人博物館を建て得た人

名東区の宮島照氏は集成館で展示会を開いてから展示館に興味を感じられたのがひとしおであったのであろう、自分も博物館を建てようと決心された。そして1年もたたない内に宮島資料館は建設・開館された。現在開発された名東区を思うと本当に尊い資料となって来ている。そして家族中の協力もあり将来孫が学芸員に成長するのを夢にたくしておられる。

今一人中川区に成田文庫を建設された成田陽氏は集成館で展示会をされた時はカタツムリ展であったが、年令と共に以前からの明治の教科書、明治的教育資料へと変心して行き、その莫大な資料を中心に成田文庫を開館されました。こうして夢の実現が出来た人、更に実現へ着々と準備を進められる人々、この小さな荒木集成館から愛知県に眼を広げて見るに45年に開館してから名市博を初めとし、どれだけ沢山の立派な博物館、資料館が開設されて来たであろうか、それは個人であろうが公立であろうが博物館というものが、東京や京都の遠い所ものでもなく、又財閥でなければ建てられないという物でないという事が県民全体にとってより身近なものであるという感覚にして行った事はたしかである。

問題点は残る

費用が少ない。たとえ立派な展示会を開いても宣伝不足で人に知られないままに終わってしまう。宣伝に錢をかけるという事はない。むしろ新聞社さんの方が気をつけて、たとえ小さくとも出して下さる。感謝している次第です。

人出不足が常時である個人博物館では資料収集の方が先に立って事務的な事は後になる。資料台帳は重要なものであるが、やっと台帳用紙が印刷できたが、どの辺の物まで記載するか迷っている。図書庫はあるが図書簿の整理など全然といってよい。

パンフレットの作製についても湯浅氏のように

小さい写真全体を掲示するのはよいが、実際には小さ過ぎる。大きな博物館などで特別展で発行される冊子は全部掲載されている。そうした物を作製したいが費用がかかり過ぎ、回収できる可能性はない。結局活字の多い中途半端な物になってしまう。

集成館収蔵品図録集を創立当初出版することが出来たが現在は仲々に振出せない。例えば愛知県中の博物館がこれを発行し得たら各館の学芸員は次の展示会のテーマが浮かんだ時にどこで何を借りるか企画しやすい。

私は幸いにも天白に移動して建物も大きくなり教室も持つ事が出来たが、誰もが個人博物館でそれだけの余裕が出てくるであろうか。

もっと人間として大きな事はコレクションを集積して立派な博物館を建設し得たとしても、これが全て自己満足に終わってしまったのでは、自己利潤を追求したのと同じであって、この博物館事業を通じて社会に貢献することが出来るか、例え少しずつでも考え出して実行して行っこそ、個人博物館の意義と将来性があるのではないでしょう。

(荒木集成館館長 荒木 実)



(村上華岳筆 観音像素描 岩田洗心館)

愛知県美術館の小さな進歩

—美術館改修工事を省みて—

これは昭和53年度に実施した改修工事のあらましです。

○改修前の状況

愛知県美術館は、昭和30年2月1日に開館し、地域における芸術文化活動の拠点として多くの県民に利用され親しまれてきた。しかし長い年月とともに施設の一部に老朽化が目だちはじめ、41年から46年まで5年間にわたり、展示室壁面の塗装、照明器具の増灯、屋上防水工事等の補修を行ってきた。しかしながら一部改修では根本的に直す事が不可能であった。その第一点として自然光と人工光の併用である展示室のため安定した照明が得られない事である。自然光は、北側からの光線だけを入れる場合、それほど問題ないが真天井から採光すると、季節、天候により日照時間の長短や入射角度の変化により明暗を生じる。すなわち明るさを人工光のようにボタン一つで自由にコントロールできない点です。そのため雨降りの折には、床面照度100ルクス以下の時もあり、観覧者から「暗くて絵が見にくい」という指摘が再三あった。第2点として、老朽化し低下した空調機能の問題である。展示各室に1、2ヶ所しか送風気口がないため、強く送風すると風が直接絵画等に当たったり、湿度調整がうまくいかず、壁面に水滴が付着する最悪状態の時もあった。第3点に、展示室の内装面。壁面、床面、天井面とすべてにわたり、傷み、色があくすみ、これが低い照度と相まって、非常に暗い展示室のイメージを作りあげた。第4点として常設展示室の問題。これは美術館の設立が、当時東京、大阪、京都に美術館があり、それぞれにおいて展覧会が開催されていた。その展覧会場がこの名古屋地区に無いため、百貨店で開催する以外は、すべて素通りした。それを避けた

めの貸ギャラリーとして設置された経緯があった。しかしその後時代の推移もあり、新たな美術館が各県において続々開館し、美術館の本来の機能が重視されて来た事。さらには所蔵品も相当の点数になり、これを常時鑑賞出来る状態にして欲しい要望が数多く出て来た事。これについては昭和50年から県内各地区3～4会場で移動展を開催するようにしたが、やはり館内での常設展示室新設を望む声は多かった。しかし各種展覧会利用希望の多い当館では、なかなか難しい問題でもあった。

○工事の条件整う

前項のような状況であったが、常に各種展覧会を開催している事により、改修に際しての長期休館が出来にくかった。それが52年10月に名古屋市博物館が開館し、その3階に大規模なギャラリーが開設されたのに伴い、長期休館できるようになった。そこで全面改修に向けてスタートしたわけである。当初、外観から内部全体にわたる大改修を計画したが、それには約6億円必要であった。いくら財政事情がよい時であってもそれは到底無理であったので、美術館の最大の顔である展示室を第一に考え、その工事費約3億円をもって昭和53年7月12日から54年1月9日の期間で工事に着手した。

○工事の概要

〈展示室の照明電気工事〉

自然光と人工光の併用をやめ、展示室はすべて人工光のみの照明にした。この自然光の問題は、いまだに結論の出ていない問題で、新設の館でも併用、人工光のみとまちまちである。壁面照明は高効率の蛍光灯を採用し、三段階の切換調光方式とし、各室ごとに設けられた調光制御盤によりそれぞれ自由に調光できるようにした。さらに局部照明用として壁面、床面に兼用できる移動式吊下型スポットライトを新設し、鑑賞者の位置、通路部分の照明用として展示照明に影響しないようソ

フトフォーカスのダウンライトを設けた。この照明方法については、文化会館電気室および同館木本文平氏の案に基づき松下電工K・Kにより展示物が見やすいようにできるだけ均一な明るさ（鉛直面照度300lx以上）で、しかも鑑賞者にまぶしさを感じさせない照明とするため、実物大模型実験を名古屋LL（照明実験室）にて行い、器具仕様を決定している。

〈展示室の内装工事〉

全室19室の壁面をすべて本麻クロスに張替えた。天井は、自然光の採光窓を閉鎖し、雨もりがしばし起きていたので、防水工事を行い、さらに天井高を6メートルから60センチ下げ5メートル40センチにした。これは天井裏に換気用のダクトスペースを取るためであったが、我々は照度アップも考えており、通常天井高は5メートルあればよいと思っていた。そして既設の吸音テックス板を撤去して岩綿吸音材（難燃性）に取替え床面のロンリウムを張替えた。

〈空調設備電気工事関係〉

室内のエアコンディションを良くするために、従来各室1、2か所であった送還気口を、送気口は4～8か所に、還気口は2～4か所に分岐増設して室内空間の風量分布の均等化をはかり、電動ダンパーを採用して温湿度の自動調整が出来るようにし、また外気導入口を新設して、新鮮空気を取入れ快適な空気環境の確保につとめた。また特殊な照明等を要する展示品の場合を考え展示室内に電源箱を設置した。

〈その他の部分〉

消防設備として、非常灯の設備、煙感知器、非常放送設備の整備、施設全体の清拭、塗替等を行った。

○工事中的問題点

改修工事は順調にそれほど問題もなく進んだが、一番注意を払ったのは、展示室の壁面の色であった。美術作品陳列の背景にふさわしい色とい

うことで、当初から淡いベージュ色を想定していたのだが、壁面長780メートル、面積2282平方メートルを一貫した色にしなければいけないので、慎重に検討をした。まず最初に1メートル四方の板で、旧来のグレー色2色とベージュ色2色あわせて4枚の見本をつくり、当館の美術館運営会議に計った所、旧来のグレーでもよいとの意見もあった。それゆえ美術作家・鑑賞者・美術愛好家等からも幅広く意見を徴し、その結果淡い白っぽいベージュ色に決まった。さらに見本展示室として一室、新しい装いの室を作り試験もした。この見本展示室にて照明を点灯した時、その明るい事に職員および関係者一同驚いて、この改修工事に自信を持った。最大の問題は、常設展示室の一室確保であったが、さいわいにも展示室利用申込者から「常設展のためならば仕方が無い」との暖かいご協力を得られる事が出来た。なおこの時、当館利用から名古屋市博物館ギャラリー利用へと移行替わった展覧会関係者には今でも感謝をしている。

○開館前後

53年7月からの工事でも年末には殆んど終わり年が明けた時には、ほぼ満足に仕上がっていた。ただ一点一階ロビー天井の取替えた岩綿吸音板が暗い感じで、新品のイメージが無かった。それを時の内藤館長が指摘し、急きょ明るい白い色に塗装をした。これは開館4～5日前の事で、業者も困った事だろうと推察するが、結果的には非常によくなった。そして54年1月10日の午前9時から1階ロビーにおいて、仲谷義明知事、真木昂県議会議長が出席して開館式が挙行され、引続き常設展示室になる展示A室で開催される「愛知県美術館改修記念所蔵名品展」の開会式が行われ、ここに小さいながらも少し進歩した美術館が歩み始めたのである。

○終えてみて

改修を終えてみて気がついた事は、細心の注意を払って直す所を考えたとつもりだが、それでも洩

れがあったという事。その第一として、作品を下げるレールランナーの位置が、全室4メートルの高さと信じて疑っていなかったのに2室だけ30センチばかり高い位置にレールランナーがあった事。これは小さな事のようにだが、このため作品を下げる鎖が2種類必要になり、その仕訳に苦労する結果になった。そしてすぐさま直す事が難しいため、現在まで陳列においての問題として尾を引いている。それゆえ改修に際して一番重要な事は、直す場所を繰り返しチェックする事だと思う。注意を払い過ぎる事はなく、実地に自分で施設の色々な部分を調査し、採寸等も必要と痛切に感じた。しかしながら改修後、文化勲章受賞者の小倉遊亀さんが、「作品がきれいいに見えて、これだけ明るい展示室はない。私達院会場としては、最高の美術館です」と言われた事を人伝に聞いて、職員一同喜んだ事を憶えている。特に照明については、建設予定の各美術館の方々がよく見学に来られた事も一応の評価を得たものと思っている。

このように私達としては、小さいながらも自分達の可能な限りにおいて県の美術館のよりよき利用をめざして改修したつもりですが、施設上の制約もあり近年建てられる本格的な美術館との比較において、その欠陥は覆うべきありません。しかし一つの事例としてこの改修経過を参考にして頂ければ幸いです。

(前愛知県美術館員 磯野英男)



(改修後の美術館展示室)

※工事業者

設計監理 松山設計事務所

建築工事 株式会社大林組名古屋支店

電気工事 大阪電気暖房株式会社名古屋支店

○参照

愛知県文化会館二十年のあゆみ P68~72

施設の全面改修 木本文平記

National Lighting Photo Sheet No. 261

松下電工株式会社発行



(豊太閤木像 豊清二公顕彰館)



(円窓付台付甕形土器 見晴台考古資料館)

博物館における 歴史講座の開設について

—企画段階を中心として—

近頃は、公立の社会教育施設や新聞社などがかわる教養・文化の各種講座が毎日のように町のどこかで開設されているといっても過言でないほどの盛況振りである。

名古屋市内においても、各区1館の構想で設置されつつある社会教育センターや婦人会館などで、自主講座が盛んに行われている。これらの講座は、ときには戸外へ出かけることもあるようだけれども、その多くは講師対受講生という、いわゆる「授業形式」をとるものが圧倒的である。このような状況はまた、それぞれの社会教育施設が示す一般的な限界をも示しているといってもよいであろう。つまり講座＝教室に割りふられたなかでの講義から脱し切れないのである。また、社会教育の一方の担い手でもある博物館側においても、友の会活動や自主セミナーなどをとおして、様々なタイプの講座・講演会が先発の先進各館で催されている。

このような状況をふまえて、名古屋市博物館では、将来にわたっての博物館来館者となり得る小学生・中学生に対して、博物館の施設と資料を最大限に活用した講座は開設できないものかという命題のもとに、検討を始めた。

この命題を解決するにあたっては、博物館の関係者だけでなく、学校教育の現場にある教師の参画を得た方が、きめこまかな対応ができるのではないかとの判断により、名古屋市社会科教育研究会の全面的な協力を得ることとした。

幸いにも、当館では、学校教育関係者との連携を密にするための連絡会（構成員23名）が発足したばかりであったので、この会に館側から趣旨説明をまず行い、学校側の協力体制の整備をはかったのである。これにより、連絡会の下部組織とし

て教師7名と館側職員7名による小委員会が設けられ、講座の内容、実施日時など、その骨子をまとめる作業に入った。

この作業の段階で、館側からは、事業の実施目的として、1) 利用者（個人入館者）の増大を将来に向かって計画する。2) 博物館に親しむ児童・生徒を結集し、個人学習の意欲を充足させる。3) この事業を通して、協力を得る先生方の中から中心的なメンバーの育成を図り、将来発足を予定している「友の会」の核となる母体を作っていく。併せて館側も、この事業の経験・トレーニングを通じ、より好ましい「友の会」の発足の足掛りとする。という三本の大きな柱を通したいことを検討課題として提示した。つまり、博物館でなければならない講座であること、学校教育関係者の応援が不可欠であること、将来的な展望を持つこと、である。この実施目的にそった具体的な内容として、講師団は学校側で編成して欲しいこと、館の施設・資料を最大限活用すること、館内学習と館外での学習が一体となったものにすること、カリキュラム作成上必要とあらば、館職員も積極的にこれに加わって行くこと、などを併せて提示した。

こうした館側の要望をもとに数度の小委員会を開催したわけである。学校側からは、博物館の仕事を理解して行くためには、収集品の入手経路、保管の仕方、展示の苦労話など、物と人との関係を講座のなかに盛り込めないか。美術品等（広義の文化財）の取り扱い方と物を見る見方を教えたらどうか。参加者に対する特別な配慮、つまり、この講座に参加して良かったなあと思ってもらえるようなものにしたい。といった講座の内容に関することと、机上学習は20～30分が限度であること。実施時期は学校行事と競合しない8月下旬が良いこと。学習の発達段階が違う小・中学生を混合させて講座を開設しないことなど、我々博物館に勤務する者ではちょっと気のつかないようなこ

とにまで指摘が及んだ。

この結果、以下の骨子が決定され、開設に向けての実施計画作成という第二段階へと進むことになった。

- 講座名 夏休み歴史教室
- 対象者 小学校上級生（5，6年）と中学生（1・2年）とし、各々1講座とする
- 内 容 ある事象・事物に的をしぼった集中学習とする。
第1日目 オリエンテーション
第2日目 資料を利用した学習
第3日目 館外学習・まとめ
- 時 期 夏季休暇中（8月15日すぎ）の3日間
- 時 間 第1日・2日 9時30分～12時
第3日 9時30分～16時
- 募集人員 各講座とも50名
- 参加費 1,000円

この原案をもとに、講座を直接担当する教師の方々が、社会科研究会で10名選ばれ、以後はこのメンバーと館の担当職員とで具体案を練った。そこでの原案は以下のとおりである。

〈小学生〉

- 日時 昭和58年8月24日(水)～26日(金)
9時30分～12時30分（26日は終日）
- 場所 博物館展示説明室
- 人数 5・6年生を対象に50名・講師5名・博物館より学芸員若干名
- 内容 1日目
○オリエンテーション・三面マルチスライド上映・常設展見学（講師が常設展のテーマを分担し、展示室内で説明、生徒はグループ毎に常設展を見学）（休憩）
○名古屋の歴史について、テーマを決めて講師が話をする。

2日目

- 「縄文土器の文様に挑戦してみよう」
(1)縄文土器について……説明・実物にふれてみる。
(2)文様について……説明を聞きながら実物を見ながら復元してみよう。

3日目

遺跡めぐり

準備するもの

- 教材・陶土・竹管・木・縄・貝片等
- テキスト（原稿：講師に依頼、印刷は博物館で担当）

講師からの希望事項

- 縄文土器の拓本を児童にとらせた

〈中学生〉

- 日時 昭和58年8月24日(水)～26日(金)
13時30分～16時30分（26日は9時30分～）

場所・人数 小学生の教室と同様とする

内容 1日目

- オリエンテーション・三面マルチスライド上映・常設展見学・名古屋の歴史についての話、できれば2日目に関連して収蔵庫・作業室の見学も

2日目

- 土器の復元作業・水洗・石膏接合など土器の実測作業・土器の拓本採り

3日目

遺跡めぐり

準備するもの

- 土器復元に要する消耗品、タンポ、

和紙、油墨、トレーシングペーパー等

○テキスト（原稿：講師依頼、印刷は博物館で担当）

して知ったのである。

（名古屋市博物館学芸課主査 井上光夫）

この原案をいったん小委員会へ持ち上げ、できるところとできないところ、例えば、中学生に土器の復元作業や実測を教える必然性があるのかなのか。博物館の仕事を理解させるという内容が欠落している。小中学校とも、名古屋の歴史についての話が講座の中に組まれているが、この話は独立してするのではなく、常設展の会場内で、展示資料を解説しながら進めた方がよい。等々、様々な修正意見が出された。特に、中学生向けの講座については、実施不可能な面があまりに多すぎるところから、大幅な軌道修正をせざるを得ない状況であった。こうした意見を踏まえ、最終的には、小学生向け歴史教室に「縄文人のくらしを探る—土器の文様にチャレンジ—」を、中学生向けに「陶磁器のルーツを探る—土器からニューセラミックスまで—」と題した講座を開設することとなった。それぞれの日程とカリキュラムは、別表のとおりである。

こうして参加者の募集に入ったわけであるが、募集人員の少なさ（いささかいいわけがましくなるが、参加者との対話を多くすること。体験学習を取り込んだこと。等々様々な条件により、各教室とも50名が限度であった）もあったであろうが、申し込み者は小学生2,326名（約46倍）、中学生222名（約4倍）にも達した。

以上、名古屋市博物館の歴史教室開設について、いかに準備を進めてきたかを、長々と記述したが、参加対象者にあわせた企画・実施者（この場合・教師の参画）を得ることが、博物館学芸職員にとってもどれ程有効にその力が働くかを感じざるを得なかったことと、あらためて、博物館教育担当者（Museum Teacher）の必要性をこの事業を通



（粘土にさまざまな文様をつける）

歴史教室の日程 〈小学生〉

8月24日 (水)

9時30分～12時30分 1階展示説明室 その他

- | | |
|-------------------------------|-------------------------------------|
| ア 歴史教室の内容の紹介 ^{しょうかい} | イ グループ分け |
| ウ 三面マルチスライド | エ 博物館の仕事 |
| オ 館内施設見学 | カ 常設展 ^{じょうせつてん} 見学 (グループ別) |

持ち物

・筆記用具

8月25日 (木)

9時30分～12時30分 1階展示説明室

- | | |
|--------------------------------|----------|
| ア 縄文人 ^{じょうもん} の暮らし | イ 体験コーナー |
| ウ 文様 ^{もんよう} づくりにチャレンジ | |

・しおり
・筆記用具
・新聞紙
・ビニールぶくろ
・タオル
・手さげぶくろ

8月26日 (金)

9時～16時 名古屋の史跡めぐり^{しせき} (バス見学)

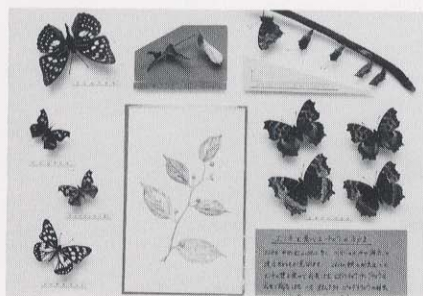
- | | |
|------------------------------|----------------------------|
| ア 見晴台遺跡 ^{みはらしだいせき} | イ 東海銀行貨幣資料館 ^{かへい} |
| ウ フルーツパーク (昼食) | エ 白鳥一号墳 ^{しらとり ふん} |
| オ 勝手塚古墳 ^{かつてこづかこふん} | カ 竜泉寺 ^{りゅうせんじ} |

・しおり
・筆記用具
・べんとう
・すいとう
・ぼうし
・その他

※忘れ物をしないようにしましょう。

日 程 〈中学生〉

8月24日 (水)	8月25日 (木)	8月26日 (金)
13:30 オリエンテーション ・日程説明 ・班長選出 14:00 博物館の展示を中心とした学習 ・三面マルチスライド上映 ・博物館の仕事 (休 憩) 15:00 博物館内の施設見学 ・常設展見学 16:00 明日の連絡	13:30 日程説明 土器から陶磁器、ニューセラミックスに至る学習 14:00 (休 憩) ・縄文土器 15:00 弥生土器 (休 憩) ・須恵器 陶器と磁器 16:00 ・ニューセラミックス 明日の連絡	〈フィールドワーク〉 9:00 日程説明、博物館発 ↓ 10:00 東海銀行貨幣資料館 ↓ 11:00 愛知県陶磁資料館 ↓ 12:00 (昼食・休憩) ↓ 13:00 ↓ 14:00 ノリタケカンパニー陶器工場 ↓ 15:00 ↓ 博物館着、解散



(標本 エノキを食べるチョウ 名古屋昆虫館)



(村内風景 重文・東松家住宅、安田銀行会津支店
重文・札幌電話交換局 博物館 明治村)

ボランティアと地域研究

最近、わたくしは、非常に興味深い話をきいた。名古屋の地下鉄の改札口で八十前後の老婆が難渋していた。どうやら、自動改札に対して拒否反応をしめしているらしい。ふたりの男性が、どうすればよいか、を説明しているのだが、どうも腹にいらねえようだ。注意してきいていると、男性らの説明と老婆の疑問とは、スレチガッていて、老婆は、どうすればよいか、のほかに、全体なぜそういうことが可能なのか、を知ろうとしているようにみえる。男性のひとりには、コリャダメダ、とつぶやいて、去っていった。まったく、老人というのは、融通のきかないこまりものだ、というのである。

これが、わたくしには、むしろ、人間の本来的な知識のありかたを端的にしめしているもの、のようにおもわれた。how と why とを分離したものとしてとらえる、というかんがえかたは、必要にせまられてやむをえず採用させられていることであって、本来、know why と know how とは分離不能なことではなかろうか。となれば、know how のみで生活が構成されているような現状において、why に対する知的欲求は満足されないままにか他の方法で代償されているだけではないか。これが、博物館ボランティアの可能性をかんがえるとき、その可能性をささえるはずのものではないかと。

この論拠には、われながらおおいに感心して、まず「犬山学のために」と称する文化講座を開設（昭和57年）、ついで、昭和58年5月には、日本モンキーセンター学芸部のご援助をえて「尾北地域学創造センター」を発起した。これら一連の博物館活動には、それなりの目的が一貫しており、それらは時代錯誤的といわれてもしかたがないよう

な、ナロードニキとドイツ・ヴァイマル共和国時代の思潮を彷彿させるものではあるが、博物館活動の地域社会への内在化と知の全体性の回復をめざす、ということであった。

これらの目的は、参加する各人が、おのがじし知識を獲得する、ということによってしか達成できない。「文化講座」ではこの「おのがじし」ということに弱いところがあるようにおもわれた。どうしても、そこでは、各人の体験とはかなりへだたった既成の知識が、一方的に、提供されてしまうから。この弱点をのりこえるためには、知識の獲得に対する一層高度な関与が、参加者各人に必要であり、また獲得さるべき知識自体もそれと見合ったものでなければならないのではないか。かくして、「犬山における西洋文明の受容」のありさまをさぐる、という課題をたて、ボランティアによる聞取りを基本とする調査の過程で、さきの目的が達成されることをめざすこととなった。

「犬山における西洋文明の受容」という調査立案の趣旨は以下のとおり（「犬山における西洋文明の受容」調査立案の趣旨、による）。

第一に、地方の歴史は中央の歴史とは相対的に独自の歩みを示しているはずであって、中央の政治的な時代区分に対しては、ある程度懐疑的な態度を保つべきである、ということ。

第二に、地域学というものの実際をその計画立案からまとめの段階にいたるまで実行してみることによって、その方法論を練りあげることができるだろう、という期待。

第三に、ボランティアのありかたの摸索あるいは試金石として、将来的には地域博物館の設立から運営にいたるまで市民レベルで行われることが可能か、そのようなボランティア集団というのは形成できるか、という問いに対する試行錯誤は必要である、とおもわれること。

また、調査目標は以下のとおり（同上、「調査目標」による）。

1. 明治期以降の犬山地方における西洋文明の受容を導いたのは、いかなる意識要素・またいかなるグループであったか。
2. 西洋文明の受容は一時的なものであったか、否か。
3. それは相対的なものであったか、否か。
4. それは、生活様式・生活意識の変容を直接もたらしたか、総じてそれは革命的といえるようなものであったか、否か。

その後の経過は、6月16日発会（第1回）後、毎月1回の定例会のほか、随時の調査行を実施、現在まで6回の聞取りとその検討をほぼ交互におこなってきたが、資料整理がゆきとどかず、困惑しているのが実状である。このような現状をふまえたうえで、これまでの活動がどう評価されうるものであるか、を以下検討しよう。

尾北地域学創造センター（以下センターと略記）の役割分担は、インフォーマント、聞取調査者、および調査の企画・整理担当の3種に分類、約30名の参加をのぞんでいたが、登録者は15名、そのうち7～8名が常時参加できる人員ということで、聞取調査と企画・整理の区別は消滅せざるをえなかった。もっとも、これは、ボランティアの参加を全面的なものにする、という意味ではむしろのぞましいことではあったが、しかし、小人数ゆえにすべての調査に筆者が関与すべきこととなり、ボランティアが自主的に調査の企画立案をして実施する、という、本来のぞまれていた方向がうしなわれてしまった。つまり、ボランティアの参加意欲にも種々あるとはいえ、ただひとりでも行動できる、というのは、その最終段階でのことであって、漠然とした参加意欲のみではよくないところである、というきわめて基本的な事実を無視してしまっていた、ということであろうか。この問題を解決するためには筆者自身の努力が必要であるとはいえ、欲をいえば専属で担当できる者少なくとも1名がほしい、というところで

あろうか。

上記の問題が調査回数にひびいて、半年で6回、という貧弱なものになったが、それでも、その整理、分類、公開が完了していないのが現状である。これは、しかし、まったくのしろうとがとにかく地域について勉強をしてみる、ということの基本としてはじめたものであることを考慮すれば、ダメなばかりでもないだろう、とおもう。ボランティアの作業能力はおどろくほど優秀であり、委託されたことは確実に遂行されるので、企画の円滑化と整理法の確立があれば、問題はなくなるだろう。

センターを構想するにあたって、筆者にはいまひとつの目的があり、それはある意味では利己的なものであるが、財団法人岩田洗心館を地域におけるコミュニケーションの場にしたい——あたかも、町内の喫茶店が現在そうになっている、ような意味で——、ということであった。これも、現状では、きわめてイデアルなもの、という位置をしめており、その後、「村瀬太乙名品展」という犬山の大儒をめぐる特別展をひらいた経験からみれば、特別展の多発の方が手取り早い方法といえようが、交流の全面性と継続性、という面からみれば、ボランティア層とのそれにメリットがあるようにおもわれる。

最後に、地域研究とのかかわりでボランティアを構想した点について、若干の補足をしよう。

博物館ボランティアといえは、すぐ博物館の展示説明員とか販売コーナーの担当とか、とにかく正職員ほどその出勤がオブリガトワールでなくとも問題のおこらないと予想される職域で、しかも博物館にとっては、確実になんらかの金銭的メリットのある（人件費節約、というような）役割を担当していただく、というのが通り相場であるが、この日本的責任のがれとエコノミック・アニマル風の発想からは、本当に意味のある博物館ボランティアは誕生しないだろう、というのが、私の思

明治建築の保存と野外博物館

1. 現況

先年明治村を訪れた南京博物院の宋伯胤副院長は、「明治村通信」に寄稿して、「日本露天博物館 明治村漫步」^(注1)の中で、次のように述べている。

「学校、兵営、住宅、商店、病院、郵便局、派出所、法廷、監獄等々を見ることができた。これらの建物は1つ1つが寄りそうように並んでいた。私は非常に興味ぶかく建物の名前を口の中でつぶやいた。それはあたかも明治維新史の一部を読んでいるような感じであった。

明治村は文字で書かれた歴史の教科書よりもずっと、いきいきしており、はるかにわかり易い。それは人々にすでに過ぎ去った百年前の社会に触れさせてくれるのである。そして過去の日本人がどんな生活をしていたのか、維新はどのような形で進行したのか—人々は自分の眼でそれを確かめることができるのである。また日本はどのような道をたどって発展したのか、それを自らの眼で知ることができるのである。

「明治村」が日本人や外国客人に歓迎され、喜びの心をもって、参観の対象とされるのは、いま述べたようなことが理由である。」

昭和58年現在、100万m²の村内に56棟の明治時代と1部大正時代の建造物が保存展示され、またそれらの個々の建造物にふさわしい関連資料を屋内に展示しており、また汽車や市内電車の動態展示等を行っている。いってみれば野外建築博物館であるとともに、また歴史博物館でもある。

入館者は年間130万人ほどで、わが国の博物館界において、入館者の数の多いことで画期的なことといわれている。入館者の地域分布を見ると、地元愛知県内からは半数で、むしろ広く関東、関西を中心に日本全国に広がっている。東北、九州地

いである。上述のようなボランティアは、県立規模の博物館では、一定の意味もあろうが、博物館そのものとは無関係であり、しかるに、将来的には、ボランティアこそが、博物館職員と協力して博物館活動をささえるべき層として、かんがえられるからである。このような層として博物館ボランティアをとらえると、かれらは、地域というフィールドに対する鋭い理解力と興味とを有するひとびとであり、しかも、それらの理解と興味とが内包する方向を実現する行動力をも、あわせもったひとびとのことでなければならない。

このような大理論をもってはじめたセンターであるが、ただちに馳せ参じてくださった方々の多くは、土着の方々ではなかった。はじめこれは意外なことのようにおもわれたが、しかし、いまではこれに満足している。というのも、聞取調査は土着の方々からおこなうので、体験の交流が明示的—黙示的了解ではなく—におこなわれるからであり、かつ、地域と地域外との交流にも幾許の寄与があらう、とおもわれるからである。

現状では、殆ど坐折！の企図をここに報告するのは、いまだなお希望のみ生き存えてある、がゆえである。ここまで拙文におつきあいくださった方々には、蛮勇をふるって試行錯誤にふみだされんことを、のぞむ次第である。

(岩田洗心館館長 岩田正人)



(貝の展示室 蒲郡フラワーパーク)

区からの修学旅行生と外国人の増加が見られる。

2. 明治村のおたち

尾張富士の麓、入鹿池のほとり景勝の地を整備して、3カ年の準備期間をもって15棟の明治建築の移築を終えたところで、ともかく明治村が公開されたのは、昭和40年3月18日である。これより先、昭和30年代は戦後の復興期から経済の成長時代で、再開発の波によって大地震や第二次世界大戦の空襲の中を生き残った明治の建物も含めて、伝統的建造物は無思慮に壊わされていた。

建物は時代の証言者である。わが国が西洋の文明を取り入れ世界の一員として組み込まれ、近代国家として成長し発展していった明治時代は、わが国の歴史の中でも特に画期的な時代であり、眼前で失われていくその時代の建物や明治の特色をもった資料を是非後世に残さなければならないと、いち早く気づいてその救済のため立ち上がったのは、初代館長故谷口吉郎博士をはじめ明治村の建設に尽くした人々であり、財団法人の博物館建設にたずさわりの、全面的に援助した名古屋鉄道株式会社であった。

現在明治村の56棟の建物には、8件の重要文化財と1件の県有形文化財の建物が含まれているが、もし明治村が無かったら、これらの建物は全部、取り壊わされてすでにこの世には無かった筈の建物ばかりである。

明治村が収集保存の対象とする資料は次の3点に要約される。

- (1) 明治時代にあったもの、つくられたもの。
- (2) 明治時代にはじめられたもの又は滅んだもので、明治に特有なもの。
- (3) 明治時代の特色をもったもの。

他の時代のものとは画然と異なって明治の特色をもったものと言えば、西洋文明、特に西洋技術の影響を受けた「もの」と言えよう。建物で言えば「西洋館」がその代表であり、木造は勿論、わが国としてははじめてのレンガ造や石造の建築並び

に鉄骨や鉄筋コンクリート造の西洋建造物に及んだ。もっとも明治建築の流れは大正時代に引き継がれているが、関東大震災で終わっているとされる。この意味で大正12年までの大正建築も明治村に移築している。

建物は本来その場所で保存されるのがもっとものぞましいことであり、建物保存のための明治村への移築の依頼や紹介があった時は、現地で保存活用を要望し、その実現が全く不可能の場合に限りやむなく移築を受け入れているのである。

明治村で保存を引受けることになった建物は、村内でもっともその建物にふさわしい場所を選び配置される。西園寺公望別邸「坐漁荘」は興津の海岸を想わせるよう入鹿池に面した高台を選び、庭の先に水が見えるよう配慮されている。また建物をよりよく見せるためには、建てられる位置のレベルと建物前の引き等も大切であり、建築に先立って敷地造成工事が綿密に検討される。平坦なところに建物が平面的に展示してなく、建物に応じて敷地に高低をつけ、自然の山林を生かしながら植栽を加え、建物周辺の環境を整え、また建物毎にその固有空間を与えて、各建造物の価値が最も発揮されるよう、その環境の造成を大切に考えている。

明治村ができてわかったことであるが、博物館として1カ所に多くの建物が集めて保存展示してあるので、一度に多くの明治建築を見学し、比較対照することにも役立っている。明治村が博物館である所以である。重要文化財級のすばらしい建物であっても、交通不便な場所に1棟だけ保存されていたりすると、よほど関心の深い人や研究者でない限り、わざわざ見に出かけることは少ない。

多くの人々に明治建築の美しさ、保存の大切なことを示して来たことは、明治村がもっとも誇りとするところである。最近では全国各地で明治建築が保存されるようになって来た。全国の明治建築で重要文化財の指定を受けた建物は、明治村開

館の昭和40年には18件^(注2)しかなかったが、昭和58年までに76件の建造物^(注3)が指定をうけている。棟数にして100余点になっている。明治建築保存の意義が多くの人々に認識されてきた表われといえよう。

(注1) 季刊「大自然」総第11期，1983年3月11日発行。訳文は「明治村通信」158号引用。

(注2) 国宝1件を含む。

(注3) 明治丸等も含む。

(博物館明治村学芸員 海老沢立志)



(上空より明治村を見る)

共同企画の成果と課題

1. はじめに

豊橋市美術博物館では、58年度の企画展として、浜松市美術館と中日新聞社との三者共催で、特別展「渡辺小華展」を開催した。この展覧会は、いま美術館界で問題となっている美術館同士による共同企画展の一つの試みとしておこなった。

以下、展覧会の内容、共同企画展の契機と経過を述べ、その成果と今後の課題について若干の意見を付記した。

2. 展覧会の内容

渡辺小華は、文人画の泰斗渡辺崋山の第二子として、幕末の天保6年(1835)1月7日に江戸麹町半蔵門外の田原藩邸で生まれた。小華は名を諧、字を韶卿といい初め小崋のち小華と号した。

小華の生まれた時、父崋山は43歳、藩の年寄役で領内統治の政務が多事である中で、不時の凶敵に備えて「報民倉」の設立に尽力していた時期である。しかるに、天保11年(1840)小華6歳の時、崋山は幕府の嫌疑をうけて田原へ檻送され、翌天保12年小華7歳の10月自刃し果てた。

その後、小華13歳の弘化4年(1847)、父崋山の高弟である椿椿山のもとに入門し画道に励んだ。この時椿山は小華の入門に慎重な態度でのぞみ翌日入門を快諾したという逸話はよく知られている。椿山の指導のもとに一家を成した小華は、度々田原藩邸に召し出されて、若君のお伽役と絵画のお相手を命じられている。

安政3年(1856)22歳の時、兄が病没したため家督を相続し、文久元年(1861)27歳で椿山の養女須磨を妻に迎えた。そして、元治元年(1864)33歳で父崋山より10年早く年寄役に昇任して、廃藩後は参事という重職を全うし、明治維新前後の動乱期に田原藩のために尽力している。

明治7年(1874)田原から豊橋に移り、吉田藩安形古う方へ寄留、このあと明治10年吉田神社境内にある祢宜宅に住居を移し画室を構えた。明治10年の第一回内国勸業博覧会で花紋賞、明治15年の第一回内国絵画共進会で銅賞を受けるなど着々と中央画壇での地歩を固め、同年10月上京した。この時代が画室の庭前に多くの草花を植えて四季の花弁を楽しんだ時期で、いわゆる百花園時代と呼ばれ、東三河や遠州の画壇に大きな影響を与えた。また、百花園には小華の名を慕って画家のみならず多くの文人墨客が訪れ、あたかも一大芸術サロンの感を呈した。

そして、晩年は東京で画塾を開き後進の指導をするかたわら、明治宮殿の杉戸絵を揮毫するなど、花鳥画や水墨画に独自の世界を築き、その前途を期待されながら明治20年53歳で没した。

本展は、小華の初期から晩年に至るまでの作品のうち、最晩年の作品で最高傑作の一つであるといわれる宮内庁所蔵明治宮殿杉戸絵「寒菊図」「雪中南天図」「朝顔図」「紫薇花図」の8面をはじめとして、屏風6双、掛幅42幅と扇面、画帖、書簡、田原藩日記等関係古記録、印章などの資料を含めた70点を展観する初めての回顧展であった。

期間中の入場者数は、豊橋市美術博物館が21日間で8,288人、浜松市美術館が14日間で2,326人、有料の展覧会としては両館とも予想を上回る入場者であった。図録については、両会場とも終了数日前に売り切れるほど好評を博した。

3. 共同企画展の契機と経過

豊橋市と浜松市は、従来から政治、経済、文化の面で非常に深いつながりをもっているが、最近さらにその交流の推進化を図ろうとする動きが表面化してきた。その動きの中で、美術館活動の面での交流は、54年に本館が開館して以来一つの課題であった。そのあらわれとして本展の開催があったのである。

開催の契機は、両館の学芸員同士の話し合いの

中で生まれたものであるが、共通テーマでの展覧会ということになると相互の事業が異なり、いろいろな意味において制約があり、容易なことではなかった。しかし、今回の「渡辺小華展」については、両館とも共同企画展のテーマとしてはスムーズに決めることができた。

両館が立地する三遠地方は、渡辺崋山を頂点とする崋椿系画家を数多く輩出しており、しかも、それらの作品が地元に残されている、前々より両館ともそれぞれ独自に崋椿系画家を調査し、その研究成果を展覧会として発表してきた経過がある。

その中で、崋山を除いて一番なじみのある画家は渡辺小華であり、しかも小華の作品が数多く残されているにもかかわらず、いままで本格的な回顧展が開催されてないということもあって実施に踏み切ることができたわけである。

作品の調査にあたっては、豊橋を中心とした東三河地方を豊橋市美術博物館で、浜松を中心とした遠州地方を浜松市美術館で、それぞれ分けて担当した。その調査の上に立って、展覧会にふさわしい作品を、渡辺崋山研究の第一人者である常葉美術館名誉館長菅沼貞三先生の指導のもとで、両館の学芸員が比較検討して選んだ。

作品の借用については、依頼は両館連名でおこなったが、借用の折衝や集荷、返却はそれぞれの担当地域において責任をもって分担した。印刷物については、図録の編集は豊橋市美術博物館、ポスター・チラシ・パネルなどの作成は浜松市美術館が担当した。そして、これらの経費負担については、それぞれの館運営に伴う経費と実費負担分を除けば、すべて両館で折半を前提とすることで合意がなされた。

4. 共同企画展の成果と課題

この展覧会を振り返って、美術館同士が行う共同企画展の成果と今後の課題について考えてみることにする。

成果については、まず第1に、展覧会経費が軽減されるということにある。少なくとも今回の場合、搬送費、保険、謝礼、それに加えて図録、ポスター、チラシ等の印刷費の面で、単独に行うより経費負担が大幅に軽減されたという大きな効果があった。

第2に、展覧会へ向けての調査活動を通じて、学芸員相互の交流が得られ、ひいては学芸活動の活性化が図られた。第3に、広い範囲で宣伝がなされるという効果があった。以上のほかにも、いろいろな面で成果があったと思われる。

しかし、共同企画展は、良い結果ばかりでなく、いろいろな面でむずかしい点があり、今後の課題として残された。

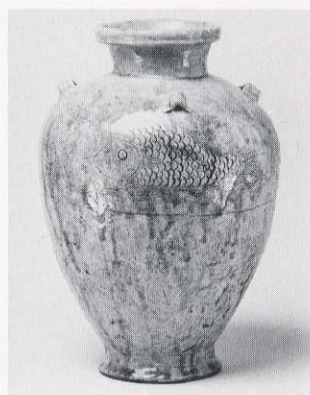
まず第1に、テーマの設定にある。それぞれの館が地域に根ざし、将来を見通した方向づけがなされている中で、共通のテーマのもとで共同企画展を考えていくことは非常にむずかしい問題である。第2に、テーマが決まったものの、その展覧会に対する考え方、内容等について必ずしも一致したものとなりにくいところがある。したがって、館ならびに学芸員同士の意見調整が事前に十分なされるべきである。第3に、日程の調整である。どこの館でも都合のよい時期に展覧会を開催したいのは同じであり、その調整が問題となる。第4に、会計規則を含めた事務処理の仕方、慣習などの違いである。いずれにしろ、これらの点については館相互の信頼関係の上に立った話し合いで解消していかなければならないのである。

以上、豊橋市美術博物館と浜松市美術館が「渡辺小華展」という共同企画展を試みての成果と今後の課題について思いつくままに記した。こうしてみると、まだまだ美術館同士が連携して行う共同企画展については、非常にむずかしい問題点を抱えているといわざるを得ない。したがって、今後はこれらを一つ一つ解決していくことによって、望ましい立派な共同企画展ができるものと確



信するものである。

(豊橋市美術博物館学芸員 後藤清司)



(灰釉 魚波文四耳壺 名古屋市博物館)



(対面所襖絵「田植」名古屋城天守閣)

郷土文化の誉

名古屋そろばん工匠

お祖父ちゃん、また変なものをつくっているのねえ」孫娘の言葉である。

5日ほど前から仕事場で、例によつての、そろばん造りが始まっている。中区古渡町より古沢町の新居へ移つてのことであつた。

そろばんの枠の部分を、円形にして自分の身体を中心に、ぐるっと囲むように造っている。この人こそ名古屋唯一のそろばん工匠、鈴木豊太郎(通名利吉)。喜寿をあと2年後に迎えているのに、一心不乱に、名古屋そろばんの製造にうちこんでいる。直径にすると約2~3m位になる、300桁位になるだろう。こんなとろくさい(名古屋べん)そろばんを、どんな計算に使用するのか、初めは、専門家も、他の人も不思議がった。

約1年間かかって、みごとな丸い円の形をした、ドーナツ形の大形なそろばんである。

名古屋は、地勢上日本国の中心に位置しながら、昔から首都となった事がない。奈良、大津、京都、東京と首都が移り変わり、現在首都東京へと、中央集権時代となっている。名古屋は、文化不毛の地であると、耳にするが、私は次の事実に基づいて、皆様の良識に訴えることとする。

そろばん文化について述べてみよう。現在世界における第一流の考古学者であるといわれているゴールドン・チャイルド著述(G.チャイルド著、ねず・まさし訳「文明の起源」岩波書店)に従えば、チグリス、ユーフラテス両河間の沖積平原の単調な平地には、周囲の土地より60フィート以上高い丘が起伏しているが、これは天然の丘ではなく、荒廃した古代の神殿、宮殿の残骸なのである。1930年、ドイツ人調査団が、ユーフラテス下流西岸のウルに近い町ワルカで、このような丘の真中に深い縦穴を掘った。この縦穴の上部にある神殿

の床壇で、この神殿こそは、先史時代5,500年前のものであつた。またこの神殿に接近してジグラード塔または階段塔の原型が現れたが、これは先史時代両河の中間地帯に人類最初の都市国家を営んだ、シュメール人の建設した神殿の一部で、ジグラード塔は全部手の形をした泥のかたまりで構成されている。そしてこのジグラード塔から確かに数学の印章痕と穴のついている一枚の計算タブレット(泥土版)を発見した。これこそ世界最古の計算タブレットで、これ以後長く使われたシュメールにおける神殿計算書の直接の先駆であつた。

(「塵劫記周辺」山崎与右衛門著、森北出版発行。故山崎博士のこの原稿は奥様の好意で、当博物館に寄贈)。

これが計算機器の先駆であり、先史より現代に至るまで、いろいろな変化と進展があつたのである。先の手形をした泥のかたまりが、人類が10本の関節のある指をもっていたという事実のおかげで人間の計算することを知り、数の列を無限に拉げて行くということを教えたのは、正にこの10本の指なのである。これなくしては数に関する人類の技術は、原始的な意味を一步を超えることはできなかったであろうと思われる。また吾々の両手の10本の指がなかったなら、今日吾々がみる計算法の進歩も、精密科学の進歩も、原始的な状態そのままに止まっていたことであろうと思われる。

(「未開人の教学」矢野健太郎著、誠文堂新光社発行1942年)。

さて本来の主文たる、そろばんの歴史的な事情はどうであつたろう。そろばんは、縦に計算するものと、横にしてするものとに分類される。そろばんは中国地方で発明されたと云う人もあるが、現在の形態になつたのは古代中国かも知れないが、発生は西洋ではなかろうか。砂の上に線を引いて、石を置いて計算する方法が、今より3・4000年前より、メソポタミヤの地方に行われたと考えられる。500年位後になると、盤の上に線を引いて

あって、その上に珠をおいて計算する。その時代から先祖は指を使用することによって、いろいろな産物を発明したのであり、算木（赤と黒の棒）による算の計算、わらによる、わら算（沖縄地方でよく使用された）、箱根の道中を、江戸時代の馬子達が、客をのせ、宿場毎に腰にさげたわらを1本2本と計算した話、また南方の民俗学によると、首かざりの石を数えて、生活した等々、西洋では数千年過ぎ「線そろばん」より「溝そろばん」時代と移行していく。ローマ人が紀元前300年から紀元後300年ごろの時代に使用したと思われる「ローマ溝そろばん」が現在、イギリスの博物館に遺っている。盤に溝がほってあって、その中に計算する珠をはめこんだもので、現在の日本の四つ玉のそろばんに似ている。中国にも漢時代（西紀250～300年頃）の「数術記遺」という題名の本の中にある。古代西洋より、シルクロードを通して中国に入ったものか、現在まだ解明されていない。ソ連及び西ドイツ地方は、横形のもの（珠を左右になでて計算する）である。

この頃の中国古代の算学書はほとんど、「算」による計算方法が記されている。その後わり算九々法がぼつぼつ使用され、元の時代になると、そろばん計算が主体となってきた。“召し使いをやってみると、初めのうちはいいつけない仕事でもよく見つけてまめに働くから播盤珠と同じようだ。長くたつと、いいつけておいた仕事でも一日中知らん顔をしていて、動こうとしないから、仏頂にはめこんだ珠のようだ”，などということわざが書いてある。（『算盤攷』児玉明人著、中央史壇1928年）。この様な変遷により、中国—朝鮮半島—日本へと、そろばんは伝来したのではなかろうか。鎌倉時代、室町時代が、文献的にぼつぼつ考証されつつある。過去日本のそろばんの産地は、雲州（島根）、播州（兵庫）、大阪、九州方面（長崎、博多）、芸州（広島）、名古屋、東京、北陸（長岡）で造られていた。最初は、大工、木地師が片手間に作っ

ていた。江戸中期頃より本格的なそろばん師が出現した。代表的な名匠をあげると、大津一里塚庄兵衛、木屋安兵衛、京都小谷平兵衛、伊藤伊右エ門、雲州、村上吉五郎、高橋常作、村上朝吉、名古屋鈴木利吉、博多青柳平三郎……。代表的な人のみとした。現在は残念ながら、オール機械生産である。各部品ごとに製造して、最後に仕上げ工が完成させる。それでも300工程以上ある。昔の手づくりの尊さがつくづく心にしみる。今でも手づくりではほんの少数の人が作っておられる。

鈴木豊太郎（通名利吉）安政2年～昭和8年が、名古屋そろばん工匠として、唯一人の存在であった。大津でそろばん工として修業されて、大津そろばん（本指といって、骨針を一本も使用しない、差し込み式で、珠と珠と間（左右）（上下）が1ミクロも相違ない、手作りとしては完璧な作品）を最初は作っていたが、明治30年頃より、桁（すす竹で作られた上下の棒）を大津そろばんの3倍近く太くした。理由は科学的に、計算機器としての珠と桁との摩擦を少くし、珠が梁にあたっても、すわりが良く、はじき返りが無い、音色が美しい、チーンと余音をもつ、指の動作による欠点を、そろばん珠で、カバーしたわけである。

珠の中心を上下1mmを除いて中間を内部へ1mmずつと削る。これを中刳玉（ナカグリダマ）という。偉大なる発明といってよかろう。余聞ではあるが、浜松市の〇〇楽器が、この、中刳玉をとり入れて、美しい音色の楽器の生産に成功したと聞く。

この様なりっぱなそろばんを使用して、高度な和算（日本数学）のもっとも困難といわれる『開方翻変』（関孝和著 貞享乙五仲冬十三日・1685年写本）の方程式の解法と根の吟味を扱っている。高次方程式を珠算（そろばん計算）で解くために、珠算では開平法、開立法にぞくするが、普通のそろばん（27桁）位ではよく解けても二次三次方程式しか解けない。利吉翁は自身は動かないで、円

形そろばんを指で計算しながら、左手でそろばんを、左へ廻していけば、高次の方程式を得る事は、瞬時に可能だとの考えで製造したもので、「円形式天元そろばん」という。そろばんの長所であり、正確、迅速を考慮したものである。余聞ではあるが、飯塚伊賀七、宝暦十二年～天保七年（1762～1836）茨城県の民間科学者の「天元術用そろばん」がある。普通のそろばんを九組重ねたもので、そろばんの縦の高さが、あまり高くないために、珠には銭の寛永通宝を使用している、（算木を使用して方程式を解く計算で、それを通常「天元そろばん」（筭）と昔はいつている。（田村竹男著、飯塚伊賀七ふるさと文庫 1979年発行）。

利吉は77才で、昭和8年亡くなり、名古屋平和公園墓地、洞仙寺の先祖の墓に永眠されている。

文化不毛といわれた、郷土名古屋に、工匠であり、民間科学者即文化人が存在したことを誇りに思うものであります。残念ながら第二次大戦で、利吉宅は古沢町で戦災にあい、円形大そろばんは焼失した。目下複製考慮中。

（鈴木そろばん博物館館長 鈴木俊夫）



（復元家屋 美和町歴史民俗資料館）

常滑市民俗資料館の経過と今後

〈1 はじめに〉

常滑は、1000年ちかくも泥をこねまわし、火で焼きながら人々が生活を営んできた町である。その歴史は、常滑の風景の中にしっかりと刻み込まれ、焼き物の町特有の個性を発揮している。レンガ造りの四角い煙突、軒をつらねた窯屋の街並み、傾斜地の擁壁に使われた土管や焼酎瓶、入り組んだ路地の中にある家々の塀に積まれた焼き台やエゴロ等々。それらは、まさに近世から近現代にかけての常滑を象徴する民俗資料であり、今なお町全体が民俗資料館であるといっても過言ではない。そしてまた町の後背部に控える雑木林の中には、常滑の焼き物のルーツともなる中世古窯が眠っているのである。林の中にあるのがっている甕や茶碗のひとつひとつが常滑の焼き物の歴史を語ってくれるのである。

しかし、常滑においても戦後の高度経済成長を経る中で、産業の機械化や土地開発が急速に進み、長い歴史の中で培われてきた町の景観は、着実に変容し無個性化の道を歩みつつあるのである。また、かつて土と人間とのかかわりあいを助けていた諸々の道具類も機械の導入とともに捨て去られているのである。

〈2 民俗資料館の建設〉

常滑の固有文化を形成してきた遺産ともいえるべきこれら歴史民俗資料の危機的状況が顕在化してきた昭和46年当時、常滑市教育委員会は、文化財保護審議会の指導を受け、窯業民俗資料の収集作業に着手している。以来約3年間の収集活動により2000点をこす資料が収蔵され昭和49年4月にそのうちの221点が「常滑焼生産用具ならびに製品」として愛知県の有形民俗資料に指定され、翌50年9月には、「常滑の陶器の生産用具および製品」

1655点が国の重要有形民俗文化財に一括指定されている。そして、この資料の収蔵場所として重要有形民俗文化財収蔵庫が51年7月に完成、収蔵展示が行われた。その後、53年より文化財保護審議会において民俗資料館建設構想が祖上にのぼり、約2年間の審議、建設工事を経て56年4月に開館という経緯をたどる。約480m²の常設展示スペースと88m²の特別展示室、補修工作室、視聴覚器材の揃った講座室、図書室、学芸員室、会議室、暗室、事務室等からなる本館と延床面積484.7m²の収蔵庫を併せて誕生した常滑市民俗資料館は、開館後すでに3年の歳月を経てきたわけである。

〈3 開館後の活動〉

当館の常設展示は、「常滑の窯業のあゆみ」をテーマとした展示ホールと「土との出会い」「火との出会い」「暮らしとの出会い」とによって構成される展示室からなっている。前者は、中世古窯から発掘された考古資料を中心に縄文時代から近代の窯業製品までを時代順に配置し、パネル等によって説明を行うスタイルをとる。後者は、本館の主要部にあたり、焼き物が出来あがるまでの製土、成形、施釉、焼成、運搬といった各工程で使用された道具とその製品を展示し、2台のビデオにより道具の使用法を解説している。また展示室内には、三面スライドを設置しており、常滑の900年間にわたる歴史をわかりやすく説明してくれる。

一方、特別展示室では、常設展示でカバーできない分野の企画をたて、約2カ月の間隔で展示替えを行っている。その活動内容は、年3回程度の特別展と、その中間期に4回ほどの企画展を開く形で進めてきた。これまで実施してきた特別展のパターンは、常滑の歴史上に登場する人物を深く掘り下げ、その人物像からその時代背景にいたるまでを描くような企画、常滑市域の窯業以外の民俗資料と、常滑焼との関係をテーマとする企画、中世陶器に関する企画、知多地方の遺跡出土資料を題材とする企画、陶器以外の市内美術工芸系文

化財に関する企画などに分類できる。一方、企画展では、寄贈された多くの資料で常設展示に使われなかったものの中からテーマごとにまとめて展示する方法、発掘調査で出土した遺物と遺跡の写真パネルで速報的に展示する方法、常滑の風景の中に散見される民俗資料を風景写真とともに展示する方法などで構成している。特別展示室における展示活動は、ほぼ上記の如きパターンで続けられてきたのであるが、その主題は、常に常滑・知多半島をフィールドとした郷土文化の再評価、再認識という点に置いている。職員数4名（うち学芸員1名）、館の運営に関する年間予算150万円程度という状況では、資料の運送費もほとんどないに等しい訳である。このような中で、特別展、企画展を構成していくためには、常滑という土壌で培われてきた文化をその要素ごとにまとめ一般市民の認識を深め、あるいはまた誤解をとくような身近な企画へ必然的に行きつくわけである。テーマがいかに関心のあるものであってもその背景にある時代性あるいは、人間の交流は、一定の地域で完結するものではないが、地元に残る豊富な資料をもとに、そのテーマを掘り下げ、掘り起こすという主題の設定は、小規模館の一つの方向性を示すものと考えられる。

講座室は、100人程度の人員を収容できる部屋で8ミリフィルム、16ミリフィルム、スライド等の視聴覚器材が揃っている。開館以来、資料館講座として常滑の焼き物や文化財に関する講座、あるいは講演会を年2～3回実施してきた。しかし、この方面については、準備不足のまま見切り発車してしまう場合が多く、今後検討の余地が残されている。特に企画の段階で受講者層の関心のありかがなかなか把握しきれない点、そして4～5回にわたり講師の話を聴くだけで区切ってしまう御仕着的な講座になりがちな点が問題である。博物館が対象とする専門性をもった分野の教育にあつては、行政主導型の社会教育などで定型化しつつ

ある市民講座、婦人学級といった一般教養普及活動とは、性格を異にするものであると考えられる。学習に対し、主体性をもち継続的に取り組んでいける個人の育成という方向をもつため当館では、58年秋に実施した第二回古文書講座を契機に自主グループを結成してもらい、ある程度自主性をもった活動を進めて頂く試みを行っている。

〈4 今後の課題〉

以上、常滑市民俗資料館の建設に至る経緯と館の内容、そして開館後の活動について私見を混じえながら事例報告的にまとめたのであるが、最後に当館の今後の課題をいくつかとりあげまとめたい。

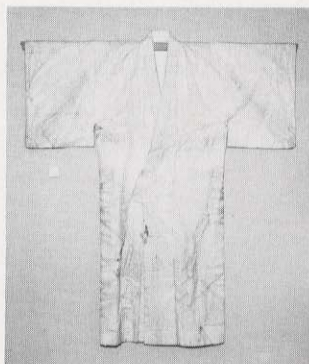
今日、都市の無個性化が進む中で個性的な魅力をもった街づくりの必要性が広く求められている。その町の性格、魅力を構成する要素の中で、町の辿ってきた歴史や民俗性を示す象徴、そしてそれらを育んできた自然等々の博物館が掌握する分野は、非常に大きな比重を占めているのである。それらの資料を町から切り難し博物館の中へ集中させていく方向は、ある意味で館に入らなかったものを切り捨てていくという道に進みかねない。しかしそれらの資料が生きていた風土・環境もまた貴重な資料であり、町は、民俗資料館なのである。町の歴史的、民俗的、つまりは人間的な個性・魅力を守り育てていくための博物館・資料館のあり方は、大きな課題である。常滑の町には、まだまだそうした魅力が備わっているからであろうか、市外・県外からかなり多くの人々が訪れる。当館への来館者もまた70パーセント近くがそうした人々である。それを裏返せば、当館が市民の中に定着した資料館とは、まだまだいい難いという現状である。対市民向けの活動と理解者の組織化は、その点で急務である。最後に文中当館の職員構成について触れたが、知多半島というかなりまとまりをもった文化圏の中には、当館と類似した施設がいくつかある（東海市郷土資料館、大府市

歴史民俗資料館、知多市民俗資料館、半田市立博物館、武豊町も59年設立予定）。2年ほど前に、これらの施設の学芸員5名が集まり、知多地方学芸員連絡協議会を発足させ相互の情報交換や遺跡、陶芸作家の工房見学など細々と活動を行っている。小規模館のかかえる問題を克服していくためには、当然協力が必要であり、今後この方面の活動を充実させていくべきであろう。

（常滑市民俗資料館学芸員 中野晴久）



（機構人間 市立名古屋科学館）



（紙子（紙衣） 和紙展示館）

モンキー友の会の社会接近

モンキー友の会とは

昭和31年創設当初の財団法人日本モンキーセンター附属博物館内外の普及活動の第一歩として、博物館の一般普及のために、まずモンキー友の会を結成せざるをえなかったことは、今日における博物館への社会評価の高まりを知る者には、意外な思いがするのではなかろうか。現在、大多数の公立博物館では、当然のことのように館内事業の一貫として友の会が組織され、年間計画にもとづいて、会員の多数参加によって友の会が運営され、博物館活動が進められている現状である。

モンキー友の会が結成された昭和32年には、東海地方には博物館協力のための友の会は、ほとんどといてみるものがなかった。東海地方におけるユニークなサル博物館、とくに、それが霊長類研究機関日本モンキーセンター附属博物館として犬山野猿公苑が開設されたのは昭和31年、であった。設立後日の浅い日本モンキーセンターでは、東海地方の自然や動物への関心を高め、自然教育の場としての犬山野猿公苑の運営を考え、モンキーセンターそのものを知ってもらい、支援層を拡大し、博物館支持を求めている試みである友の会活動にも期待がかけられた。友の会に課せられた使命は、何よりも野猿公苑に見学者を集めることにあり、モンキーセンターというユニークな霊長類研究機関を一般の方々に知ってもらうことであった。出発時から、学校教育、理科・生物担当の教員を運営協力者として、これらモンキー友の会の幹事による指導、協力をえて、雑誌モンキーの刊行や、月例会としての自然観察会を行ってきた。博物館と学校を結ぶ働きかけにはかならない。一体、博物館友の会の本来あるべき姿は何であるか、今日博物館界でもしばしば問題となっている昨今

であるが、モンキーセンターでは、館普及への期待が著しく強いものであった。サルという動物への関心が、当時全国的にひろがってきた野猿公苑の急増化現象もあって、次第に一般の間でも高まりつつはあったが、モンキーセンターへの一般認識はきわめて低い状況にあった。したがって会員も少なく、例会参加者も少なかったが、サルの博物館における資料および施設の充実と共に、犬山野猿公苑の機能開発、栗栖地区モンキーアパートの開設にともなって、自然観察例会も活発となり、雑誌モンキーの購読者層も増加した。モンキーセンターは博物館の普及事業の一環として友の会の運営をはかったこともあって、日本モンキーセンター普及事業への参加会員を維持するという形態をもちながら友の会を発展させていったのであり、博物館事業のもつ普及性は重要である。

博物館学芸部門の充実と共に友の会は、小・中学生会員を中心とする例会会員と雑誌モンキーの購読会員を中心とする購読会員の二会員制をとり、規模も大きくなったが、博物館普及事業として日本モンキーセンター普及事業費でまかなわれ今日にいたっている。したがってモンキー友の会は会員自身による運営の形態をとらず、モンキーセンター博物館の企画する事業の利用者として、会員は諸博物館活動に参加したのである。

友の会の実践と博物館

博物館友の会の運営をめぐるのは、博物館のそれぞれの館の事情によってその運営形態がことなっているのは当然である。

モンキー友の会は、学芸部学芸員を中心とした博物館教育プログラムを、運営幹事会との協議をへて年間計画を樹立している。とくに月例会としての身近な自然を学ぶ自然観察指導会は、27年間にわたる実践事業であり、今日まで無事故で実施できたことは幸いである。サルは、もともと自然の中の生物であり、環境への適応度の高い存在であるが、環境のしくみを知り、自然の保護や野生

動物の保護に係わる自然科学の勉強会の今日的意義は一段と高いものとなってきた。

博物館定期刊行物としてのモンキー誌は、博物館の普及と博物館専門誌の性格をもつサルに関するユニークな刊行物であり、年間6冊、240頁が発行され、購読者1,000名に頒布されている。例会、講読会員あわせて今日も、1,500名の会員があるが、例会会員は、土曜の午後は無料で入館できる。友の会出身の成人たちは、講読会員とし、研究者、教育者として博物館活動に多大な関心を寄せてくれている。モンキーセンターのもつ野外博物館としての性格が、理解されるのも、例会を中心とした館内外の自然接触の学習であるといえよう。犬山市域住民からの自然例会へ寄せる期待は大きい。

友の会の将来

近年モンキー友の会の強化策として、運営組織、協力スタッフ等に意欲的なとりくみを試みている。モンキーの編集にも博物館各部門スタッフの積極的な参画を企画している。サル類博物館における魅力づくりの延長線上にある館内外普及事業は、サルの博物館もまた生涯学習センターの性格をもち、社会教育をになう機関であることが一層自明の理となってきたことから、さらに将来にむけて事業構想の幅をひろげつつあるのである。

「友の会」は一日にしてならず、まことに学校・社会両教育の先人たちの力づよい支援なくしては、博物館友の会は育ちえない。現代博物館にお

ける機能の一つとしての友の会は、博物館職員あげての博物館奉仕事業の性格の強いもののようである。

モンキー友の会の27年

モンキー友の会結成以来今日まで友の会事業の実践にたずさわって多くの体験をうることができた。モンキー誌一つとりあげてみても、学校教育に、博物館普及に、専門科学に多様な迫り方をしてきたのであるが、霊長類の単科博物館としてのサル学研究の急速な発展が、特異な博物館雑誌としての性格を維持せしめた。今日、読者の多くは研究者、獣医、技術者を含む動物園関係者、博物館関係者、教育、社会教育関係者、さらに一般人からなりたっている。霊長類学の普及や、サルの博物館の諸活動の紹介は動物園界においても他に例をみないユニークなものである。今日でこそ、自然保護・環境教育が、時代の一つの焦点になっているが、友の会発足当時、東海地方には自然学習の組織はほとんど見当たらなかった。愛知・岐阜にまたがる自然環境の教材化、開発のためには多くの試みがなされた。理科展、サマースクールその他の普及活動を進めることができたのは友の会あればこそである。

博物館は博物館支援の幅ひろい協力者、支持者を求め今日も活動をつづけているのである。

(日本モンキーセンター学芸部長 広瀬 鎮)



(友の会)

市立名古屋科学館の

当初構想とその後の見直し

1 誕生時の構想

近年の目覚ましい科学技術の進歩や経済の発展は、科学技術についても生涯学習を必要とする時代をもたらした。それらの需要にこたえるため、従来から各種の機関、施設が学習の場を提供している。しかし科学技術について市民レベルでの生涯学習を促進するために、理工学博物館の果たす役割が極めて大きいことは、アメリカ合衆国の例などからみても明らかである。ところが国内では、本格的な理工学博物館は20数年前までは存在しないも同然であった。しかし1960年代に入ると、東京、名古屋に大型科学館が設置され、ようやく理工学博物館の黎明期を迎えた。

市立名古屋科学館（以下科学館という）は昭和37年に市制70周年記念事業の一つとして開設されたが、当時の目的としては、国民全体が科学を容易に理解し、その応用によって新しい技術を創造する意欲と動機を与えるのに適した社会教育の場を提供することにあるとされ、それらを実現するため、

- 広範な科学のうち物理学、化学及び工学に限定すること
- 科学の原理がだれにでも理解されるように実物、模型やそれらの動作によって面白く示されると同時に、科学の応用による技術創造の成果をわかりやすく、また興味あるように展示すること
- 対象とする観覧者は青少年（主として中・高校生）とし、あわせて一般大衆や小学生への啓蒙も考えること

などを考慮しながら展示室や大型プラネタリウムを設置するとした。

以来20余年の間、国内有数の理工学博物館の一

つとして延900万人余の利用者を迎えてきた。一方、開館当時では予想し得なかった分野での新しい知見も次々と発表され、理工学博物館として取り上げる分野についても、新たな展開、拡張を求められるようになった。

2 科学館の新たな対象分野

科学技術は、深化と同時に分化と統合をも進め多くの新分野を開拓し発展させているが、その中でも、とくにエネルギー、物質、情報、生命、宇宙などを対象とする分野での発展が著しい。そこで、対象分野を開館当時からの物理学、化学、工学から上記5分野とそれらの境界領域へと拡張し、科学技術のほとんどすべてを網羅するとともに、今後開拓されるであろう新分野にも対応できるように工夫した。

現在、科学技術は、その先端をますます高度化し直截的理解を得ることは困難になっている。そのため、展示だけでなく利用者に対して積極的な教育普及活動を展開することが重要になってくる。また、これらの活動を支えるため、対象分野について各種の科学館資料及びそれらに関連ある情報の収集・整理と利用のための調査・研究も不可欠のものとなっている。

3 新たな展示分野など

科学技術の進歩発展に支えられ我々の生活も著しい発展をとげてきた。しかし一方では、自然破壊、環境汚染の地球的規模での広まり、資源とエネルギーの有限性、都市の急膨張など多くの困難な問題に直面している。これらは科学技術の人類への貢献という光のいわば影に相当する部分であり、その解決のため重視されるようになったのがライフサイエンスであり、新しい学際的科学である環境科学である。一方経済の発展により日常生活においても快適さ便利さが追求されるようになって、従来からの生活の科学も新たな視点から生涯学習の課題となってきた。そこで、生命の科学を中心に生活、環境の2テーマを加え、それらの

テーマから発する課題をさまざまな角度から提示し、直接あるいは間接に解答を用意する展示と、それらにかかる教育普及活動を展開することを求められるようになった。ところが20余年を経過した科学館には前述のテーマに施設を割く余地がなく、新たに施設拡張の必要が生じた。

4 新館の建設構想とその役割

科学館は本館と天文館の2棟の建物から構成され約15,000平方メートルの規模を持っているが、近年の法規制などから別館建設という形態を採用しなければならなくなっている。その内部には複数の展示室と相当規模の講堂などが予定されている。新館では前述した3テーマを取り上げ、最新の展示技術を駆使した展示室を設置すると同時にAV設備を完備した講堂を設置し、利用者のうちの団体観覧者へ積極的なオリエンテーションを恒常的に実施することになっている。

科学技術の進歩は著しく、場合によっては展示から得られる情報が数年を経ずして陳腐化することも多い。これらの短所を補うため、従来から設置してある相談コーナーや図書室などを統合強化し、新たに映像を含めた情報提供のコーナーを設けることも考慮されている。また、これらの施設だけでは生涯学習の場として不十分であり、有効な利用をはかるにはさまざまな手段を用いて学習意欲が誘発されるように配慮されなければならない。そのため、展示や、集団を対象とするオリエンテーションだけでなく、個々の学習者からの要望に対応できる、きめ細かな学習プログラムを用意し利用できる場所が不可欠となり、各種学習室の整備が必要となる。

5 新展示室の構想

計画されている新展示室は、展示構想を実現できるだけの広さを持つと同時に観覧者が快適かつ疲労少なく順行できるように、照明、色彩、材料などを吟味し、順路などについても留意しながら以下のような項目について展示することとなる

いる。

生命の科学

生命の起源と進化　ひと—その出生から死まで—　人体—その構造とはたらき—　生命をおびやかすもの　健康の医学　バイオテクノロジーとバイオニクス

生活の科学

衣の科学　食物の科学　住居の科学　くらしと科学

環境の科学

地球の誕生　環境の影響　変化する地球　あすの地球

6 見直しの制度化

昭和56—57年にわたり、20数年ぶりに科学館の構想について見直しを市立名古屋科学館西館建設調査委員会によって実施し、一定の成果を得た。しかし、構想自体は決して永久不変のものではなく、科学技術の進歩や時代の要請に応じて常に見直しを実施し必要な修正をほどこしてゆかなければならないであろう。また、西館以外の本館、天文館以外について、展示項目などの見直しは今後の課題となっていた。

前述の構想を引き継いで、このたび本館、天文館の長期構想の策定と、その恒常的な見直しを制度とし確立できることになった。この制度は、企画調査委員の名称の下に専門委員として、

- 科学館資料（科学に関する資料及び装置）の収集及び展示の調査研究に関すること
- その他科学館資料の専門的な調査研究に関すること

の事項について、館長の依頼を受け諮問に応ずるとしている。

この制度の確立によって、専門的事項において質的保証の途を開いたともいえるのではないだろうか。

（市立名古屋科学館学術係長　三輪　克）

神社仏閣における

文化財の意味

神社仏閣における文化財は、それぞれ神社においては社宝、仏閣においては寺宝と呼ばれる場合が多い。この中には、建造物や無形の文化財、史跡等が除外されている場合が多く、通常美術工芸品を指していると理解してよいであろう。即ち、絵画・彫刻・工芸品・書跡及び典籍・古文書・考古資料・歴史資料などがこれにあたる。

昭和54年現在で、我国を代表する美術工芸品の国宝・重要文化財の所蔵者状況をみると、国宝約800件中、神社所蔵約70件、仏閣所蔵約360件で計430件にのぼる。これに神社仏閣旧蔵を加えると450件に至る。これは総件数の実に54%を占めるが、重要文化財を含めると、神社仏閣の所有率はさらに増加し、60%をこえるであろう。これに建造物及び神社仏閣に関わりの深い無形文化財・史跡等を加えるならば、その所蔵率は実に65%に達する。残り35%が、博物館・個人・財団等の所蔵ということになる。

この数値から、いかに多くの文化財が神社仏閣に集中しているかが知れるが、これら我国を代表する多くの文化財が、今日主として神社仏閣に伝えられている意味を考え直す必要があるのではないかと思う。それがひいては我国の文化を知る上で重要な意味を持つ事に気付くであろう。

神社における文化財は、その内容において、下記に区分されるのではなかろうか。

- (1)絵画——縁起絵巻・祭神靈験絵詞・神祇的な信仰を持つ高僧絵伝等の説話絵画類
神像画・仏教曼荼羅に対する神道曼荼羅等の礼拝対象絵画類
祭礼図・祭礼絵巻等の祭礼絵画類
社頭絵図・建築指図・絵馬
その他

- (2)彫刻——神像・随神像等の礼拝対象彫刻類
祭祀具及び荘厳具
狗犬・神馬類
その他

- (3)工芸——祭祀遺物等の神道考古遺物
御正体等の神体造形類（除神像等）
神宝・調度（神服・幣・蓋・鈴・鏡・鉾・剣・弓・箭・手筥・扇・琴等）等の宗教的慣習の造形である神物類
その他

- (4)書跡——神号類
典籍 祭文・祝詞類
古文書類
日記・記録類
典籍・經典類
詩歌・俳諧類
書跡・墨跡類
金石文・拓本類
版木・棟札・木札類
その他の歴史資料

他方、仏閣における文化財の内容区分は、概ね下記の通りであろう。

- (1)絵画——密教曼荼羅及びその他の曼荼羅
仏伝図及び来迎図類
如来・菩薩・明王・天部・羅漢各図類
(2)工芸——宝塔・舍利塔・鏡像・御正体・懸仏類
法具・仏具（密教法具その他）
堂内荘厳具類
厨子
笈・斧・鉾類
鰐口・鉦鼓類
鐘類
燈籠類
(3)調刻——菩薩（弥勒・観音・勢至・文殊・普賢
地藏・その他）
如来
天部

明王（不動・隆三世・軍荼利・大威徳
金剛夜叉・その他）

十大弟子・羅漢

八部衆

その他（宿星他）

垂迹像

肖像（高僧）

仮面

動物

(4)書跡——墨跡（印可・字号・法語・偈頌・遺偈
典籍 餞別語・進道語・額字）

經典（一切經・多数經願經・大般若經
・法華經・阿弥陀經・金光明最勝王經・
華嚴經・金光明經・その他經律論疏類・
撰述書・聖教類・目錄音義類・史伝類・
血脈・講式類）・寺院関係文書類

以上が内容区分の概略であるが、神社における文化財（通称神道美術）と異なり教義内容を異にする仏教美術は、むしろ下記の様な包括分類の方が性格を示していると思う。

①原始小乗仏教美術 ②大乘仏教美術 ③密教美術
④浄土教美術 ⑤本地垂迹美術 ⑥禅宗美術
等に区分されると思うが、いずれも神社仏閣の成立から今日に至る長い歴史の中で保有されたものといえる。

これらの多くが、元来文化財として収集されたものでなく、専ら各々がその目的を持って使用され、活用されて今日に至り、結果として文化的価値を有するものとなったと言った方が正しい。同時に、これらの文化財は、発生から現在、そして将来へと機能を果たしつつあるものが大半である事を決して忘れてはならない。

文化財の保護は、現在より将来へ貴重な文化財を伝える大切な使命を持っている。神社仏閣における文化財も同様に将来へ機能させ続けなければならないであろう。これらの文化財は、神社仏閣と密接な関係にあり、莊嚴を保持する為の道具で

あり、祭礼や法会を執行する為の用具であり、信仰を広め知らせる為のものであり、信仰対象そのものであったりする。長い歴史の中で、信仰形態を知る上での貴重な社宝であり、寺宝である。即ち、神社仏閣が時代の変遷の中で、各々の性格を築きあげようとした信仰の印しであり、精神文化の所産が神社仏閣における有形の文化財として今日に伝えられたものである。もちろん、これら有形の文化財に限られたものでなく、神事・法会・その他の芸能等無形の文化財とも密接な関係を持っている。

しかし、今日これら神社仏閣における有形の文化財が、美術的評価を受ける事が多いが、その背景にある精神的な要素に重点が注がれていない事は残念である。このことは、我国の文化行政が、有形文化財保護を中心として運営なされて来た事にも要因があるが、昭和50年に文化財保護法の改訂が行われたのもその反省に立ったものであろう。しかし、これにも限度があり、先の指摘を充たし得るものではあり得ない。

神社仏閣における社宝・寺宝は、文化財と呼ばれる性格のものではない！と力説する所有者は実に多い。その多くが、文化財という行政的なニュアンスに、又美術的価値観に反発されるもので、個々の物に対する見方が他の人々と大きく異なる。

この様に所有者の多くが、これら社宝・寺宝の多くを、いかに精神的な観点でとらえているかを知るべきであろう。しかし、今日一般に社宝・寺宝を単なる美術品としてとらえる事に慣れてしまったし、博物館関係者自体にも同様のことがいえるのではなからうか。逆に行政的な面だけでなく、神社・仏閣自体も問い直す必要がありはしないだろうか。それは、社宝・寺宝と称するものが、文化財的価値を与えられる事により、逆に文化財的要素を発揮する方向に動きだした様に思われ、その大きな原動力になったのが、文化財展覧である。

そして、その役目を担ったのが博物館展覧である。

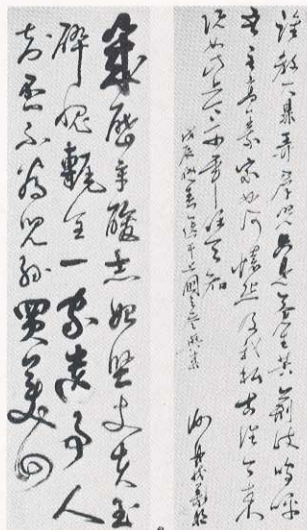
ここに名物の茶碗があるとす。これを展覧するの、博物館展示室という限られたスペースでいかにこの茶碗を活かすか、なかなか難しい。しかし、この茶碗を単なる美術品として見るならば、美術効果を重点にした美術展示を行う事は、それ程難しい事ではないが、茶道という精神文化の中でこれを活かす展示となると、非常に困難な面が多い。かように、茶器の持つ生命は美的要素だけでなく、茶の道と言う精神文化の中で、本来の性格と美しさを作り出すものであろう。

茶碗を例にとってみたが、神社仏閣の社宝・寺宝も真にこれに通じるものであり、それ以上に精神的な要素を内在するものであろうと思う。

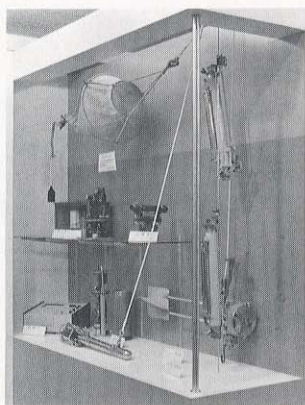
我国の博物館は、ある限定された建物の中に他と分離した形で、物を中心にその使命を果たして来た文化といえる。かような状況を考えた場合、我国の博物館は、総じて文化を継承し、発展させる場には成り得ない。真の文化の発展にも、創造にもとばしい場所といえるのではなからうか。これは“物を見る為の博物館”的性格が強いが故であらう。

文化の創造は、精神的バックボーンが不可欠である事は、従来指摘されて来た事であるが、神社仏閣の歴史をみれば理解できるのではなからうか。

(熱田神宮宝物館学芸員 山田 蓉)



(勝海舟筆・西郷隆盛筆 古橋懷古館)



(海洋調査器機 碧南市青少年海の科学館)

愛知県博物館協会加盟施設一覧

番号の () 印は県立及び市立施設

連続番号 施 設 名 郵便番号 所 在 地 電 話

〈尾 張 地 区〉

(1)	国 宝 犬 山 城	484	犬山市大字大山字北古券65の2	(0568)61-1711
2	犬山自然植物園	484	犬山市大字大山字官林2の1	(0568)61-0870
3	財団法人 日本モンキーセンター	484	犬山市大山官林26	(0568)62-6823
4	財団法人 博物館明治村	484	犬山市字内山1	(0568)67-0314
5	財団法人 岩田洗心館	484	犬山市富士見町26番地	(0568)61-4634
6	財団法人 リトルワールド	484	犬山市大字今井字成沢90-48	(0568)62-5611
(7)	一宮市教育委員会 博物館建設準備事務局	491	一宮市本町通八丁目11番地	(0568)72-2343
(8)	小牧市歴史館(小牧城)	485	小牧市大字小牧633の1	(0568)72-2101
(9)	常滑市立陶芸研究所	479	常滑市奥条七丁目22番地	(05693)5-3970
(10)	常滑市民俗資料館	479	常滑市瀬木町四丁目203番地	(05693)4-5290
(11)	東海市立平洲記念館・郷土資料館	476	東海市荒尾町蜂ヶ尻67番地	(0560)64-4141
(12)	知多市民俗資料館	478	知多市緑町12番地の2	(0562)33-1571
(13)	大府市歴史民俗資料館	474	大府市桃山町5丁目180-1	(0562)48-1809
(14)	半田市郷土資料館	575	半田市北末広町6番地	(0569)22-3270
(15)	瀬戸市歴史民俗資料館	489	瀬戸市東松山町1番地	(0561)82-0687
(16)	愛知県陶磁資料館	489	瀬戸市南山口町234番地	(0561)84-7474
17	蟹江町歴史民俗資料館	497	海部郡蟹江町大字今字蟹江浦23	(05679)5-3812
18	美和町歴史民俗資料館	490-12	海部郡美和町大字花正字七反地1番	(0560)42-8522
19	東郷町郷土資料館	470-01	愛知郡東郷町大字春木字申下1337	(05613)9-0511
20	清洲貝殻山貝塚資料館	452	西春日井郡清洲町朝日字貝塚1	(0560)49-1467
(21)	稲沢市荻須記念美術館	492	稲沢市稲沢町前田365-8	(0587)23-3300
22	マスプロ電工美術館	470-21	愛知郡日進町浅田	(052)802-2222
23	財団法人 かみや美術館	475	半田市有脇町10丁目8-9	(0569)29-2626
24	財団法人 晴 嵐 館	483	江南市大海道町青木22番地	(05875)6-3170

〈名 古 屋 地 区〉

(25)	名古屋城天守閣	460	名古屋市中区本丸1番1号	(052)231-1700
------	---------	-----	--------------	---------------

26) 市立名古屋科学館	460	名古屋市中区栄二丁目17番22号	(052)201-4486
27 大 須 文 庫 (真福寺文庫)	460	名古屋市中区大須二丁目21番47号 (大須観音宝生院内)	(052)231-6525
28 切支丹遺蹟博物館 (宗教法人栄国寺)	460	名古屋市中区橘一丁目21番38号	(052)321-5307
29 徳川美術館(財団法人徳川黎明会)	461	名古屋市中区徳川町1017番地	(052)935-6262
30) 愛知県文化会館美術館	461	名古屋市中区東桜一丁目12番1号	(052)971-5511
31) 名古屋市東山総合公園動植物園	464	名古屋市中種区東山元町3の70	(052)782-2111
32 荒木集成館	468	名古屋市中白区天白町大字平針字黒石 2878-1883	(052)802-2531
33 熱田神宮宝物館	456	名古屋市熱田区神宮一丁目1番1号	(052)671-0852
34) 名古屋市博物館	467	名古屋市瑞穂区瑞穂通一丁目27番地	(052)853-2655
35 名古屋昆虫館	467	名古屋市瑞穂区駒場町4-1	(052)841-8664
36 昭和美術館(財団法人後藤報恩会)	466	名古屋市昭和区汐見町4の1	(052)832-5851
37 鈴木そろばん博物館	456	名古屋市熱田区伝馬1丁目5番6号	(052)671-4753
38) 名古屋市見晴台考古資料館	457	名古屋市中南区見晴町47番地	(052)823-3200
39 桑山美術館(財団法人桑山清山会)	466	名古屋市中昭和区山中町2丁目12番地	(052)763-5188
40 財団法人 ヒマラヤ美術館	453	名古屋市中村区太閤一丁目23番1号	(052)452-8150
41 東海銀行貨幣資料館	460	名古屋市中区錦三丁目21番24号	(052)211-1111
42 電気文化会館建設事務局 (中部電力広報室)	461-91	名古屋市中区東新町1番地	(052)951-8211

〈三 河 地 区〉

43) 三河武士のやかた家康館	444	岡崎市康生町561番地	(0564)24-2204
44 岡崎信用金庫資料館 (業務管理部業務企画課)	444-91	岡崎市菅生町字元菅41	(0564)21-6111
45) 碧南市青少年海の科学館 碧南海浜水族館	447	碧南市浜町2番3	(0566)48-3761
46 三好町立歴史民俗資料館	470-02	西加茂郡三好町大字三好字陣取44-1	(05613)4-5000
47 和紙のふるさと展示館	470-05	西加茂郡小原村永太郎216-1	(056565)2151
48 豊田市郷土資料館	471	豊田市陣中町一丁目21番地	(0565)32-6561
49 香嵐溪ヘビセンター〔㈱東海観光〕	444-23	東加茂郡足助町大字岩神字築瀬1	(0565)62-1777
50 蒲郡フラワーパーク	443	蒲郡市竹島町28番5号	(0533)68-1101
51 設楽町立奥三河郷土館	441-23	北設楽郡設楽町大字田口字アラコ14	(05366)2-1440
52 奥三河御園高原自然学習村	449-02	北設楽郡東栄町大字御園字坂場	(05367)6-1491
53 東栄町立博物館(併設民俗館)	449-02	北設楽郡東栄町大字本郷字大森3	(05367)6-0437
54 財団法人 古橋懐古館	441-25	北設楽郡稲武町稲橋タヒラ8	(053682)2100
55 鳳来町立鳳来寺山自然科学博物館	441-19	南設楽郡鳳来町門谷字森脇6番地	(05363)5-1001
56 鳳来町立長篠城趾史跡保存館	441-16	南設楽郡鳳来町長篠字市場22	(05363)2-0162
57 ヨコタ南方民族美術館	442	豊川市桜ヶ丘町79-2	(05338)5-3775
58 田 原 博 物 館 (華山文庫)	441-34	渥美郡田原町大字田原字巴江12の1	(05312)2-1700
59 伊良湖自然科学博物館	441-36	渥美郡渥美町大字伊良湖字宮下3000の65	(05313)5-6631

(60) 豊橋市美術博物館	440	豊橋市今橋町3番地	(0532)51-2621
(61) 蒲郡市郷土資料館	443	蒲郡市栄町1188番地	(0533)68-1881
(62) 豊橋市地下資源館	441-31	豊橋市大岩町字火打坂19の16	(0532)41-2833
63 吉良町歴史民俗資料館	444-06	幡豆郡吉良町大字白浜新田字宮前59番地1	(05633)2-3373
64 渥美町郷土資料館	441-36	渥美郡渥美町古田字岡ノ越6番地の4	(05313)3-1111
(65) 刈谷市美術館	448	刈谷市住吉町4丁目5番地	(0566)23-1636

編 集 後 記

昭和39年1月16日発足の愛知県博物館協会も、
本年で20年を経過するに至った。

協会実行委員による20年史編集委員会も、度々の会合をもって編集案を固めていったのであるが、本誌が東海地方において戦後博物館活動の推進力の中心となった愛博協の過去・現在・未来にわたる特色ある記録の収録、そして読ませる刊行物として、博物館関係者のみでなく、巾広い支持者をも得たいと考え、特別企画となったことは幸いであった。

各実行委員から寄せられた事例研究等は、本誌の活動が、意義ある文化事業として地域社会に如何に評価されていったかを示していると思う。協

会創立以来、様々なかたちで当会へ関与下さった方々の思いは、今日なお大変熱っぽく、若手学芸員の意欲的な発言の数々は、実に建設であった。また、生涯学習時代における博物館への市民の要望は、現実的なものに集約された感があった。

本誌は、愛博協20年の歩みを正しく伝えと共に、愛博協加盟館の発展に役立つ一資料にならないことを切に希望して已まないものである。

最後に、本誌刊行に関し、御協賛賜りました博物館関係各社に対し厚く御礼申し上げます。

(愛知県博物館協会20年史編集委員)

昭和59年9月1日発行

愛 知 県 博 物 館 協 会 20 年 史

発 行 ㊟489 愛知県瀬戸市南山口町234番地
愛知県陶磁資料館内

愛 知 県 博 物 館 協 会
〈0561〉84-7474

印 刷 ㊟466 名古屋市昭和区白金1丁目11番10号
竹 田 印 刷 株 式 会 社

DISPLAY & INTERIOR

DESIGN & PLANNING FOR EXHIBITION DISPLAY NEON SIGN & CONSTRUCTION



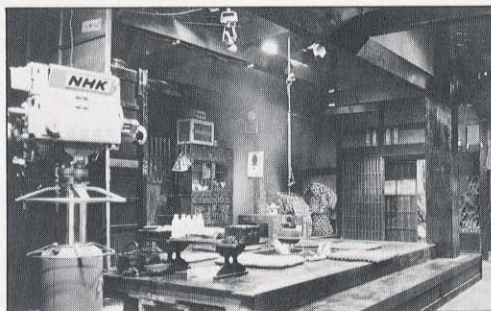
インテリア



屋外媒体



博覧会



テレビセット

ディスプレイ・イベントのことならお任せ下さい。
企画から設計・施工まで各セクションが一体と
なって多様化するニーズにお応えいたします。
お気軽にご相談下さい。

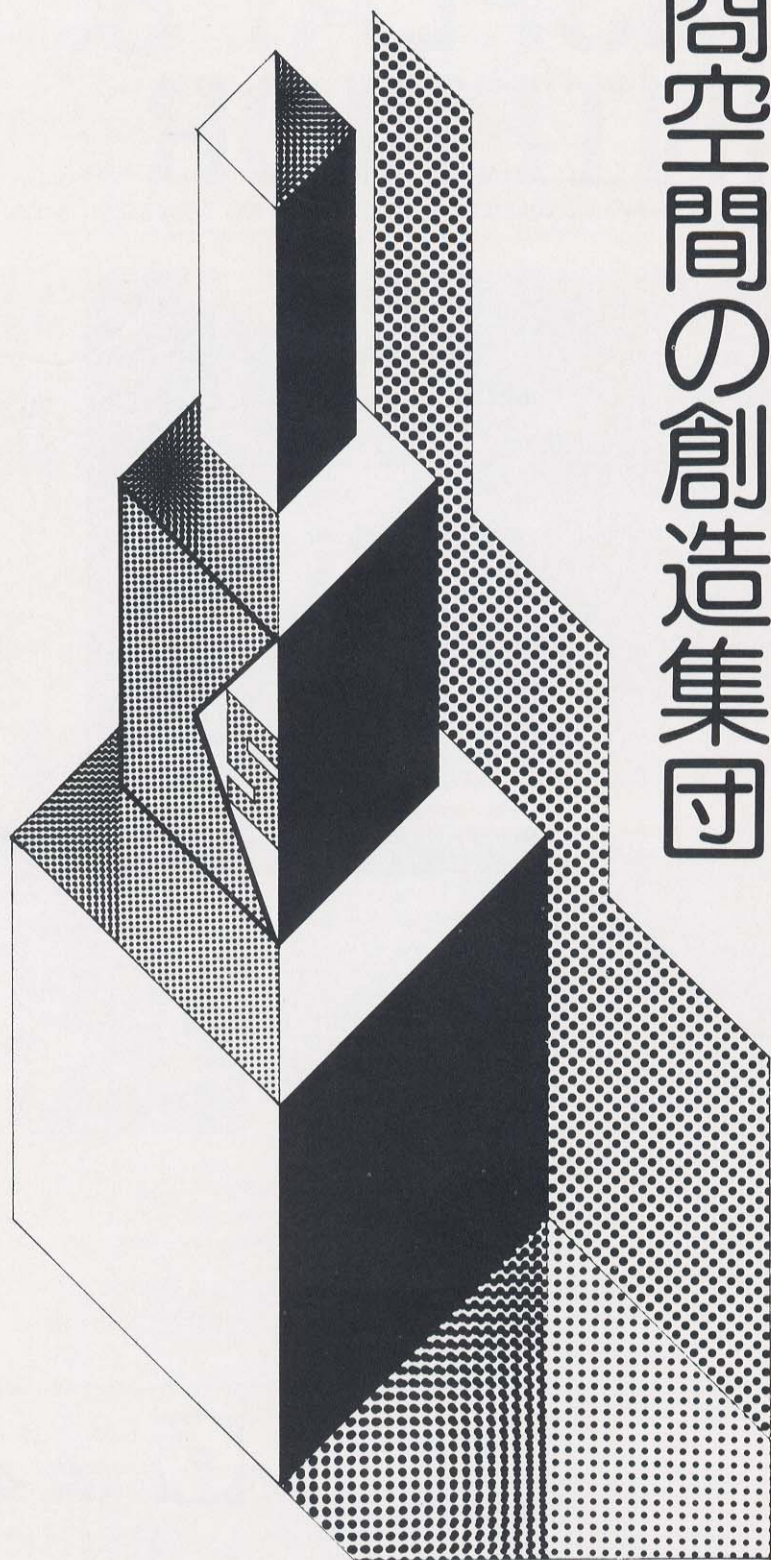
- 博覧会・展示会
- ディスプレイ・TVセット
- インテリア・電飾
- 設計制作・総合建設



株式会社
中央工芸

本社 名古屋市北区西味簗1-847 TEL (052)901-7141代
静岡支社 静岡市 浜谷 6-22-4 TEL (0542)61-5305代

商空間の創造集団



カトウスタジオ

〒453 本社 名古屋市 中村区 太閤通4-68 ☎471・3141 (代)
〒453 工場 名古屋市中村区 若宮町2-4 ☎471・2201 (代)

知的情報をかたちにするシステム

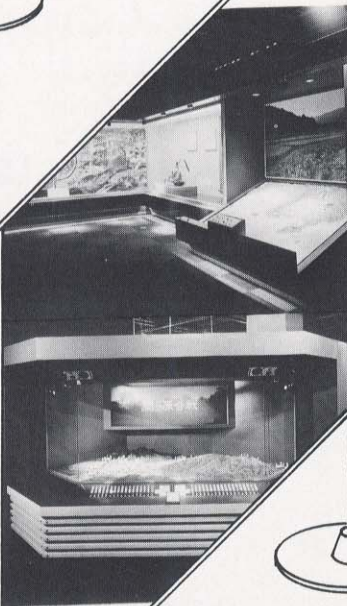
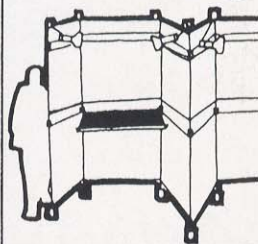
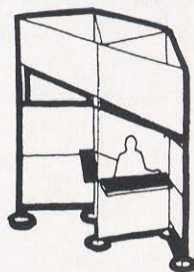
MarlerHaley

ExpoSystems

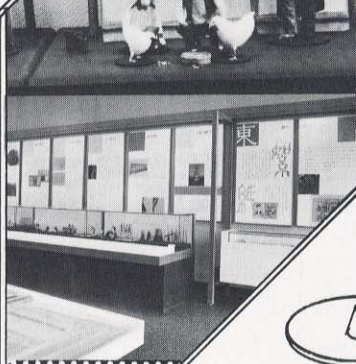
イギリスのマーラー・ヘーリー社が開発し、世界で使われているすぐれたディスプレイシステムです。日本の皆様には日展がおとけいたします。



人間博物館リトルワールド
テーマ展示(エクスポシステム
による展開)



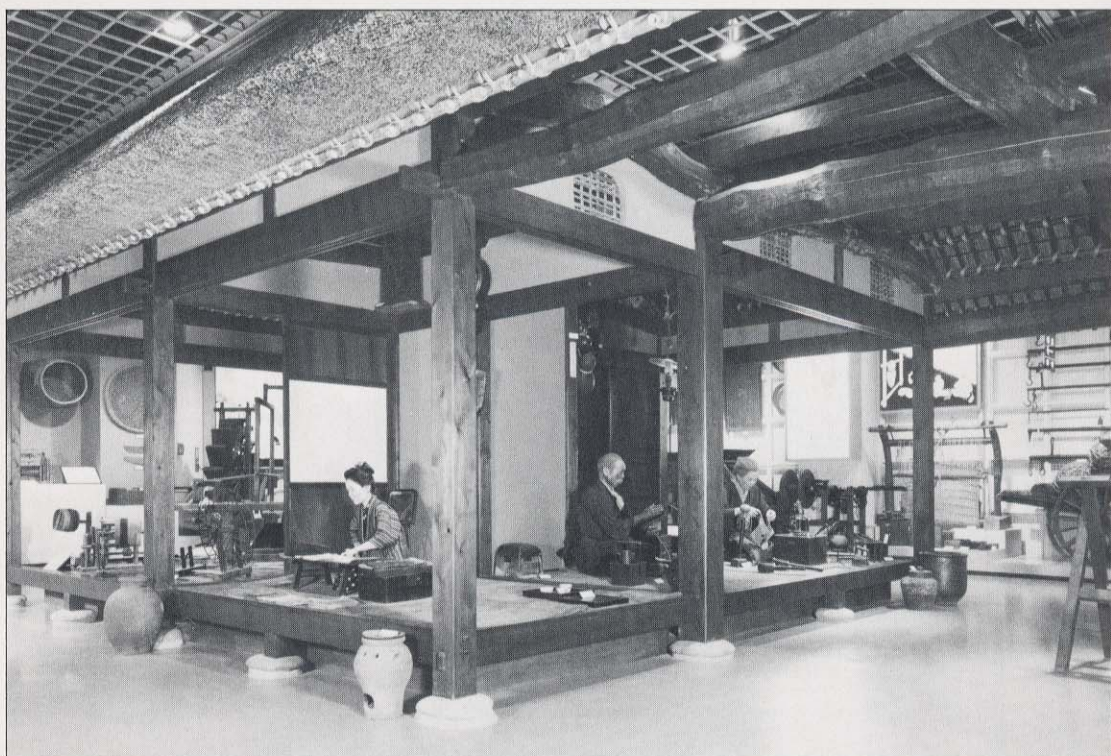
三河武士のやかた 家康館(岡崎市)



和紙のふるさと 和紙展示館(愛知県・小原村)

b total display
NITTEN
株式会社 **日展**

名古屋市中村区熊野町2丁目22ノ1
〒453 電話 052 471-5166 代表
本社 大阪市北区万才町3番7号
〒530 電話 06 361-2031 代表
東京都台東区東上野6丁目21番6号 電03 843-4111
神戸市中央区御幸通6丁目1-12 三宮ビル東館6F 電078 232-3731
金沢市彦三町2丁目5番27号 名鉄北陸開発ビル
電 0762-22-3707



その土地の、その良さを企画する

昔の人たちの生活、衣食住、生産や村のしくみ、信仰・芸能の起源、変遷など、地方性を明らかにする歴史民俗資料館の展示企画は、今日のようにそれら伝統の継承がむずかしくなりつつある時代にあっては、大そう意義のある仕事である。その土地に根ざし、その土地でなければ作り得ないものは、その土地の知識をもつ人たちの克明なイメージを収集して立案される企画から生み出される。個性的で表情豊かな地域づくりに役立ち、地方文化を語り伝える資料館づくりに貢献できることが幸わせます。

ニホン
NIHON DISPLAY
ディスプレイ

本 社／名古屋市港区正保町2-3 〒455
TEL<052>381-8245(代表)

企画室／名古屋市中区栄3-13-16 〒460
TEL<052>251-7485

制作室／名古屋市中川区西中島1-1317 〒454
TEL<052>383-6665



歴史や科学は面白い

過去を再現し
今を見つめ
未来を創造する
時間と空間は人類の舞台



空間コミュニケーションの創造

ディスプレイとインテリアの総合プランナー



アイチスタオ

本社	〒460	名古屋市中区千代田五丁目4番22号	TEL (052) 261-0431
中川工場	〒454	名古屋市中川区大畑町2丁目91番地	TEL (052) 361-2666

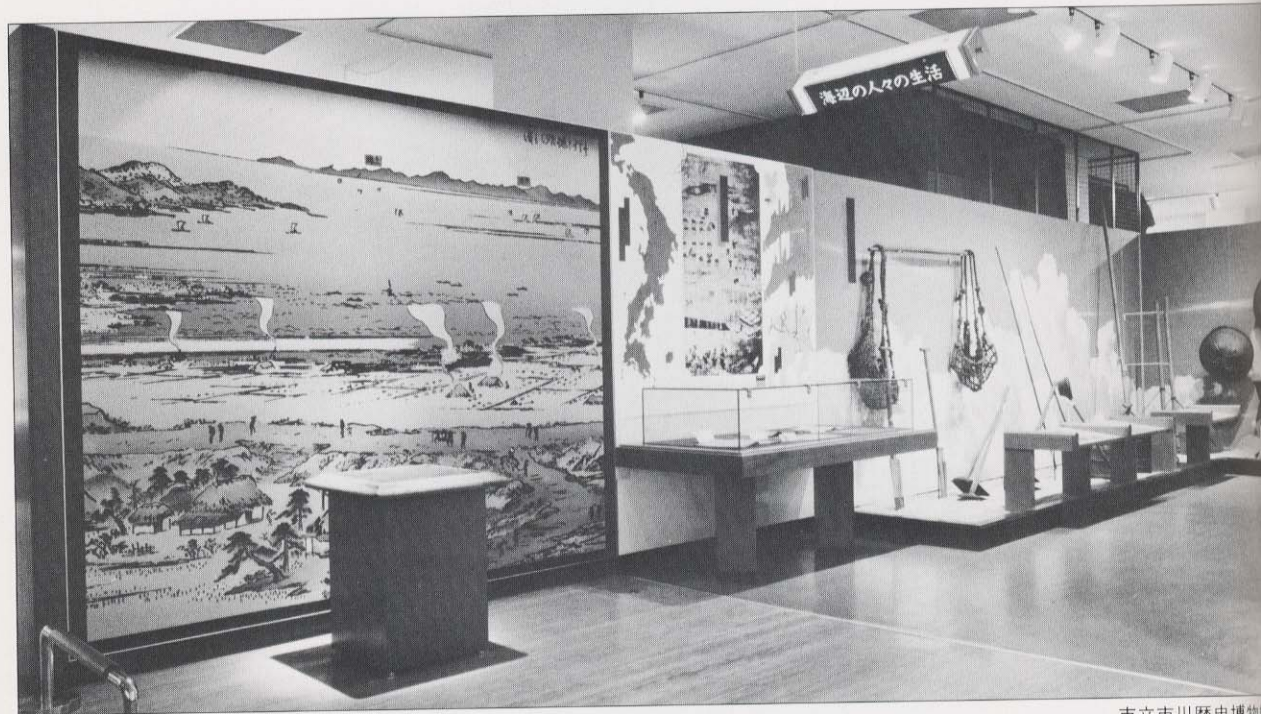
展示がえに不便を感じていませんか？

私たちは204館の実績の中から
博物館の展示装置を研究開発してきました
固定的な展示は、新しい研究に対応した展示ができません
フレキシブルに展示がえができる
丹青社ウォールシステムを御提案します
これからも、さらによりよい展示をめざして
丹青社は歩きつづけます

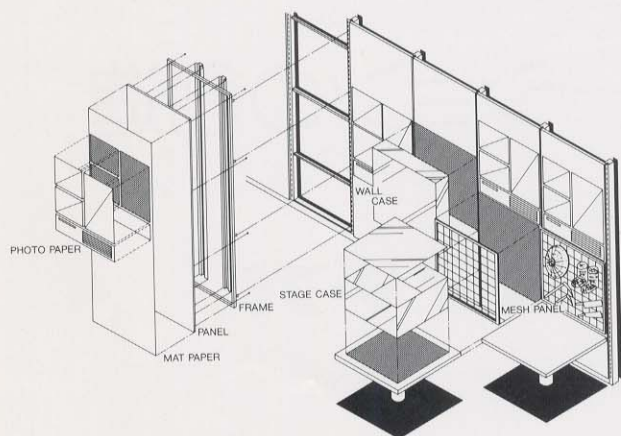
株式会社 丹青社

TEL. 03-255-0833

〒101 東京都千代田区外神田3丁目8番9号 昌徳ビル3階

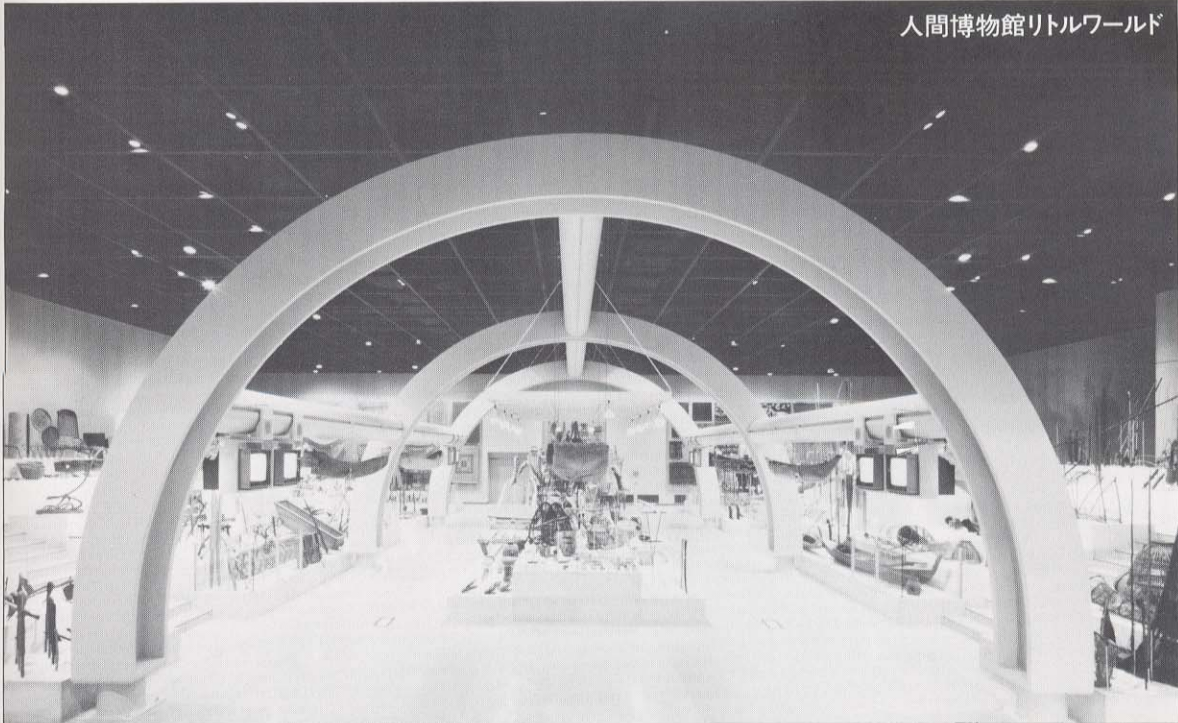


市立市川歴史博物館



■丹青社ウォールシステム

- 壁体主構造は、天井と床面に上下レールを取付け、この下レール内に支柱をはめ込む、垂直支持方式の壁面展示システムです。
- 強度に秀れた特殊成形のシステム支柱に、各種のアタッチメントが取付けられます。
- パネル、ガラスケース、取付パーツなど全てを組み合わせて、フレキシブルに構成することができます。
- 内装工事と展示システムの一体化でコストを低減できます。
- ノックダウン工法で、現場作業の省力、省時間により、コストセービングができます。
- モジュールの統一と標準化により、スクラップアンドビルが容易となり、改装等のランニングコストを低減できます。
- どのような支柱間隔ピッチにも対応が可能です。
- 特殊な技術や工具は不用です。だれにでも簡単に組み立てられます。
- 工業所有権数点出願中。



"こころの躍動"は展示になり得るか。

物質文化から、精神文化へ。

来たるべき新世紀に臨み、

私たちは、"展示"による感動の創出を目指します。

限界への挑戦こそが、

つねに変わらぬ、私たちのテーマです。

NOMURA
display

株式会社 乃村工藝社
文化施設部

本社：東京都港区芝浦4-6-4・電話03-455-1171代表
東京・大阪・札幌・仙台・岐阜・神戸・岡山・福岡・鹿児島・シンガポール

人文・自然科学からニューテクノロジー領域にいたる

博物館・資料館の展示

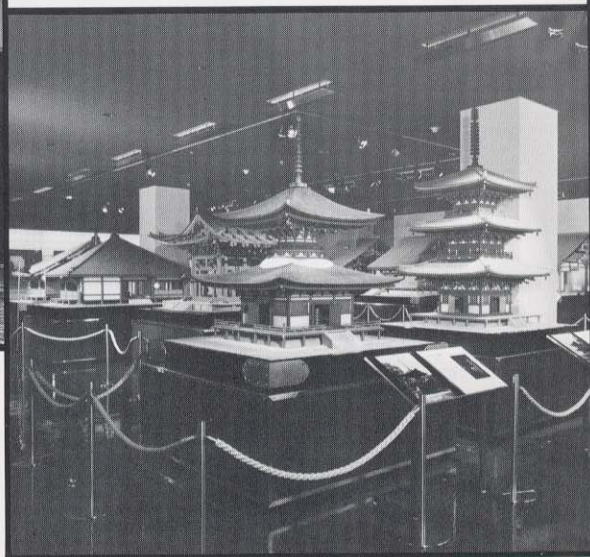


熊野磨崖仏如来形像（大分県立宇佐歴史民俗資料館納入）

文化財・
古生物化石の
復原・複製

「伝統と実績」

確かなる模型づくり、
その緻密さは
人々に感銘を与えます。



日本の建築（国立歴史民俗博物館納入）

企画・設計
制作・施工



京都科学標本株式会社

本社 京都市伏見区下鳥羽渡瀬町35-1

TEL (075)621-2225(代) 〒612

東京営業所 東京都千代田区内神田1-14-5 島津ビル6F TEL(03)291-5231(代) 〒101

技術で創造する

National
松下電工



博物館の快適なあかりをトータルに提案します。

不特定多数の人が、入れかわり立ちかわりで利用する博物館や美術館。貴重な民俗資料や絵画、さらには精巧多彩な美術品を快適に鑑賞していただくためには、照明設備もフロアごとに光の演出が求められます。

あかり本来の機能に加え、経済性、高級感、自在性、演色性、または見やすい照度やフロアごとの快適性、時には展示物を際立てるドラマチックな演出も要求されます。

松下電工では、光学技術、調光制御技術など、蓄積されたノウハウと、EC(エンジニアリングセンター)を初め幅広いブレンが、空間演出から器具デザインまでお手伝い。博物館・美術館に最適な照明をトータルにご提案いたします。

ナショナル照明設備

●お問い合わせは、(〒450)名古屋市中村区名駅南2の7の55 松下電工・名古屋エンジニアリングセンター ☎(052)586-1061

文化財の保存は **ガスくん蒸** で

文化財は、われわれの祖先が残してくれた貴重な文化遺産です。

これをいかにして保存し、子孫に伝えるかが現代に生きるわれわれの使命です。



江戸時代中期民家及び収蔵品被覆くん蒸

〈豊田市郷土資料館〉

◇文化財の燻蒸方法◇

◆ 常圧燻蒸法

被覆燻蒸法

密閉燻蒸法

燻蒸庫(室)燻蒸

包み込み燻蒸

◆ 減圧燻蒸法

(真空装置による燻蒸)

博物館・資料館・神社仏閣・図書館

- ガス燻蒸による殺虫殺菌防除 ● シロアリ、キクイムシ等防除
- 衛生害虫防除施工 ● 衣類害虫防除施工 ● 不快害虫防除施工

(財)文化財虫害研究所特別維持会員
日本家屋害虫学会々員

(社)日本しろあり対策協会々員
(社)日本ペストコントロール協会々員



中部資材株式会社

本 社 名古屋市港区入船二丁目4番6号

〒455 TEL 052-661-7235

四日市支店 0593-53-1211
衣浦出張所 0569-21-3563
蒲郡出張所 0533-69-4195
南部サービスセンター 05625-5-1218

敦賀支店 07702-2-0236
内浦出張所 07702-2-2457
金沢出張所 0762-63-0901
豊橋出張所 0532-31-4495



Exhibition of Giacomo Manzù.



ヤマト運輸株式会社

社 東京都中央区銀座2-12-16 ☎ 104
 電 話 東京 (03) 541-3411 (大代表)
 国際輸送部 名古屋美術梱包営業所
 名古屋市中川区広住町5番22号
 電話 052 (362) 1421
 支店・営業所…東京・大阪・名古屋・福岡

弊社が美術品取扱いの拠点を名古屋に設けましたのが丁度17年前のことでした。爾来数々の展覧会を取扱ってこれましたのも皆様方の御支援と御協力の賜と深く感謝しております。

弊社は、大正8年11月29日設立されて以来当社の歩んで来た道は必ずしも平坦ではありませんでした。当時は自動車は全国に7,000台でその殆んどを乗用車が占めトラックは204台しかありませんでした。このうちの4台のトラックで始めた運送事業でした。翌年の経済恐慌も何んとかのりこえ、大正12年には東京―横浜間の定期輸送を開始したのが成功し、また関東大震災後の復興資材の輸送需要に支えられて経営基盤が確立されたのであります。

昭和初頭より関東一円に路線トラック網を形成し、「大和便」の名で一般住民の皆さんに親しまれ、このほか一般区域事業も着々と発展し社業は大きく飛躍してまいったのであります。

戦後はいち早く運送のデパートをめざし通運、航空、海運、梱包、旅客等新規の分野に積極的に進出を図ってまいりました。国際分野におきましても世界各国の主要都市に拠点をもうけ世界のヤマトを目指しております。近年は「クロネコヤマトの宅急便」で一般の方々に御愛顧を賜わり、58年度は扱い個数1億個を突破し業界トップの座を占めております。

美術関係の分野におきましても美術品の取り扱いを開始いたしまして足かけ30年目を迎えておりますが、これまで数々の国内展、外国展を取扱ってまいりまし

た。貴重な人類の遺産、世界の名作といわれる各種美術品の取扱いには想像以上の神経と高度な技術が要求されます。梱包から開梱、展示作業まで細心の注意をもって慎重な扱い、しかも指揮者の指揮に従うという原点に常にかえりながら作業を続けております。又一般の方々の公募展等の輸送も1点でも2点でも御家庭から集荷梱包発送まで心よくお引き受けしております。

1977年から開始されました「国際美術品輸送業者会議」(International Convention of Exhibition and Fine art Transporters)にも毎年参加しており・1983年は京都と東京で開催され、世界各国から30社、100名の参加を得て、美術品の取り扱いの研究、保安、通関等共通の課題について活発な討論を交わし有意義な会議となっております。

弊社におきましても「美術梱包技術研究所」を東京の芝浦に設け、技術開発と資材、器材等の研究にあたっております。又湿度、温度、空調完備の美術品センターを設け、美術品の保管、外国展出陳品の内容点検等市広く利用されております。

過去取り扱いました主な展覧会は

門外不出の名作「メトロポリタン美術館展」
 現代絵画の父「ポール・セザンヌ展」
 炎の画家 「ヴァン・ゴッホ展」
 パリの哀愁 「ユトリロ展」
 ナイルの遺産「エジプト展」
 世界の秘宝 「大ヴァチカン展」

他となっております。

「美」の絆も 輸送技術に信頼がないければ 結べません。

国宝、文化財級の美術品から愛蔵品まで、この道一筋の専門技術と長い経験がそれらの輸送、保存に真価を発揮します。

日本通運株式会社では、どんな困難な条件のもとでも安心してお任せいただける専門の技術者と最新の設備を運用し自信をもって皆様のご期待にお応えいたします。

美術品輸送システム



名古屋支店美術品課 TEL (052) 551-8161(代)

名古屋市中村区名駅南四丁目11番39号